
機動戦士ガンダム00 - おとぎの世界へ -

窓側 指定席

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00 - おとぎの世界へ -

【Nコード】

N5039Y

【作者名】

窓側 指定席

【あらすじ】

ELSとの対話を終えて地球に帰還した刹那とお年を召されて益々魅力的になって甘え上手になったマリナ様は、ようやく人並みにキャッキャウフフな生活を送ることができるようになりました。

しかし、二人の甘い生活は長くは続きませんでした。魔界の悪魔達が、マリナ様と、マリナを守る刹那とダブルオークアンタを抹殺しに来たのです！

この物語は再び刹那がマリナ様とキャッキャウフフするために、最

強最悪なMHや騎士が跋扈するジョーカー太陽星団に殴り込み、もとい、マリナ様と対話するお話です。

本作品ではオリジナル設定が多分に入っています。途中、マリナ様が御崩御されたり神様や悪魔が出てきたりすることが普通にあります。オリ設定が苦手な人はご注意くださいませ。

また、この小説には年齢的に若いピチピチの女性はまず登場しませんのでこちらも期待しない方が良いかも？本作品のヒロインズは皆お年を召された女性ばかりで構成されております。

色々至らない点があると思いますが誤字脱字のご指摘や、感想お待ちしております。

登場人物・メカニック（前書き）

登場人物とメカニックの紹介です。

ガンダム00は知っているけどFSSはちょっと、という読者向けページですがネタバレを含んでいますのでご注意ください。
物語の進行に合わせて随時更新します。

登場人物・メカニック

□ 登場人物

・マリナ・イスマイル

本作品のヒロイン。本作品で一番無茶な設定がされている。

御年??歳になりました。アザディスタン王国復興のために一生を捧げ、女性として一人の母親ではなく国民の母親になることを選んだため生涯独身を貫き通した。晩年は光を失うなど引退後も苦労したようだ。ひっそりと隠居生活を送っていたが1年前に刹那が地球に帰還したことにより一緒に住み始める。刹那と住み始めたことにより日々心が若返っえり、今では刹那に対して甘え上手になっている。

フェルトとは親友で二人で刹那を弄るのが大好き。ELSダブルオークアンタに懐かれている。

・ラキシス

本作品のもう一人のヒロイン。

星団歴3293年にK・O・Gと共にカラムティ星の爆発に巻き込まれて様々な時空や次元を彷徨って西暦1945年に地球にやってきた。

長い間バルト海に眠り22世紀頃に地球から旅立ったはずだが、再びK・O・Gと共に地球に舞い戻った。

マリナと刹那の行く末を心配している。

・刹那・F・セイエイ

本作品の主人公。

E L Sと融合した事によりイノベーターでもなく人類でもない新たな生命体になってしまった我らが主人公。

マリナと一緒に過ごすようになり家政夫としてスキルアップしたようだ。

・ファルク・ユーゲントリツヒ・ログナー

A・K・D・構成国の一つ、バビロン王国の王であり、ミラージ
ユ騎士団の総司令。

皆から司令と呼ばれている。何故か地球で奥様と暗躍中。

どうやらラキシスとは別に目的があつて地球にやってきたらしい。
本作品中恐らく最強の方だが、ラキシスからはムツツリスケベだ
と思われている。

・フェルト・グレイス

ソレスタルビーイングの宇宙航行船プトレマイオスの元オペレー
ター。

刹那がE L Sとの対話で地球を不在にしていた際はマリナを支え
ていた。現在はマリナとは女同士の友情で結ばれた仲。

最近はマリナと二人で刹那を弄るのが楽しみ。

ソレスタルビーイング解散後はミレイナと共に起業するなど活躍
を見せる。現在は高齢のため会長職に退いている。

・ミレイナ・ヴァステイ

ソレスタルビーイングの宇宙船プトレマイオスの元戦況オペレー
ター。独特の喋り方は今も代わらず。

両親の遺児となったG N T - 0000「E」E L Sダブルオーク
アンタのメインメカニック。

ソレスタルビーイング解散後はフェルト共に企業するなど活躍を見せる。近年良い取引先に恵まれ多忙の日々を送っている。

本作品ではメインヒロイン2名を除いてガンダム勢では一番美しい女性という設定。

・ソーニャ・カーリン

ミレイナの取引先の営業部長。

ミレイナの社長室に飾られていた写真から刹那とマリナを発見する。

その正体はログナーの奥様、イエッタさん。

・シーリン・バフティヤール

マリナ・イスマイルの親友であり、マリナと刹那の良き理解者で、二人の同棲を仕組んだ張本人。

このためマリナに惚気話に散々聞かされていたようだ。だが、うんざりかと思いきや、マリナからやっと惚気話が聞けるようになったかと内心喜んでいる。

マリナと刹那、両方の良き相談相手。眼鏡の似合う可愛いお婆ちゃん。

・スメラギ・李・ノリエガ

ソレスタルビーイングの元戦術予報士。現在はという訳か、ライバルであるカティ・マネキンと仲良く老人介護施設に入所中。

作戦からプライベートまで刹那の良き相談相手の綺麗なお婆ちゃん。

だが密かに刹那を狙っているようで、マリナに次いで刹那にアタックを仕掛けてくる。

・悪魔

マリナの魂の輪廻転生を阻止するために地球圏に現れた謎の外骨格生物。

6本の指、背中にはコウモリのような翼と尻尾を生やしている。サタン（S・A・T・A・N・）とも言われている。

軍隊のように一般兵士、コマンダー等の階級があり一般兵士でもランザム状態のMSと互角以上の戦いを繰り広げる。

体長はある程度自由に変えられるようだが、およそ一般兵士で12m程度、指揮官クラスのコマンダーでは15m程度（いずれも肩高）の大きさである。

宇宙区間でも自由に動き回ることが可能な上にレーザーライフルや実剣、斧など様々な武器を操る。更に次元航行艦等を有するなど高度な科学力も持つ。相手の魂を抜き去ったり、永久機関の停止、呪いをかける等、その名の通り悪魔じみた力も持っている。

□メカニック紹介

・ELSダブルオークアンタ

刹那と共にELSと対話の旅に出かけて帰ってきたら、やっぱりダブルオークアンタもELSと融合していました。

対話の道中で様々な世界・文明の技術が取り入れられているようだが、管制システムの構築が追いついていない。

事実上の刹那専用機であるが、マリナに懐いているためマリナ単独でも動かせるらしい（座っていれば良いだけという話も）

主力武装はGNソードV。名称は当時のままだが射程距離・破壊力・切断力は比較にならないほど強化されている。

通常は背中 of 触手部に格納されている。

対話の道中、刹那達がメンテナンスを依頼した技師がGNソード

Vを『これは戦士の銃だ』と評したとか云々。

この技師は登場しません。たぶん。

また、モーフイングシステム等ELSと関係した能力を持っているらしい。

本作品では、もう1機の主役メカ？と共に無茶な扱いをされる。

・K・O・G・ラキシス（ディステイニー・ミラージュ）

ラキシスと共に様々な時空や次元を彷徨い再び地球に帰ってきた。本作品でのもう1機の主役メカ、というよりも黄金の巨人。

原作上でも本作品上でも最強のMH。本作品ではディステイニーと呼ばれている。

地球連邦軍でのコールサインは「ゴールド・ソード（金の剣）」。
ハグーダ戦でのコールサインをそのまま使用しているが、これはラキシスの希望でヴェーダに登録された。

半透明でキラキラ輝く黄金の装甲が目立ちすぎなのが悩みの種。
無茶な扱いをされるELSダブルオークアンタには何かシンパシーを感じているようだ。クアンタ不在の際のお留守番役。

・ガデラーザII

ガデラーザの再設計機。コストダウンのため搭載するGNドライヴ「I」の数を減らす代わりに生産性を高めた機体。

戦闘能力は初代ガデラーザより数段落るが、その代わり電子戦・情報処理能力が格段に向上している。

これは戦闘空域での指揮・管制を担うためでブレイヴ2機とのコンビネーションで運用を行うためだ。

・ブレイヴII

ブレイヴ正式採用機の後継機。GNドライブの性能向上によりGNドライブの数は最終的に1個になっている。

オリジナルGNドライブもしくはGNドライブ「T」を搭載可能。ガデラーザを母艦としてガデラーザ1機、ブレイヴ2機で小隊を組む。

GN-Xパイロットから何故か目の敵にされている。

・GN-X VI

GN-X Vの発展強化型。オリジナルGNドライブもしくはGNドライブ「T」を搭載可能。

コアファイターシステムを採用しておりパイロットの生存性を高める措置が施されている。

ソレスタルビーイングの旧ガンダムタイプを博物館入りさせるほどの汎用高性能機。

GNビームライフル、GNロングバレル、GNバスターソードの他にも長距離GNブースター、粒子増加タンクなど多彩なオプションを装備可能。

・悪魔の次元航行艦

悪魔達がマリナ暗殺に使用した小型艇で、ガデラーザよりやや小さい280m級。悪魔4人で操艦を行う。

外燃機関を搭載しているためガデラーザIIを翻弄する程の機動力を持つ。短距離から長距離までワープが可能など悪魔達の科学技術は地球のソレを大幅に上回っている事がうかがい知れる。

第1話「もう、それなら刹那が食べさせて?」(前書き)

西暦2365年、地球。

刹那・F・セイエイがELSとの対話から地球に帰還して1年が経っていた。

物語はここから始まる。

第1話「もう、それなら刹那が食べさせて?。」

アザデイスタン王国某所。

王国の中心部から離れた一軒家に、本作品のヒロインであるその老婆と青年が暮らしていた。

ドアを叩く音が数回

「おはよう、マリナ。今日の朝の目覚めはどうだ?ひとりで起き上がる事は出来るか?」

若者が室内の人物に声をかける。

この一軒家には長らく女主人である老婆しか住んでいなかったが、1年前から青年も一緒に住むようになった。

この一軒家には長らく外部の人間や女主人の知人が週に数回は食料や生活必需品を届けに来ていたのだが、この青年が突然一緒に住み始めた分かったときは軽い騒ぎになるところだった。

幸いにも女主人からの説得と、女主人の親友からの強い推薦もあり、こうして女主人の世話をこの青年にお願いする事に決まったわけである。

女主人とは表舞台から姿を消してこうして隠居の身となった元アザデイスタン王国皇女マリナ・イスマイルその人である。

アザデイスタン復興後、表舞台から姿を消したマリナ・イスマイルはアザデイスタン王国の某所にある別荘で隠居生活をおくっていた。荒廃したアザデイスタンを奇跡的に復興させ、かつては世間から聖女と言われ時の人ともなったマリナ・イスマイルではあったが、隠居後はマリナの元を訪れる人は少ない。

反アロウズ組織、カタロンの元に身を寄せていた時に世話をして

いたかつての子供達か前述の外部の人間、アザディスタン王宮の人間位とマリナの極一部の友人知人だろうか。

「ふぁ……おはよう、刹那。入っていいわ。今日は調子が良いみたい。ひとりで起きあがるから、刹那は見えていて」

青年の名前は刹那・F・セイエイ。ソレスタルビーニングのガンダムマイスターである。

51年前、外宇宙より来襲したELS（Extraterrestrial Living Metal Shapeshifter）「地球外変異性金属体」の地球侵攻を食い止めるため、彼は仲間であるティエリア・アーデと彼の乗機であるGNT-0000 ダブルオークアンタを駆ってELS本星へと対話の旅に出かけたのだ。

そして去年、50年の歳月をかけて自らもELSと融合する事により対話を達成させ、対話の旅から戻って来たのだ。そして、ここアザディスタン王国で隠居の身となったマリナ・イスマイルと再会したのだ。

あの日以来、刹那は年老いて光を失っていたマリナに寄り添っていた。いや、正確に言うと刹那ともう一人、いや一機と言った方が良いのだろうか？刹那と共に対話の旅から帰還したダブルオークアンタもマリナの元に居た。ELSとの対話の道中、様々な世界の技術・生物と融合したダブルオークアンタである。

刹那とダブルオークアンタが今のマリナの唯一のロイヤルガードである。

隠居した今、マリナの命を狙うような暗殺者は居ないだろうが、もしも「そのような事態になっても」刹那は出来る限り対話で解決を図るだろう。

一軒家の朝の寝室に話を戻す。

先に起きて朝食の支度を終えたエプロンを身につけたままの刹那がマリナを起こしに来たのである。もともとマリナも、マリナに気を使って毎日こっそり起きる刹那に合わせて一度は起きているのだが、刹那がそれを知っているのかはわからない。

刹那が寝室に入ると今まさにマリナが起き上がるところだった。マリナがベットに取り付けられた手摺りを探そうと手を動かすと、ベットに半分埋め込まれた赤い球体がグルグル回り出して、ベットの手摺りがせり上がり、手摺りの方がマリナの手に近づいていく。マリナは自動追尾してくる手摺りに捉まると弱々しくも立ち上がる。とする。

刹那はマリナを信用しているが、体が万が一を考えマリナの前に先回りをしていつでも支えられるように素早く体勢を整える。しかし、

「刹那、今日は大丈夫よ」

そんな刹那の気配を察してマリナが釘を差す。

人間は光を失うと別の感覚が研ぎ澄まさるというが、イノベーターである刹那の動きを気配で感じ取るとはマリナとは何者だろうか。マリナは刹那の気配を察したのではない。刹那なら必ず支えようとするだろうと思っていたからだ。それは何故か。そんな野暮な事で字数を割くのは勿体ないので割愛する。

マリナはついにベットから立ち上がり一步目を踏み出す。二歩、三歩とマリナの歩みは続く。

刹那は内心ハラハラしながらもマリナの歩みを見守る。そんな刹那の心情を刹那に融合したE.L.Sも共有している事をマリナは知らない。

「確かに今日は調子が良いようだな」

「フフ、ありがとう刹那」

刹那はマリナの手をとり寝室の一角に設けられているドレッサーの前に誘導すると、ベッドに埋め込まれていた球体が自発的に外れてこちらに転がって来た。

「マリナ、着替えが終わったなら教えてくれ。ハロ、マリナのサポートを頼む」

「マカサレタ、マカサレタ、マリナ、キガエテツダウ」

「ハロ、今日もお願いしますね。」

球体の正体はソレスタルビーイングでサポートメカとして使用していたハロである。

先ほどのマリナのベッドに半分埋め込まれていたのもマリナをサポートするためだ。マリナの生活用品の一部にはハロによるサポートが行われている。

刹那はマリナの手に着替えを渡すと寝室から一旦退室する。年老いたとはいえマリナはレディである。マリナは刹那の優しさに感謝しながら渡された洋服に着替えを始める。

寝室の扉の外では刹那が両目を輝かせて脳量子波による通信を行っていた。通信先は別荘外のダブルオークアンタである。

「今朝のマリナの状態をデータ送信してくれ」

ハロが健康状態をモニタリングしているのだ。ハロから送られたデータをダブルオークアンタが更に別の場所にデータ送信する。

このデータ送信は毎朝の日課である。健康状態のモニタリングもデータ送信しているのはマリナも承知済みである。だからこそ、ハロによるサポートも受け入れているのである。

ダブルオークアンタ経由で刹那の元に通信が入る。

『おはよう、刹那。今日もマリナさんの健康状態は変わっていないわ』

ダブルオークアンタを経由する理由は通信傍受を防ぐためと、ソレスタルビーイングの仲間同士での通信の為である。

そう、通信の相手というのは……

「おはよう、フェルト。そうか……」

『それでも、以前診てみた時よりも進行はゆっくりにはなっているわ。』

フェルト・グレイス。ソレスタルビーイング、宇宙航行船プロレマイオスの元オペレーターである。

刹那がELSとの対話のために地球を去ったELS戦後、アザデイスタン王国復興に奔走するマリナを影からささえていたのだった。ソレスタル・ビーイング解散後は、時々マリナの元を訪れ精神面・健康面の両方を支えていたのだ。

ゲリラの少年兵として、ソレスタルビーイングのガンダムマイスターとして世界に変革をもたらすために多くの命のやりとりをしてきた刹那でも、フェルトからの返信にやりきれない気持ちになる。

『私もそちらに伺う予定だから、その時に詳しく診察するわ』

マリナとフェルトは刹那に対しては、それぞれ想う気持ちがあつたが今ではこうして交流があるのだ。

「わかった。ありがとう」

『ああ、刹那。それとダブルオークアンタも診察の対象だ、そうです。』

「うん？」

刹那がフェルトに聞いたさうとしたとき

「刹那、着替えが終わりました」

「キガエオワッタ、セツナ、ムカイニコイ、ムカイニコイ」

言い終わる前に寝室のマリナから明るい声がかかる。

「また後で詳しい話を聞かせてくれ」

刹那はフェルトとの通信を切り上げると寝室の中のマリナを向かいに行った。

『刹那、ただの人間である私達は貴方と一緒に居られる時間は少ないのよ……』

刹那との通信が切れた後、フェルトは目を伏せながら独語していた。

刹那に着替えを終えたマリナを鏡台の前に座らせるとマリナを髪を梳かし始める。レディの身だしなみは大切なのである。

刹那がどこでそんな気配りや技術？を身につけたのか？察しの通り、フェルト達元ソレスタルビーイングの女性陣である。刹那にレディと対話の方法を頑張つて教え込んだのだ。

それでも、現在のダブルオークアンタのメインメカニックの女史曰く赤点ギリギリだそうだが。

刹那がマリナの手を取りながら食卓にエスコートする。その様子がかつての仲間が見たら「刹那、お前は本当に変わったなあ」と冷やかしの対象になる位、エスコートは板につていた。

食卓には朝食はトーストにハムエッグ、コーヒー・ミルクが並べられている。刹那がガンダムマイスター時代に教育された最低限の調理技術から用意できる朝食のレパートリーは決して多くはないがそれでもマリナの口に合うように調理されていた。手の込んだ食事はマリナ指示の元「作成」することも出来るが、朝食は刹那単独で行うのでだいたい簡単である。

朝食が進むとマリナの方から刹那に話しかけてきた。

「刹那、私はもう良いから、私の分も食べて」

「いや、駄目だ。きちんと食べないと力がつかないぞ」

「もう、それなら刹那が食べさせて？」

「それは・・・尚更駄目だ。自分で出来ることは自分でする」

端から見ると仲の良い祖母と孫のやりとりに見えるが実体は老夫婦である。二人とも夫婦の自覚はないのがポイントである。そんな

いつもの朝食の光景が繰り広げられていた。

朝食を片付け終わると、一日の日課のはじまりである。

とはいえ、隠居後は特に日課というものもないが、刹那が帰還してからというもの、マリナを外に連れ出す機会が多くなった。場合によってはマリナの気分転換にと、『ちよつと遠くに』連れ出したりにもしていた。

今日のスケジュールはお弁当を持ってマリナと共に家の周りの散策、場合によっては『少しだけ』足を伸ばす予定である。ダブルオークアンタで『ちよつと遠くに少しだけ』といえば大凡どれくらいの距離か予想できるだろうか。

一軒家から歩いて10分の道のり。そこはかつて荒廃し多くの人間の血が流されたが、アザディスタン復興の証のように今では様々な花々が咲き乱れてる。

光を失ったマリナの光となった刹那は、マリナの手を取りながら花々のなかを歩く。

「少しペースを落とそうか？」

「いえ、これくらいでないとリハビリにはなりません」

「そうか、もう少しで座れる所にたどり着くから、頑張れ」

やはり、ここでも刹那がマリナに気を遣いながらエスコートする。刹那がマリナを「座れるところ」に案内すると、マリナが甘えたように両腕を刹那に突き出す。すると刹那はやや困ったそぶりを見せるがマリナの上半身を優しく抱きかかえる。

「ゆっくり腰をおろせ、そう、そうだ。」

刹那はマリナの上半身を抱きかかえながらマリナを『座れるところに座らせる。』

「今日はペースが早かったから少し疲れただろう？大丈夫か」

「大丈夫です。フフ、本当に刹那は心配性ですね」

マリナは刹那が居るだろう方向に顔を向けると微笑む。本当にあなたは、という顔をしている。

刹那も叶わないな、表情を見せるとマリナの隣に腰をおろし、マリナと咲き乱れる花々を楽しむ事にした。

「光を失っていても、こうしているだけでも花々が咲き乱れている様子がよくわかります」

マリナが刹那に話しかける。

マリナにとっても刹那にとってもこの場所はお気に入り場所だった。

するとグワツと刹那とマリナが腰をおろした部分が急に動き始め、大地から離れる。

マリナは「彼が」そうすることを初めてではない事に馴れていたのに怖くはなかったが反射的に刹那の手を握る。

二人が腰をおろした場所、それはダブルオークアンタの掌だった。花々を楽しんでいたのは刹那とマリナだけではない。彼と言って良いのかわからないがダブルオークアンタに同化しているELS達も同じだった。

「今日は貴方もご機嫌なのかしら」

マリナは刹那の手を握っていない掌で、ダブルオークアンタの掌を優しくなでる。

まるでマリナの問いかけに答えるように一瞬だけダブルオークアンタのツインアイが点滅した。

「そうかもしれん、な」

地上から数メートル浮かんだ場所で掌の昇降がとまる。ダブルオークアンタの装甲表面は花々に同化しており周りの風景にとけ込んでいたのだ。

ただ、遠くから見たら花模様の巨人の掌に座っているシュールで不思議な光景であつたが。

「刹那、今日はこの間の話の続きをお願いできないかしら」

「……マリナ、この前の続きという……宇宙を旅する少年と女性の話だったか？どこまで話をしたのか忘れてしまったな」

「あら、それは私の記憶力を試しているのかしら？貴方たちが、宇宙で出会った40人の海賊達と……」

マリナと刹那の会話にも花が咲く。そんな二人の様子をダブルオークアンタとELSが観察している。

心地よい風が二人の間を駆け抜けていった。

第1話「もう、それなら刹那が食べさせて?」(後書き)

次回予告

失った時間を取り戻すかのように刹那とマリナの幸せの時間が流れていた。

このまま幸せの時間はどこまで続くのだろうか。
そんな二人の元にかつての仲間が訪れる。

後書き

ついに第1話を投下してしまいました。

本作品が処女作のため至らぬ点多々あると思いますが今後ともよろしく願います。

基本的に出張中の移動時間が主執筆時間になりますので投稿スパンが空くかもしれません。どうか気長にお付き合いいただければ幸いです。

第2話「なんだこの居心地の悪さは？」（前書き）

本作品は完全オリジナルの話です。

第2話以降はオリジナル設定がバンバン出てきますのでご注意ください。

第2話「なんだこの居心地の悪さは？」

——うう、ここは？

私はゆっくりと瞼を開く。遠い昔光を失ったはずの私。ぼんやりと何かが見えてきた。
小さな光が瞬いている。

——あれは星？

——何年ぶりだろう、こうして自分の目で外を見るのは？

目が慣れてきたのか、徐々に像がはつきりしてくる。
よく見るとあたりは星々が一面に広がっていた。いや、一面所ではない。まるで私を包み込むように……。

——ここは、まさか！宇宙！？

私は宇宙に浮かんでいた。宇宙服も着ないで。いや、そもそも何も着ていない。

私は恐る恐る自分の両手を見る。手に皺が一つもない。

次に自分の胸を見る。乳房に張りがある。体にも皺がない。毛も白髪ではない。

鏡がないから自分の顔を見ることが出来ないが、私は今、若い頃の、生まれたままの姿になっている！？

——でも、何だろう不思議と恥ずかしくない。

——私はどうして、この場所に居るのだろうか？

私が疑問に思っていると、遠くで大きな光の玉が破裂し消えていく。

——今の光は？

私は光の玉が消えてしまう前にその方向に向かおうと意識を集中する。

すると私の体は光の方向に進み始めた！

——まるで、まるで私が刹那のガンダムのような。ウフフ。

光を失ってから籠もりがちだった私を刹那はガンダムで様々な所へ連れ出してくれた。

『ちよつとそこまで、だ』と行って遠い世界にも行ったわ。後でシーリンにバレて二人で怒られたっけ。

体だけじゃなくて、気持ちも若返ったのかしら。

——刹那に会いたい。でも、今の姿を見られるのは、ちよつと恥ずかしいかな？

何故か、あの光が消えてしまう前に行かないといけない気持ちが強くなる。

——トランザム？そんな言葉が私の頭をよぎる。でも大丈夫。

——光が消えてしまう前に何とか辿り着けそう。

——今の私はガンダムだから、速いんだから。

何かが見えてきた。あれは人形……？違う、巨人？

次第にはつきりと見えてくるに従って私は段々怖くなってくる。

あの巨人は……首と右腕がない！それに左足も膝から下が無くなっているようだ。

あの巨人、違う！あれはモビルスーツ。私は見たことがない。

——でも私はあのモビルスーツを知っている。

——忘れるものですか！あれは、あれは、あれが刹那のガンダム！
……！

刹那のガンダムは、ダブルオークアンタは、頭を吹き飛ばれ、右腕が切り落とされていた。

左足も膝から下がズタズタになっていた。背中から吹き出すはずの緑の粒子も見えない。

——刹那！クアンタ！お願い、返事をして頂戴！刹那！クアンタ！

必死で呼びかけても刹那もダブルオークアンタも答えてくれない。私は知らない間に泣いていた。

——あ、クアンタが動いた。刹那は無事なの！？お願い返事をして頂戴！

クアンタが微かに動き始める。傷だらけの体を必死に動かそうとしているのが遠くからでもわかった。

私がクアンタに近づこうとスピードを上げようとするが、何かに邪魔されてこれ以上近づくことが出来ない。

——どうして？私は刹那の所に行きたいだけなの。お願い刹那の側

に行かせて！

——トランザムッ！！

私はトランザムの呪文を唱える。すると私の体を絡め止めていた何かを引き千切ったのか再び体が動き出した。

私は頬を伝わる涙を拭いながら一気に刹那のクアンタに近づく。あともう少し、もう少しで刹那の側に行ける！

その時だった。

「これで終わりだ！」

クアンタの胸を一振りの大剣が貫いた。

闇から出現した巨大な悪魔がクアンタの胸を大剣で刺し貫いたのだ。

クアンタは苦しむように左腕を数回動かすと爆散した。周囲に緑の光が弾け飛ぶ。

——え！？

刹那が、刹那が、死んだ？そんな事、あるわけない、じゃない。遠い宇宙の果てまで対話のために50年も留守にして、突然ひよっこり帰ってくる、あの刹那よ。

あの刹那が、死ぬわけない。死ぬわけないわよ。だって、だって刹那よ！

駄目、理解できない。認めたくない。刹那の死を認めたくない。

——あ、ああ、ああああああ、せ、刹那！刹那ああああ！！

!!

私は悲しかった。悔しかった。怖かった。
どうして、どうして、どうして?どうして刹那が!駄目、やっぱり理解できない。

「手こずらせおって。これで邪魔者はいなくなった」

刹那を殺した悪魔が爆発の中から現れる。
その勝ち誇った悪魔の顔が私を睨む。

「次は貴様の番だ。マリナ・イスマイル!」

ハッと目が覚めた。ここは、寝室のベッドの上。私の世界はやはり光を失ったままだ。

(……今のは夢?)

息づかいが荒い。

夢を思い出して体が震える。

「マリナ、ダイジョブか?マリナ、ダイジョブか?」

「……ハロ、側に居てくれたのね」

ベッドで私を看ていてくれる相棒の心配する可愛い声を聞くと自然と震えが収まってくる。

だってこのハロは刹那が私のためにプレゼントしてくれたハロだもの。

「ハロ、マリナノ、ソバカラハナレナイ。ソレガ、ハロノシゴト。ハロノシゴト」

「ありがとう、ハロ」

「ハロ、おかしな事を聞いても良いかしら？刹那とクアンタは今どこかしから？」

「マリナ、オカシクナイ、オカシクナイ。セツナハ、ランニングニデカケタ。クアンタハ、タイキチュウ」

その言葉でホッとする。やはりあれは夢だったのだ。

「もう朝なのかしら、今は何時？」

「ゴゼン4ジ27フン32ビヨウ。イマ33ビヨウ、ナッタ」

「もう一眠り、出来そうね。」

「オヤスミ、マリナ」

「おやすみなさい、ハロ」

刹那とマリナのいつもの朝の風景。
ラジオからはニュースが流れていた。世界情勢からアザディスタ

ン国王からの談話、宇宙航行艦の今の様子など話題は事欠かないようだ。

「今日は朝から元気がないが、どこか具合が悪いのか？」

エプロン姿で朝食の片づけを行っている刹那にマリナが話しかける。

「……ごめんなさい。心配をかけて。大丈夫、私はどこも具合が悪くありませんよ」

「……それなら良いが」

「刹那、今日は何時にいらっしゃるのかしら？」

「午前中に来ると言っていたが、彼女のことだ。時間通りに現れるだろう」

刹那は洗い物をこなしながらマリナに答える。

今日はフェルトがマリナの健康診断に訪ねてくる日である。

「そう。……刹那、質問して良いかしら。答えたくないなら答えなくても良いわ」

「？なんだ、急に」

「刹那は昔、私に『戦え、自分の信じる神のために』と言いましたね」

刹那達ソレスタルビーイングがアザディスタンの内戦に介入した

際に、マリナに投げかけた言葉だ。

「ああ、覚えている。そしてマリナ、君はその言葉の通り、君のやり方で戦い続け、こうしてアザディスタンを復興させた」

刹那は泡だらけの手を止めてマリナに向き合う。

「ありがとう。そして刹那、貴方も自分の信念を貫き、刹那のやり方で戦い続け、貴方は革新しイノベーターとなった。そしてELSと対話を行い理解し合うことが出来ました」

「その通りだ」

刹那は目を閉じて、ガンダムマイスターとして世界に対して武力介入した日のことを思い出す。

「そこで、刹那に質問です。刹那は『悪魔』を信じますか？」

「悪魔、だと？」

刹那は神と悪魔は表裏一体の存在と認識していた。一方にとっては神のような存在でも、もう一方にとっては悪魔のような存在であるからだ。

（俺たちソレスタルビーイングは世界にとって悪魔のような存在だった。だが、果たしてソレスタルビーイングはもう一方で神だったのか？それは違はずだ）

刹那がなにやら考えている雰囲気をマリナは読み取る。

「ごめんなさい、変なことを質問してしまつて。今の質問は忘れて頂戴。ごめんなさい、刹那」

マリナの方から一方的に質問の取り消し宣言をされてしまい、それ以上刹那も話しかける事が出来なかった。

刹那にとって懐かしい仲間に会える日でもあると同時に『あるチェックが行われる日でもある。』

刹那は朝食の後かたづけを終えると部屋の掃除をはじめ。いつもマリナも手伝いを申し出るが刹那は頑なに断る。これもチェック項目に含まれているのだ。

マリナが暮らす一軒家の掃除は王宮の人間が訪ねてきたときに行われていたが、刹那と一緒に住むようになってからは刹那が掃除を行っている。

刹那が掃除機をかけているその後ろを、赤ハ口が転がりながら着いてくる。

「ハ口、寝室クリア。掃除漏れのチェックを頼む」

「セツナ、チェックOK、チェックOK」

「了解、次のフェーズ（部屋）に移る」

男性目線ではついつい汚れを見落としてしまう箇所もある。ましてや、あの刹那である。そのような見落とし箇所はハ口がチェックを行い、掃除後のデブリーフィングで刹那にフィードバックされていた。

この一軒家のハ口はマリナの手伝いだけではなく家政夫刹那のサ

ポートもしている。

今日はフェルトの家政夫チェックが行われる事もあり入念なチェックをしているのだ。

マリナは掃除の邪魔にならないように椅子に腰掛けながら耳で掃除の様子を見守っていた。

どうやら刹那が掃除機をかけながらこちらに近づいてくるようだ。マリナは気配を察し立ち上がる。しかし、刹那は一端掃除機のホースを放棄し、立ち上がったマリナをひょいと両腕で抱き上げる。マリナも慣れたもので両腕を刹那の首に巻き付ける。

刹那は片手だけでマリナを持ち直すと、空いたもう片方の手で先ほど放棄したホースを再び手にして、マリナが座っていた椅子の下を手早く掃除機をかける。

「刹那、言っただければ退きますから」

「いや、すぐに終わるからこの方が良い」

刹那はマリナを降ろし再び椅子に座らせる。名残惜しそうに両腕を離すマリナであったが、刹那はあえて無視して掃除を続行する。

刹那はテキパキと掃除を終えると、呼び出しのチャイムが鳴った。

「相変わらず時間通りだな」

刹那は玄関に向かうと、そこには小柄の老婆が大きな鞆を持って立っていた。

「ご無沙汰していました、刹那」

かつてのソレスタル・ビーイングの仲間であったフェルト・グレ

イスである。

「1ヶ月ぶりだな、フェルト。今日はよく来てくれた」

「こちらこそ、もう少し早く来たかったんだけど、なかなか時間がとれなくてごめんなさい。」

刹那はフェルトを招き入れると刹那はフェルトをマリナが待つ客間に案内する。

「いや、いつもマリナが世話になって申し訳ない。ところで、クアンタの診察というのは？」

刹那が申し訳なそうな表情でフェルトに尋ねる。

「実は今日はミレイナも途中までは一緒だったんだけど、途中で取引先から緊急連絡が入ったので遅れるそうなの。だから先にクアンタを診てからこちらに来るそうよ」

「ミレイナ……彼女も来てくれたのか」

ミレイナ・ヴァステイ。フェルトと同じくソレスタルビーイング、ソレスタルビーイングの宇宙船プロマイオスの元戦況オペレーターである。彼女と同じくソレスタルビーイングのメンバーであった両親達が、ソレスタルビーイングが保有する機動兵器MS・ガンダムを開発したのだ。GNDライブを搭載したMSガンダムを駆って刹那達ソレスタルビーイングは半世紀以上前に世界に対して武力介入を行ったのだ。

ミレイナの両親、父イアンと母リンダはすでに亡くなっており、ミレイナはソレスタルビーイング解散後はその技術を生かし主に民

生品のサポートデバイスを開発、販売する会社をフェルト共に起業したのだ。

再生治療が発達した西暦でも人間の老いを克服する事は出来ない。介護用のリアクティブ・サポートデバイスは这个世界では当たり前技術になっていたが、ミレイナは第三国など貧しい国々でも入手しやすいように安価で、かつメンテナンスが容易もしくはほぼメンテナンスフリーに近い製品を開発・販売していた。ソレスタルビーイングのMS運用で培った技術がフィードバックされている。フェルトは高齢を理由に現在は会長職に退いたが、ミレイナはCEOとして活躍していた。ここ数年は良い取引先に恵まれ多忙の日々を送っているそうだ。

これら介護用品の売上金の一部は、今なお世界各地で小規模ではあるが勃発している紛争による戦災孤児達の基金に回されている。

実はマリナの介護ベッドなどもミレイナの会社の製品であるが、マリナのベッドは採算度外視の完全オーダーメイド仕様である。ベッドの型式がGNで始まっている事を知っているのは何人いることか……。

両親が他界した今、ミレイナにとってダブルオークアンタが遺作になってしまった。

刹那が地球に帰還後ミレイナがダブルオークアンタの専属メカニックになったのも自然な流れである。

話を戻す。

「スメラギ・李・ノリエガの様子は？」

「あいかわらず、スメラギさんは元気ですよ」

スメラギ・李・ノリエガ、ソレスタルビーイングの元戦術予報士

である。現在は保養施設で隠居中である。

マリナはフェルトの気配を感じると椅子から立ち上がりフェルトの来訪を歓迎した。

「フェルトさん、おはよう。今日はお忙しいところ訪ねてきていただいて、ありがとう」

「マリナさん、おはようございます。お二人に会いに来るのは楽しみなんです。マリナさんもお元気そうで何よりです。マリナさんは座っていてください」

「おかげさまで。いつも診察していただいてありがとうございます」

マリナは軽く会釈すると再びゆっくりと椅子に座る。もちろん、刹那はいつでもサポートできるように素早くマリナの背後に回り込むのを忘れていない。

その様子を見ていたフェルトが、うんうんと、独りで何度もうなずくと、自分も椅子に座る。

「ちゃんと刹那はフォローしているようですね。刹那は甘えさせてれていますか？」

「ええ、刹那は厳しいようで優しいですから甘えさせていただいています」

刹那に対してそれぞれ想い入れのある二人であるが、今では女同士の友情で結ばれた仲だ。

二人とも高齢ではあったが顔を合わせれば女子会の始まりである。ここ最近刹那を肴に話の花を咲かせることが楽しみであった。

もつとも、当の刹那本人としてはマリナとフェルトの会話を聞いているとどうも居心地が悪い。

（これも対話のひとつだと思うが、なんだこの居心地の悪さは？）

マリナとフェルトの話はさらにヒートアップする。
イノベーターの苦難はしばらく続くことになる。

第2話「なんだこの居心地の悪さは？」（後書き）

次回予告

ミレイナはクアンタに思いを馳せる。

しかし、突然のマリナの異変に刹那達に戦慄が走った。

後書き

拙いSSに評価ポイントをいただきまして誠にありがとうございます。
す。

今後ともよろしく願います。

第一部が本作品のプロローグになります。第一部完結までしばらく時間がかかりそうです。ごめんなさい。

素朴な疑問ですがガンダム00は詳しいけどもう片方のFSSは知らん。という方はどれだけいらっしゃるでしょうか。

第一部が終わる前後にはキャラクター紹介を行いたいと思います。

それでは第3話も引き続きよろしく願います。

第3話「ELSダブルオークアンタは伊達じゃないです!」(前書き)

オリジナル設定オンパレードの第3話始まります。

第3話「ELSダブルオークアンタは伊達じゃないです!」

刹那がマリナとフェルトに弄られている頃、先日マリナと刹那が過ごした花畑に、片手にメカボツクスを持った女性が訪れていた。

まずは、咳払いを一つ。次に誰もいない花畑に向かって大声で叫ぶ。

「ELSダブルオークアンタ!今日は貴方も健康診断です。諦めてさっさと光学迷彩を解除して姿を現すです!」

年を召しても今日も元気で言葉の語尾に特徴があるミレイナ・ヴァステイである。

ミレイナの一言に降参したのか花々と同化していたクアンタが徐々に姿を現す。

クアンタは偽装していたのではなく、ELS達は花々と同化し自然を楽しんでいたただけなのだが、ミレイナからすると診察から逃げ隠れてしている子供に思えるのだろう。

「パパとママが作ったELSダブルオークアンタは物分かりが良い子で助かるです」

クアンタは片膝を付き、右手をゆっくり大地に降ろすとミレイナを乗せる。ELSと同化したクアンタにはどのような自我があるのか定かではないが、刹那曰くクアンタには対話の道中様々な経験を重ねる事によって自我を持ったかもしれない、とのこと。それもマリナの元にいるうちに穏やかな性格になった、というのだ。

非常に興味深い話なのであるがメカニック担当のミレイナは何故かクアンタをバラバラに分解して解析するつもりはないらしい。

ミレイナはクアンタに導かれるままコックピットに潜り込むと、メカボックスから携帯端末を取り出しメンテナン^{ポート}ス端子に接続する。すぐに熟練された手つきでダイアグノス（自己診断プログラム）を起動させる。

ふと、ミレイナは振り返りコックピット背後に設置されているヴェーダへのターミナルユニットに目をやる。

51年前のELS襲来に際の出撃の時に、両親が急遽設置したヴェーダへ接続するためのターミナルユニットである。ELSからの膨大な情報をヴェーダで処理するために使用したアクセス端末で、コックピット前方中央の立体投影装置からティエリアが投影される仕組みだ。

現在はヴェーダとのリンクが切れているためターミナルユニットは使用されていないが、刹那からも特に取り外すように指示されていないのでそのままにしている。

ミレイナは、51年前のあの時のように、電子妖精となったティエリアが突然ふと現れるのではないかと叶わぬ期待をしているのもあるが……。

「アーデさんは、またミレイナを置いて遠い宇宙に旅立ってしまいましたね。ミレイナはお婆ちゃんになってもアーデさんが帰ってくるのを待っているです。私がパパとママの元に召される前に必ず戻って来る約束は破っちゃだめです」

ティエリア・アーデは刹那の地球帰還と入れ違いで、宇宙航行艦スメラギに乗船して外宇宙への調査に出かけていつてしまった。その別れの際にミレイナと交わした約束である。

ミレイナは大きなため息をつき感傷に漬るがすぐに端末のディスプレイに目をやる。

今日は『健康診断』ということもあり診断項目も多く、まだ終わりそうになかった。

完了した項目からディスプレイに表示されるのは現在のダイアグノスとそう変わりはない。

「GNドライブ6番・7番は異常なしです。モーフイングシステム異常なし、と」

> GNT-0000 ダブルオークアンタ<純粹種のイノベイターに覚醒した刹那専用機である。

ELS大戦に導入されてからELSとの対話のため50年間、様々な星々や文明と遭遇したMS。

だが、ELS大戦から51年経過した現在、地球連邦軍のMSの開発技術は格段にレベルアップしており、宇宙航行艦スメラギに搭載されている作業用MS『サキブレ』をはじめ、名機と言われ現在も改良が加えられているGN-Xや、可変MSの傑作機ブレイヴシリーズなど、どれもが51年前のソレスタルビーイングのガンダムの性能を凌駕していた。

それはGNT-0000ダブルオークアンタも例外ではなく、もう過去のガンダムシリーズは博物館行きなのである。事実、旧ユニオン領の博物館にはレプリカであるがソレスタルビーイングのガンダムが展示されている。余談であるが先日博物館にアロウズのMS、ブーメラン装備型アヘッドの展示を巡って一悶着があったばかりであった。

「ところがぎつちゃん、GNT-0000「E」ELSダブルオークアンタは伊達じゃないです!」

> GNT - 0000「E」< 1年前に地球に帰還したダブルオークアンタにミレイナが付与した型式である。ミレイナ曰く

「今日からGNT - 0000「E」 ELSダブルオークアンタと呼ぶです！」

だそうだが、ELSと同化している刹那とフェルトは今まで通り『クアンタ』、マリナは『ガンダム』と呼んでいる。ELSダブルオークアンタと呼んでいるのは悲しいかなミレイナ唯一人である。マリナの場合は単に刹那が搭乗するガンダムタイプのMSの区別が付いていないというのもあるが。

「ELSダブルオークアンタは、ELSと融合することによりELS達の記憶を引き継いでいるだけではなくELSの能力をはじめ、対話の道中で遭遇した文明の技術が盛り込まれて格段にバージョンアップしているです」

ミレイナはクアンタのコックピットのスイッチを押してメンテナンスノートを開く。

メンテナンスノートはロールアウト後から今日までのメンテ記録がメモリーされている。

ミレイナもコピーは持っているがオリジナルの持つ『当時の空気感』がたまらなく好きだった。

ノートの担当者の項目にはヴァステイ家以外の名前も記録されており、刹那とクアンタが地球に帰還したばかりの頃、ミレイナがメンテナンスノートを発見し読み進めているうちに号泣したものだ。

つまり対話の道中でソレスタルビーイング以外の人間、いや地球外生命体の手によりクアンタの修理・メンテナンスが行われていた

動かぬ証拠である。

メンテナンスノートには言葉なのかさえ分からない地球以外の言語から、何故か日本語まで様々な言語でメンテナンス記録が記されていた。

地球以外の言語については、恐らくティエリアが行ったのだろうか。ご丁寧に翻訳文も記載されてあったりと芸が細かい。

また、ノートの欄外には刹那とティエリア、クアンタへの感謝の言葉や、クアンタを建造した両親宛へのメッセージ、GNドライブ喪失時のバックアップ動力についての提案等、クアンタの抱える問題点の指摘から未来展望まで、多岐に渡るメモが記されていたのだ。つまり現在のクアンタにはソレスタルビーイングの意志意外にも異世界の技術者達の夢や希望の未来にかけける思いが込められているのだ。

だからミレイナも、クアンタを簡単にバラバラに分解して解析するような事はしたくないのだ。

ミレイナの独り言を聞いていたのかコックピット内の照度が少しだけ明るくなる。

ミレイナにとってクアンタは大きな子供と同じであった。遺作ではなく遺児なのだ。だから『健康診断』という言葉をつかったのだ。しかし気になることもある。

「ELSダブルオークアンタはELSとの対話の道中、様々な文明の技術を供与、吸収されて進化を繰り返していますが、それらを管制するQUANTUM SYSTEMのアップデートが間に合っていないです」

ミレイナは現在のクアンタのシステム構成図を表示させて険しい顔をする。

「現在の西暦のMSはシングルドライブでもツインドライブ並の性能を発揮出来るようになりました。ELSダブルオークアンタに搭載されているGNDドライブは当時よりも改良が加えられ、更に不思議な自己進化を遂げ、事実上の専用ドライブとなっています。しかし、その性能を出し切れていない状態です。ヴェーダとリンクしても地球外の技術が導入されているので、細かい制御はどうしても搭乗者もしくはELSダブルオークアンタと直接対話して制御しないと駄目です。いくらイノベーターのセイエイさんでも独りで精細な制御を行うのはかなりの負担です」

対話の道中に異世界の技術を取り入れたクアンタではあるが、悪い言い方をすると継ぎ接ぎだらけのMSということになる。

クアンタの操縦には現在の西暦の一部のMSと同じくELSによる操縦サポートが行われてはいるが、それでも限界があるのだ。

「それに、これからは地球圏でのMS相手に戦闘する機会は減ると思います。これからは外宇宙の生命体や文明への対応が主たる任務になるはず。その時に、現在のELSダブルオークアンタでも、もしも、もしも手に負えない生命体と遭遇したらどうなるか……」

ミレイナに一抹の不安がよぎる。

「やっぱり、セイエイさんにELSダブルオークアンタの改修計画を提案するのが良いです」

コックピット内で険しい表情を浮かべるミレイナの心情を読み取ったのか、コックピット内の照度が若干下がる。

「あららら、ELSダブルオークアンタは心配しなくても大丈夫

です。必ず私がELSダブルオークアンタを更に強くたくましい子にしてあげますから安心するです！」

刹那の耳に入ったら頭を抱えてしまいそんなミレイナの発言であるが、ミレイナは明るく振る舞い続ける。

丁度、診断プログラムの全項目がすべて完了する。

「武装管制も問題なし。すべて異常なし、っと」

俗にいうコンディションオールグリーンである。

「実は改修プランはすでにできあがっています。特別にELSダブルオークアンタに先に見せてあげるです」

呼応するようにコックピット内部が明るくなる。

ミレイナは端末を叩き改修プランをコックピットのディスプレイ全体に表示させた。

（ただ、この改修プランを実現するには難問が幾つかあるのです。資金も不足していますが、それにセイエイさんが賛成してくるか未知数です……）

ミレイナがクアンタのメンテナンスを行っている頃、フェルトは奥の寝室でマリナを診察していた。マリナは大病こそ患ってはいないが、体力や内臓機能の衰えがみつかっていた。

刹那が帰還してからは緩やかになってはきたものの、それでも衰えから来る諸症状は確認されていた。

マリナの介護ベッドはハ口によるサポート付きであると第1話で述べたが、端末を接続することにより大病院の診察ベッドに匹敵する機能を発揮することが出来るのだ。ここでもGN型番で始まるベッドは伊達じゃない。

「マリナさん、それでは始めます」

診察着に着せ替えられベッドに横になったマリナに話しかける。

「フェルトさん、お願いします」

「シンサツ、カイシ、カイシ」

ベッドに埋め込まれたハ口が回転し始めスキャンを開始した。次々と送られてきたデータが診察用端末のディスプレイに表示される。それを覗き込むフェルトは顔色一つ変えずに分析していたが気分は決して穏やかではなかった。

（やはり……進行している……）

マリナの診察にはまだまだ時間が必要だった。

「次の曲は、今日のゲストのマフ・マクトミンさんからのリクエスト、スーパーノヴァの……」

診察の間、刹那はオルガンの上に置かれたラジオを聞きながら携帯端末片手に昼食のレシピを考えていた。

(……和食はシンプルに見えて前回失敗した。マリナは気にせず食べてくれたが、ガンダムマイスターに同じ失敗は許されない。沙慈・クロスロードの協力が必要だが今は難しいな。と、なると……)

「うん？」

チャイムが鳴る。

クアンタのメンテナンスを終えたミレイナが訪ねてきた。

「セイエイさん、ご無沙汰しておりましたです！」

「ミレイナも元気そうで何よりだ。また綺麗になったんじゃないのか？」

「えー！セイエイさんもお世辞が旨くなりましたね」

(これもイスマイルさんの御陰ですかあ？)

刹那からのお世辞の奇襲攻撃に頬を赤らめながらも応戦するミレイナであるが、事実、ミレイナは戦後は大変魅力のある女性に成長しており、こうして年を召した今でも母親譲りなのか、同年代の女性より遙かに若く見える。

刹那がミレイナを客間に招く。

「イスマイルさんとグレイスさんは、まだ診察中……のようですね？」

「ああ、まだ奥の寝室で診察中だ。お茶で良いか？」

刹那はミレイナにお茶を煎れる。

「セイエイさん、お茶を煎れるのが上手になりましたね」

「ああ、マリナのお陰だ」

「はいはい、ご馳走様です」

（……それはどういう意味だ？）

怪訝な顔をする刹那の毎度のリアクションにミレイナは内心呆れていた。

「セイエイさん、話題を変えるです。セイエイさんには色々お話しする事があるのですが、今度会社の方に来ていただけませんか？」

ミレイナが真剣な表情で刹那に問いかける。

「？それは今の仕事と関係しているのか？それとも……」

「『仕事の方』の関係です。最近、ミレイナの会社を御贔屓にしていただいている取引先が出来たのですが、会社の創立記念パーティーの招待券を貰ったのです。ですが、一緒に行く人がいないので困っているです」

「はあ、そんな事か」

刹那はソレスタルビーイングと関係のある事だと考えていたがアテが外れてしまったようだ。

「そんな事とは失礼です！折角のお得意様からのご招待を断るわけ

にはいけません！断ったらどうなるか、考えただけで未恐ろしいです……」

「それは悪かった。でも、どうして俺なんだ？ミレイナの会社には若い男は何人も居るだろう？」

ミレイナはギクツとする。

刹那の疑問はもつともだった。ミレイナとフェルトの共同設立した会社は中小企業ではあったが、50人近くの社員を雇っていた。技術を専門にしている会社のため若い従業員も居るのだが……。

「え、ええ居ますよ。新鮮でピチピチな若い男が。でもセイエイさんじゃないと駄目なんです」

ミレイナの眼が泳いでいる。どうも何かを隠しているようだ。

「ミ・レ・イ・ナ、何かを隠しているな？」

刹那は目を細め問い詰める。刹那も隠し事は苦手であったがミレイナも同じようだ。

「うう、正直にお話しますです。実はパーティーの出席にはセイエイさんの同伴が条件なんです。取引先の営業部長さんにミレイナの社長室に飾ってあったセイエイさんとイスマイルさんの写真を見られてしまったです。そうしたら是非！と言われてしまったんです。セイエイさん、イスマイルさん、本当にごめんなさいです！」

ミレイナの社長机の上には、去年、刹那が地球に帰還したときに刹那・マリナ・フェルト・ミレイナの4人で写した写真が飾られていたのだ。

マリナは隠居したとはいえ聖母とまで言われた有名人。そのマリナと刹那が二人とも無自覚に仲睦まじく写っていたものだからマリナの関係者と思われたのだろう。

「……困ったな、それはマリナも一緒なのか？」

「いえいえ、イスマイルさんは流石にお断りさせていただきました。イスマイルさんが出席となると外交問題になりますし。それならセイエイさんだけでもと言われてしまいました……」

刹那は頭を抑えながら、こんな時にティエリアが居てくれたらと考えてしまう。

「多分、セイエイさんをイスマイルさんが昔面倒をみられていた子供達と勘違いしたと思うんです。でもでも、一応、取引先のカーリン営業部長には『この人売約済みです』と言ったんですが、それでも是非にということで押し切られてしまいました……ううごめんなさい」

ミレイナは顔を伏せながら申し訳なさそうにする。が、聞こえないような小声で「イスマイルさんが売約済みですと言おうとしましたがやめました」と呟いたのを刹那は聞き逃していた。

「ふう、分かった。マリナと相談してからになるが、とりあえず同伴しよう。それにしてもミレイナが押し切られるとは、な。何者だ、その営業部長は？」

「セイエイさん、ありがとうございます！」

落ち込んでいたミレイナに顔に大輪の花が咲く。

「カーリン営業部長は凄い美人さんで頭も切れるスーパーレディです！でもセイエイさんを狙っている訳ではないと思う……」ので大丈夫だと思います！」

「当たり前だ！」

客間でのそんなやりとりがしばらく続いたが、マリナの診察は終わらなかった。

今は刹那とミレイナがキッチンで昼食の支度を行っている。ミレイナと相談した結果、中華になったようだ。

ミレイナは、先ほど客間でクアントの改修計画をついに切り出すタイミングを失っていたがこのチャンスを利用してリベンジする。

チラチラつと刹那の顔を見てはプイツと顔を背ける。

それを繰り返して『セイエイさん、用事があるから話しかけて欲しいです』というサインを繰り返して送る。

ミレイナの改修計画には資金や技術的難関も幾つかあったが、それよりも改修中の代わりのMSの準備も課題に挙がっていた。以前ソレスタルビーイングが運用していたMSで現在の刹那が使用できそうなMSは一機もない。

エクシアR3等の今では博物館コースのMSも秘匿されてはいたが、それでは何か有事があった際には代用となりえないのだ。

「何か俺に言いたいことがあるんじゃないのか？」

そんなミレイナのサインに遂に刹那が気がつく。

（やっと気がついてくれたです。イスマイルさん相手だったらトランザム状態で早いんでしょうねえ）

「セイエイさん、ELSダブルオークアンタの改修案を持ってきたので後で見て貰いませんか？」

マリナとの扱いの差に不満があったが、顔には出さずにこやかに受け答える。

「うん？ダブルオークアンタの改修計画案か。クアンタに改修は必要なのか？……うつ」

刹那が手に持っていた大皿を突然落とした。マリナが盲目のため落として割れるような陶器の皿は使っていないが、皿に盛られていた野菜炒めが床に散乱する。

「！！セイエイさん、大丈夫ですか、突然どうしたんです！？」

ミレイナが苦しむ刹那に駆け寄るが刹那は両手で頭を押さえている。

（うう、突然、強力な、これは脳量子波！？この家の中から？）

刹那は倒れ込みそうになるが、強靱な精神力で体を支える。ミレイナは肩を貸し刹那を助けるが次の瞬間

「刹那！マリナさんが、マリナさんが！早く来て！」

フェルトの悲鳴に近い叫び声が寝室から聞こえてきた。

刹那はミレイナの肩を借りながらもマリナの寝室に辿り着く。

胸を押さえ、顔から大量の油汗を流して苦しむマリナの姿がそこにはあった。

口には酸素吸入器が付けられていた。

「マリナ、マリナしっかりしろ！」

刹那はベッドの上で苦しむマリナに駆け寄ると必死に呼びかける。

「グレイスさん、これは一体どうしんですか？」

ミレイナも普段と違う刹那の様子に驚きながら診察用端末のコンソールを必死に叩くフェルトに質問する。

「ミレイナも来てほしいのね。丁度良かった」

フェルトはミレイナの顔を見て少しだけ不安が和らぐ。だが、

「刹那、ミレイナ、私もわからないの。マリナさんの診察が終わり、着替えを手伝っていたら、突然胸を押さえて倒れ込んだの。検査では胸には特に大きな異常はなかったはずなのに」

フェルトは焦りの表情で診察用端末のコンソールを叩き再度チェックを行うが、異常が発見できない。

「グレイスさん、王宮には？」

「アザディスタン王宮には連絡済み。移送用の輸送機を至急回すというんだけど、アザディスタンの市街地は砂嵐ですぐには輸送機を発進できないの」

GNDドライブの開発が民間でも可能になった現在であるが、輸送機などでGNDドライブを使用している機種は大半が軍用が占めており、民間用に転用されてた機種は数が少ない現状だった。

「うう……せ、刹那、刹那は……ど、こ？」

マリナが苦痛の表情で必死に刹那を探す。

「マリナ！俺はここだ。俺はマリナの側にいる。しっかりしろ、一体どうした！」

刹那がマリナの呼びかけに必死に応える。マリナは胸を押さえていた右手を両肩を押さえる刹那の手の上に重ねる。

「せ、刹那。み、みんなを連れて、今すぐ……、逃げて……邪な……心配が……近づいて、来る」

マリナは苦悶の表情を浮かべながらも必死に刹那に伝える。

「マリナ！マリナ！しっかりしろ」

普段の冷静な刹那でもマリナの異常事態に取り乱してしまう。

「つつ、つつ、せ、刹那、い、痛っ……い」

「刹那、落ち着いて!」「セイエイさん、ちょっと落ち着いてくださいです!」

マリナを押さえる手に力が入りすぎていた。刹那が冷静を取り戻す。

「すまない。つい力を入れてすぎてしまった」

刹那はマリナに頭を垂れる。

「ハアハア、だ、大丈夫。気にしないで」

マリナは荒い呼吸ではあったが、刹那の心配を和らげようと頑張って笑顔を見せる。

「本当にすまない。マリナ、それで邪な気配とは……いったい何だ?」

「わからない、私も良くわからないの。で……も、ハアハア、とても危険な……ものが近づいてくるのを……感じたの……うう」

そうは言うがマリナには心当たりがあった。今朝の夢に出てきた『悪魔』である。

それを刹那達に話すべきか悩んでいたのだが、苦しみながら刹那達に話しかける。

「うう……せ、刹那、フェルト、ミ、ミレイナさん……に、逃げて……あれは……E L Sとは違う……」

最後の力を振り絞って刹那達に伝える。

「マリナ、もう良い！喋るな！それに俺は俺たちはどんな事があってもマリナの側を離れない」

「そうよ、私達はマリナさんの側を決して離れないわ」

「そうです、私達がマリナさんを守り抜くです」

フェルトもミレイナもマリナに呼びかける。しかし、刹那は違和感を感じていた。

（マリナは脳量子は使えないはず。しかし、今は強力な脳量子波をマリナから感じる。そしてELSとは違う？どうしてマリナがそんな事をわかる？）

窓の外が少し賑やかになる。

ELSクアンタが右手にGNソードVを携えて急降下着陸してきたからだ。しかし、マリナの症状を知ってか静かに地面に着地する。GNドライブ搭載機だから出来る芸当だ。

ELSクアンタはすぐに片膝を付き、左掌を降ろし刹那の搭乗を待ちかまえた。

「クアンタか！？一体どうしたんだ、俺はまだお前を呼んではいないが？」

その光景に刹那が一番驚いた。クアンタが自分の意志で武装した状態で現れたのだ。

アザディスタン王宮の病院まで搬送するために刹那が呼び寄せたのではない。第一、搬送するだけならGNソードVは無用のはずだ。

その時、マリナのバイタルをモニタリングしていたフェルトの通信デバイスに緊急着信が入った。

フェルトはこんな時に！訝しがるが相手を確認するとヴェーダからだ。

「やあ、フェルト久しぶり」

相手はフェルトやミレイナにとってはあまり会いたくない相手、リジエネ・レジエッタであった。

ティエリア・アーデと同じ塩基配列を持つイノベイドであったが、性格はティエリアとは正反対で取っつきにくく二人は苦手だ。なるべくなら話したくない相手である。ましてマリナが苦しんでいる時であればなおさらだ。

「リジエネさん、お久しぶりです。フェルトです。今日はどうかいたしましたか？ただいま取り込んでいまして、出来れば後でお願いしたいのですが」

それでも冷静を装いながらフェルトは答える。

「そうかあ、今の君たちに非常に関係のありそうな話だったんだけど、それなら後にしよう」

リジエネはフェルトの対応を見越していたように対応する。こう言えばフェルトは必ず食いついて来ると計算済みだ。

「リジエネ、何かあったのか！こちらも緊急事態だ。手短かに教えてくれ」

刹那がフェルトのモバイル端末を奪い取ると早口で話しかける。

「これはこれは、刹那・F・セイエイ。そうカリカリしなくても今教えてあげるよ。」

「早く頼む。こちらは一刻も争う事態になっている」

刹那は苦しむマリナの頭を優しく撫でながら、口調には焦りの色が見えた。

「まったく君はE・L・Sと融合した今もせっかちだね」

「……リジエネ・レジエッタ。俺はかまわんが、クアンタはGNバスターライフルでソレスタルビーイング号のヴェーダの区画だけ撃ち抜く用意をはじめたが良いか？」

外ではクアンタが宇宙空間のソレスタルビーイング号を狙撃するために背中の触手がソードビットを再現、GNバスターライフルの形状に展開をはじめていた。

超長距離狙撃を行うためGNドライブの出力が上昇しているのが家の中から確認できるほどだ。

さすがにクアンタ単独で本当に狙撃することはないだろうが、マリナがこの状態ではどうか怪しい。なお、クアンタのGNソードVは進化を遂げており曲線射撃どころか障害物を回避して背後から狙い撃つ事すら可能である。捕捉さえできれば地球の裏側でも狙撃出来るのだ。

「ああ、本当に君たちは、似たもの同士だねえ。勘違いしないほしいね。僕は君たちと事を構える気はないよ。」

リジエネはクアンタにロックオンされているのを確認すると呆れ

たように返す。

「それならば！早く教えてください」

横でやりとりを聞いていたミレイナも語気が強くなる。

「わかったわかった。教えるよ。火星の軌道上に小型宇宙船と思われる物体がワープアウトしてきた。地球連邦は緊急調査隊としてMS調査小隊を派遣したんだけど、小型艦と遭遇したという通信を最後に連絡を絶ったのさ」

「なっ！」

刹那・フェルト・ミレイナに戦慄が走る。突然現れた外宇宙からの来訪者。

マリナが伝えた「ELSとは違う」という相手。

ミレイナは先ほどクアンタに話した「もしも手に負えない状況になったら」という言葉を思い出す。リジエネは続ける。

「小型宇宙船は短距離ワープを繰り返しながら太陽系を移動中だ。まるで何かを探しているようなワープだね。だが、徐々に地球に近づいてきている。僕の計算ではまもなく月の軌道上に現れるころだ」

刹那は目を閉じ何かを考えはじめた。

「火星に緊急派遣できる小隊ということは、ガデラーザ級とブレイヴの混成小隊！」

フェルトが漏らす。

「はいです。両機ともサキブレと同じくELS搭載型の最新鋭モデルです。パイロットはイノベーター搭乗を前提に作ってある機体です。それが連絡を絶ったということはただ事ではないです!」

ガデラーザ・ブレイブ共に51年前のELS防衛戦で初陣を飾ったMAとMSである。ELS戦後は幾度の世界大戦の危機が訪れたが、結果的には軍縮が進み、MSの開発スパンは現代の兵器と同じスパンまで落ち着いてはいた。それでもガデラーザ・ブレイヴ共に改良発展型されており、ブレイヴに至ってはシングルドライブではあるが数少ない純正太陽炉を搭載した可変MSに進化していた。

地球連邦軍は最新型ガデラーザ1機と同じく最新型ブレイブ2機による調査隊を派遣したわけだがそれが連絡を絶ったのだ。フェルト達が狼狽するのも頷ける。

刹那が目を見開く。その瞳は鮮やかな光彩を放っていた。
刹那は苦しむマリナの元に行き、マリナを優しく抱きしめ、耳元でささやく。

「マリナ、俺とクアンタは少しの間だけマリナの側を離れる。かならずマリナの元に帰ってくる。帰ってきたらまた一緒に花畑を散策しよう」

刹那はマリナの額に口づけを行う。

「駄目、せ、刹那、いけ、ません。わたし……私を置いて早く逃げて……『彼ら』の……ひょう、て……きはわたし……し、せ、つなた、ちはかん……けない……」

マリナは苦痛の表情を浮かべながらも刹那の手を強く握りしめ再考を促そうとするが、今にも意識を失いそうでうまく言葉にならない

い。

マリナは何かを知っているようだが、今はそれを聞き出している時間はない。

それに刹那が先ほどまで感じていたマリナからの脳量子は弱くなっていたのだ。

マリナをモニタリングしているフェルトも、ついに刹那に出撃を促す。バイタルサインが危険域に近づきつつあるのだ。

「刹那、私とミレイナがマリナさんを看ているから、早く行って！王宮の輸送機もこちらに向かっているわ」

「そうです、セイエイさんはクアンタで出撃してください。私達二人でイスマイルさんを守るです。ELSダブルオークアンタのバツクアップは地上から私が行います！」

ミレイナも刹那の出撃を促す。

「ありがとう。二人ともマリナを頼む。リジエネ、ワープアウト予想ポイントを送ってくれ」

「すでにクアンタには送信済みだよ」

刹那は最後にもう一度マリナを抱きしめると、寝室の窓から一気に外に出た。

(……だめ、刹那……行ってはだ……め。悪魔はとも、危険な……の)

だが、マリナの叫びはついに刹那には届かなかった。

ミレイナも先ほどメンテナンス用に使った端末を再び取り出し

寝室のテーブルに展開する。

マリナの寝室が前線基地と化した。

刹那はクアンタ乗り込むとすぐにGNドライブの粒子生産量を上昇させる。

「セイエイさん、ELSダブルオークアンタのサポート回線オンラインです。発進いつでもどうぞ」

ミレイナからの通信がクアンタに届く。

「刹那・F・セイエイ、ダブルオークアンタ、マリナの苦しみを解き放つ！」

クアンタも刹那に応えるようにツインアイを強く輝かせ、大量のGN粒子を放出させてついに大空へと飛翔する。

重力をまるで引きちぎるような速度で急上昇を続けるクアンタよりソードビットが放たれた。

ソードビットはクアンタよりも早い速度で前面に展開すると瞬く間にワープゲートを形成する。

「ワープ目標、宇宙船ワープアウト予想付近。ワープアウト後、対話を試みる！」

クアンタはそのままワープゲートを突入し宇宙空間へと一気に躍り出る。

先ほどまで居た花々が咲き乱れるマリナの別荘とはうってかわって、星々が瞬く大宇宙が広がっていた。

（何故マリナから脳量子波が感じられたのか？しかし、接近中の宇宙船からはELSと違い脳量子波は感じられない。何が起きている

？ELS達も知らない相手なのか？それよりもなぜELS達はおびえている？）

ヴェーダの予想では間もなく宇宙船もワープアウトして来るのだが、意外な展開が待ち受けていた。

「セイエイさん！緊急事態です！」

第3話「ELSダブルオークアンタは伊達じゃないです!」(後書き)

次回予告

ヴェーダの予想を覆して突如ワープアウトした謎の宇宙船。

GN-X部隊が悪鬼が襲いかかる。

そして刹那とクアンタに最大の危機が迫る!

後書き

読んでいただきありがとうございます。

第3話は4回リテイクしました。

第2話の話が膨らんでしまったので、第3話は予定の2倍です。

そのため第4話に追いやられた人々が3人ほど。

SSって難しいですね(^^;)

さて、第一章も後2話で終了(予定)です。

第4話「くたばりそこないの女に加護を持つ騎士が現れたか」(前書き)

オリジナル設定オンパレードの第4話始まります。
第1章も残り2話です。

第4話「くたばりぞこないの女」の加護を持つ騎士が現れたか」

その建物の一室には多くのモニターやコンソールが並び、世界各地の映像や軌道エレベーターから宇宙空間の様子までが映し出されている。

その内の一つのモニターには、ガデラーザとブレイヴの小隊が謎の宇宙船の奇襲を受けて撃墜される映像がリピート再生されていた。この映像はヴェーダによる情報統制のためまだ出回っていないはずである。

それよりも、一番大きいメインモニターには刹那とクアンタが宇宙空間へ向けて急上昇していく様子すらも映し出されていたのだ。

『やはり、彼は彼女を救うため行ってしまった』

「はい」

モニターを見ていた少女が、傍らに立つ長身の男に話しかける。

『司令。もう一度確認します。ここで彼らは死ぬのです』

「はい。それが彼らの運命と伺っております」

『繰り返し確認しますが第三者による介入の恐れは？』

「はい。何度も申し上げたとおり、『奇跡』は起こせません」

『そう……刹那・F・セイエイとマリナ・イスマイルの運命の系

は間もなく途絶える事になりますね』

男の立ち位置からは小柄な少女の表情を伺うことができないが、悲しんでいることだけは十分に理解できた。

ため息をつくと今度は男の方から話し始める。

「ただ、」

『ただ？』

「ただ、彼らが自分たちの運命に抗い自ら未来を切り開くことが出来れば、運命の歯車を狂わせることが出来れば、そこに付け入る事が出来れば……あるいは」

『運命を変える事が出来るかもしれない、ということですか』

「それでも可能性は限りなくゼロに近い。」

『そうですか……』

「はい」

少女は振り向くと男性を気にせず管制室の出口を目指す。

「どちらへ？」

『彼らの死に様を見届けに。せめて別れの一言ぐらい……伝えても良いでしょ？』

「……わかりました。すぐに準備をさせます」

『急いでください』

少女が退室すると今度は別の女性が入室する。女性はハイヒールの踵をカツツと鳴らし男に敬礼をするが開口一番

「司令？ 姫様が怒って出て行きましたが、また要らない事を言っ
たんじゃないでしょうねえ」

凄い剣幕で『司令』と呼ぶ男に対して迫る。

「私は運命から逃げられる確率は限りなくゼロに近いと申し上げただけだ」

「はあ、まったく。それでは姫様も怒ります。でも、そういう司令は限りなくゼロに近い方に賭けていますよね」

「フン、奴らが生き残れば我らの仕事は減る。死んでも予定通りの仕事量で済むはずだ。それよりも報告は？」

（まったく貴方は何時も素直じゃないんだから）

「司令の言いつけ通り、姫様の運命にオーバーホール済みのアレの取り付けが終わりました」

男の顔がニヤリと笑ったように見えた。

「良いタイミングだ」

「は？」

「こちらの話だ。姫様に準備が出来たと伝える」

ミレイナからの一報で事態は急転した。

「セイエイさん！緊急事態です。宇宙船はワープを突如終了。ワープアウト後、付近を航行中の地球連邦軍の戦艦に衝突しました！もう無茶苦茶です」

時間は刹那が宇宙空間にワープする前まで遡る。

連絡を絶った小型宇宙船調査隊の搜索と増援のため、地球連邦軍はナイル級戦艦を緊急出動させていた。ガデラーザをも曳航できる巨大戦艦である。現在は同じく緊急出動要請を受けたMS部隊と航路上でランデブーする手筈だった。

緊急要請を受けたMS部隊とは、GNビームライフル、NGNバズーカ、GNロングバレルビームライフルで武装し、長距離侵攻用にGNブースターと粒子増加タンクを装備した重装備型GN-X VI部隊である。

総数12機、パイロットは皆イノベーターであり、GN-X VIもパイロットに合わせてカスタマイズが行われている。

GN-X VI部隊はナイル級戦艦にて合流後、刹那同様にヴェーダの予想ワープアウトポイントに急行、『遊軍機』と協力して宇宙船を挟撃する作戦が軍本部より発令されていた。

ただし友軍機の正体がソレスタルビーイングのガンダムという事は聞かされていない。勿論、刹那もGN-X部隊との挟撃作戦は聞かされていない。

「隊長、質問してもよろしいですか？」

「7番機、今は作戦行動中だ。個人的な質問は慎め」

「も、申し訳ございません」

GNロングバレルビームライフルを装備したGN-X7番機のパイロットが部隊内通信で隊長機に通信を入れるが、副隊長機から遮られた。しかし、

「まあそういうな。7番機、作戦行動中であるが、質問を許可する」

「ハ、隊長ありがとうございます。我々がワープアウトポイントで遭遇する友軍機というのはこの部隊ですか？我々より先に急行できる友軍部隊はこの近くにはいないはずですが……。第一、我が部隊だけで対応できるではありませんか」

「フム、私も友軍機としか聞かされていない。しかし、我々と共同作戦が行えるだけの機体となると最新鋭機だろう。それも、かなりの戦闘能力を持った、な」

老練な隊長は何か心当たりがありそう表情を浮かべながら応える。もつとも音声通信のみで映像は部隊内には送られていないが。

「ありません！GN-Xと互角に渡り合えるMSを私は知りません。それは我々が一番よく知っている事ではありませんか。たとえば相手がブレイヴIIでも模擬戦で我々のGN-XVIは後れをとるようなことはありません！」

「残念だがそのブレイヴイーが撃墜された。ガデラーザも奇襲を受けて撃墜されたのだ」

「信じられません！ガデラーザとブレイヴチームを壊滅させるなんて何かの間違いです」

「残念ながら本当だ。だから俺たちで仇討ちをしてやろってわけだ」

「……了解。鼻持ちならない奴らでしたが、それでも我々の仲間です。仲間の仇を必ず討ちましょう」

7番機のパイロットは若いのだろうか血気盛んなようだ。

「そうだな。副隊長、戦艦からの通信は入っていないか？着艦コースを仰ぎたい」

ナイル級戦艦が出すGN粒子の光を肉眼でも確認できる距離に近づきつつあったのだが、通信が入らない。

「こちらからも呼びかけを行っていますが、返信がありません。レーザー通信に（ザーーーー）」

直後、酷いノイズが入り交じり通信が途絶えてしまう。

「（副隊長、どうした？通信が切れてしまったが通信機の故障か？）」

「（原因がわかりません。部隊内通信も行えなくなりました。レーザー通信に切り替えます）」

すぐに脳量子波で通信を行えるのがイノベーターの利点であったが、機体のデータリンクは別の話だ。

ナイル級からもレーザー通信で部隊に通信が入り着艦許可が下りる。その時、

「隊長！」

後続の10番機から通信が入った。

9時方向の宇宙区間が歪むと宇宙船がワープアウトしてきた。

「まずい、衝突コースだ。各機、着艦中止、戦艦から離れる！」

ヴェーダの予想を裏切るように宇宙船がワープアウトしてきたのだ。宇宙船は前方にGNフィールドのようにエネルギーフィールドを発生させるとナイル級戦艦のカタパルトデッキ側面に一直線に突っ込む。

「な、馬鹿なラム戦だと!？」

ナイル級戦艦の艦長は緊急回避を命じるが間に合わない。

太古の昔、水上艦が船首水線下に角を取り付け敵艦隊に体当たりした戦法だ。

それをこの宇宙船は行ってきたのだ。

戦艦にすさまじい衝撃が走る。宇宙船の体当たりにより戦艦前方のカタパルト部分と後方のデッキ・コンテナ部分が大きく割け、真つ二つにされてしまった。

「た、隊長！戦艦が、轟沈します！」

G N - X 部隊の隊員達から動揺の声が漏れてくる。

「司令本部聞こえるか？戦艦が敵宇宙船の体当たりにより撃沈した！おい、本部応答せよ！本部！」

副隊長機が地球連邦軍本部に通信を入れようとするが、やはり繋がらない。

「隊長、本部とも通信できません」

「何！？（この一連の通信障害はこの宇宙船からのジャミングか？）副隊長はそのまま呼び出しをつづける。11番機・12番機は戦艦の乗組員の救助に向かえ、残りはあの宇宙船を沈めるぞ！」

「了解」

宇宙船は戦艦の爆発の中から悠々と現れると今度はG N - X 部隊に向けて舵を取る。

「戦艦の仇を取るぞ。全機、対艦ミサイル発射！」

G N - X の長距離G N ブースターにはハードポイントが取り付けられており、任務に応じて武装を交換できるようになっている。

今回は対艦ミサイルと多連装G N ミサイルポッドを装備していた。この対艦ミサイルは51年前の作戦時に大型宇宙船の迎撃に出撃したG N - X 部隊が粒子不足で宇宙船の攻撃に失敗した教訓から装備されたミサイルである。推進力にG N 粒子を使用しており一時的ではあるがトランザム並みの急加速を行えるため一度ロックオンされたら並の戦闘艦では逃げるのが困難である。

合計10発の対艦ミサイルが迫るが宇宙船は真つ正面からミサイルに突進する。血迷ったのか？とGN-X部隊の隊員が思ったとき宇宙船の多数の砲門から豪雨のようなレーザーマシンガン・ビラルケマが発射された。次々と対艦ミサイルが打ち落とされミサイルの爆煙で宇宙船が見えなくなってしまう。しかし、GN-X部隊はイノベーターパイロットである。すぐに宇宙船が煙の中を動き始めていることを察知する。

「各機、敵艦艇は健在だ。あいつのレーザー兵器を食らうとGNフィールドでも一溜まりもない。一旦、距離を置いてロングレンジから攻撃を行う」

隊長の命令で一斉に散開する。GNブースターは粒子増加タンクと組み合わせる事によりフェリー航行だけではなく高機動戦にも利用できるのだ。

「ミサイルは落とせたが、こいつならどうだ！」

GNロングバレルビームライフルを装備した7番機が煙の中から姿を現した宇宙船の右舷に一撃を浴びせる。連射速度を落とした代わりに一撃の破壊力が大幅にあがっている。対艦・要塞攻撃に特化したビームライフルだ。

だが、ビームは直進し右舷にあたる直前で巨大な可動式ブレードで反射させられてしまった。

「な、俺たちのディフェンスロットと同じ技術かよ！？」

宇宙船に装備されていた可動式ブレードはアクティブバインダーと呼ばれる装備であったが、GN-X部隊のパイロットは知るはず

もない。

「ビーム兵器が駄目なら！」

宇宙船の正面に回り込んだGN-X2機がNGNバズーカを発射する。NGNバズーカは物理弾頭を発射することが可能だ。

両機が発射したのは散弾である。流石のアクティブバインダーでも防御しきれず何発かは宇宙船の前面装甲に命中するが、散弾では威力が弱いため宇宙船の装甲を貫通することが出来ない。

今度は宇宙船は全方位にレーザーマシンガンを発射しながら急加速してきた。

「なんて加速力だ！6番機・9番機逃げろ！」

宇宙船の正面に展開しNGNバズーカを発射していたGN-X2機だ。

「くそつたれ、散弾を使い果たした」

NGNバズーカを撃ち尽くした6番機が毒づく。

「俺のを使え」

9番機がNGNバズーカを投げる。6番機が新しいNGNバズーカを受け取り宇宙船に狙いをつけたが、すでに間に合わない距離に宇宙船が迫っていた。

「隊長、うわぁ」

宇宙船は前面にエネルギーフィールドを展開し6番機に体当たり

をしかけたのだ。ナイル級戦艦を轟沈させるエネルギーフィールドだ。GN-Xはバラバラになり爆散する。

「6番機！敵艦艇が逃げる。後方から集中して攻撃を行っぞ」

「コマンダー、機動兵器が追尾してきます。振り切る事も可能ですが？」

GN-X部隊が追撃する宇宙船のブリッジ。この宇宙船は4人の彼らによって操艦されたいた。

中央に座り操舵を担当する『彼』は6本の指でコンソールを叩きながらブリッジの一番後ろに座る『彼ら』の司令官に指示を仰ぐ。

『いや、しばらく追い駆けっこに付き合って貰おう。エネルギーの回復はどうか』

「高速機動には差し支えませんが、破壊砲へのエネルギーチャージ完了は発射ポイント到着に間に合いません」

『そうなるともう少し時間稼ぎが必要か』

「コマンダー、それでしたら我々が機動兵器の相手をします。コマンダーは発射ポイントへ向かって下さい」

操舵を勤める彼の両脇に座っていた『彼ら』が立ち上がり指揮官に進言する。

『お前達二人で大丈夫か？』

「相手は進化が始まったといえ、まだ『人間』です。相手が人間であれば戦いようもあります」

『わかった。ただし、巫女に加護を受けた騎士が現れたらすぐに報告しろ』

「了解」

彼らは背中の翼を誇るように広げながら手にしたライフルを構え指揮官に伝えるのだった。

宇宙船は追撃してくるGN-X部隊をまるで無視するように地球に舵をとり、更にスピードを上げる。

「逃げ切るつもりか！だがこちらは下駄（GNブースター）付きだ。逃げられると思うなよ！」

GN-X部隊は空になった粒子増加タンクを切り離すと更に加速する。その時、宇宙船の後部ハッチが開き始めた。

「隊長、敵宇宙船は艦載機を発進させる模様です」

「阻止しろ！4番機、7番機、後部ハッチを狙え。発進する所を狙うんだ」

「Yes, Sir! 必ず仕留めて見せます。5番機、8番機、観測データをこちらに寄こしてくれ」

GNロングバレルビームライフルを装備する7番機と4番機が狙撃体制を取る。5番機、8番機は精密射撃用の観測レーダーを装備しているのだ。

だが、宇宙船はハンターに狙われているのを知ってか知らずかジグザグに回避運動をとるような事もせず、一直線に地球を目指す。更に加速する。

（このままだとトランザムによる加速が必要になってくる。早くハッチを開けやがれ）

4番機のスナイパーがそう思ったとき、ハッチが完全に開いた。

「「今だ！」」

誰もが4番機、7番機のGNロングバレルビームライフルが必殺の一撃が発射すると思った。

しかし、

「4番機、7番機！今だ撃て！何をしている！発砲しろ！発砲しろ！艦載機が出てくるぞ」

副隊長が4番機、7番機に必死に命令をする。しかし、両機とも構えたまま一向に発射しない。

「おい、4番機、7番機、応答しろ、どうした？トラブルか？」

隊長機も通信を入れるが応答がない。嫌な予感が頭をよぎるが、すぐに現実になる。

コックピットのモニターに4番機、7番機の生体反応が途絶えた

事を示す警告が表示されていたのだ。

生体反応が消失した4番機と7番機は無人のまま軌道を外れ始める。

彼らは電子スコープ越しに見てしまったのだ。ハッチから出てくる『彼ら』の目を。

事態が飲み込めないGN-X部隊の隙をついて、後部ハッチから宇宙空間の闇にとけ込むような翼を持った漆黒の人型が飛び出してきたのはまさにその時だった。

「ミレイナ、連邦軍の被害は？」

「衝突された戦艦は被害甚大で轟沈。退艦命令が出されています。現在、生存者の救出作業中です。ポイントを送ります」

刹那はミレイナから送られてきたポイントに目をやる。現在のクアンタの位置からそう遠くはない。すぐに刹那はクアンタを衝突ポイントへ転進させる。

「セイエイさん、最新情報です。宇宙船から艦載機が発進。現在、MS部隊と交戦を開始しました」

最悪な連絡だった。それはELSとは違い兵器を運用している高度な文明を持つ異星人だということだ。

こちらに対して敵対心を持っているとなると対話の難易度が跳ね上がる。いや、そもそも対話が成立するのか怪しくなる。

「艦載機の映像は？こちらに回してくれ」

ミレイナからの敵艦載機の映像が送られてくるがジャミング酷い。しかし、そこには黒い物体が通り過ぎた残像だけが映っていた。

「ヴェーダによる画像処理でもこれが精一杯です。特殊なジャマーがあるのかわかりませんが、映像が妨害されています」

ミレイナからの弁明を聞きながら刹那は応える。

「ジャマーだけではないかもしれない。相手は超高速で機動している可能性がある」

「！！現在交戦中のMS部隊のパイロットは全員イノベーターです。相手を捕捉できないわけがありません！」

刹那の予測にミレイナが反論する。確かにミレイナの反論もわからなくもない。イノベーターの反応速度は尋常ではない。

ましてイノベーターの彼らが操るMSは、イノベーター用にチューニングされたGN-X V.I.だ。

「ミレイナ、残念だが刹那の言うとおりだ」

リジエネから割り込み通信が入る。ヴェーダの予測が外されたせいか、機嫌はよろしくない。

「リジエネ、まさか」

「そのまさか、だよ。交戦中のGN-Xの半数以上が墮とされた。これでは時間稼ぎにもならないよ。宇宙船は、艦載機2機を発進さ

せた後、地球に向かっている」

緊急出動要請で出撃した長距離GNブースターを装備したGN-Xが12機が宇宙船を交戦していたのだが、2機は戦艦の乗組員の救助に、10機が追撃を行ったのだがその半数、つまり5機撃墜されたというのだ。

「し、信じられないです」

このリジエネの報告にさすがのミレイナも動揺が隠せない。

「刹那、宇宙船が人類に敵対行動をとった今、地球連邦は宇宙船を敵と判断した。しかし、救援部隊を送るうにも迎撃に間に合わない。彼らの救援と宇宙船の追撃をお願いしたいが出来るか？」

リジエネからの提案にミレイナは躊躇する。クアンタは本来はソレスタルビーイング所属機。

公式には51年前の大戦で対話のため行方不明になった機体である。

クアンタが長い対話の旅を終えて地球に帰還していることを知るのは政府関係者でも一握りしかないはずだ。アザディスタン王国の王室の人間も極一部の者しか知らない。

ミレイナは非常時とはいえ一時的に地球連邦の戦力として組み込まれるのは抵抗感があつた。

「了解した」

しかし、刹那は快諾する。

「君ならそう言ってくると思ったよ。でも、安心したまえ。君達の

存在はヴェーダで消し去る」

別の見方をすれば、刹那が宇宙船を退けてもその手柄は地球連邦の手柄になるということだ。

GN-X部隊は必死に宇宙船の艦載機と戦っていた。

GN-X V.Iとイノベーターで構成されたエリート部隊であったが、宇宙船から発進した2体の敵性物体の前になす術もなく次々と味方機を失っていた。

GN-X3番機が高速にランダム機動を行う敵艦載機に向かってGNビームライフルをフルオートで発射するが当てることができない。

イノベーターのエリート部隊でさえ敵艦載機を追尾しきれないのだ。いや、正確に言うとGN-Xが追従できないのだ。

逆に独特のフォルムを持つ敵艦載機が手にするライフルから反撃の一撃がGN-Xを襲う。

「隊長！き、機体が制御できません！」

糸の切れた操り人形のようにGN-Xがコントロールを失うと、二射目が胴体を射抜く。

「3番機！今すぐ機体を捨ててすぐに脱出しろ！」

3番機のパイロットはコアファイターで脱出を試みるが、敵艦載機はコアファイターごと真つ二つに叩き切ってしまった。

「3番機……こ、この『悪魔』め！」

「隊長！奴ら、は、速すぎます！トランザムでも捕捉できません。隊長だけでも離脱して下さい」

2番機がGNブースターのハードポイントに取り付けられている多連装GNミサイルポッドからGNミサイルを一齐発射する。

GNミサイルの大軍が敵艦載機2機に襲いかかるが、手にするライフルをバルカンモードに切り替えると次々と撃ち落とし始めた。

「そのミサイルは貴様らへの牽制だ。今です！離脱して下さい」

突如、敵艦載機の周辺をスモークが覆う。GNミサイルの中に粒子攪乱ミサイルを紛れ込ませてあったのだ。

「副隊長、離脱はお前も一緒だ。馬鹿なことはやめろ！」

「私が時間を稼ぎます。我々の仇を必ずお願いします！」

副隊長は隊長機に敬礼をすると、長距離ブースターを切り離し、GNビームサーベルを抜刀してスモークの中に特攻する。

「トランザム！」

隊長機は自機後方の煙の中で小さな爆発と大きな爆発が数回起きたのを確認すると無意識のうちにコックピットを叩いていた。

それには部下を見捨てた自分への怒り、悔しさ、無念、敵への憎悪、様々な感情が籠められている。

「クソ！クソ！クソ！『悪魔』共め、部下の命の代償は必ず償って

貰うぞ」

しかし、突然GNブースターが撃ち抜かれ爆散する。爆発により機体バランスを失うが幸いにも大きなダメージはなかったようだ。

「な、何！攻撃だ！？どこから？」

正面モニターを凝視する。そこにはライフルを構える敵艦載機の文字通り悪魔のような姿があった。

「奴は、先回りしていたというのか？信じられん、何というスピードだ。ぐあッ」

機体が激しく揺さぶられる。後方から攻撃され肩に装備されていたGNシールドを吹き飛ばされたのだ。

「ク、後方からも。副隊長、やはり駄目だったか」

ついに追撃部隊のGN-X10機が隊長機を残して全て敵性物体によって壊滅させられてしまった。

わずか2体の悪魔の仕業である。

敵艦載機は余裕を見せつけるようにゆっくりとこちらに近づいてくる。挟み撃ちにするつもりだ。

「『悪魔』共、来るならこい！この命に代えても部下の敵を取らせてもらおう！」

隊長機は擬似GNドライヴの出力をあげるとGNバスターソードの切っ先を悪魔に向ける。

残りのGN粒子を全てトランザムに回し、特攻を行うつもりだ。

2体の悪魔は隊長機の覚悟をまるで小馬鹿にしたように腕を組みこちらの様子を見ている。前方の1体がその手にしたライフルとソードを兼ね備えた物体をわざとゆっくり構え始めた。まるで射的的を射るように片手で構え挑発してきたのだ。

「どこまで我々を馬鹿にしたら気が済むのだ！だが……その余裕も今、終わりにしてやる。トランザム！！」

GN-Xが爆発したような加速でGNバスターソードを振りかぶり悪鬼達に切りかかる！

しかし、悪鬼の1体がライフルでGNバスターソードを易々と受け止めると、何とGNバスターソードを弾き飛ばしてしまった。

「かかったな。それは困だ！」

GN-Xの腰にマウントされたビームサーベルを抜き去り素早く悪鬼の脇腹へと突き刺す！

トランザム中の高出力ビームサーベルはどんな装甲でも貫き通すのだ。

まるで巨大な針を突き刺された生き物のように苦しみもがく。突き刺したビームサーベルを引き抜き、トドメの上段からの一撃を振り下ろす。

「これでトドメだ！」

悪鬼が真つ二つに斬られた！

……ハズだった。

「な、何！？」

GN-Xのビームサーベルからビームが出ていなかったのだ。ビームサーベルの束だけを振り下ろした形だった。

「これは…… ということだ！？まだ粒子切れにはならないはずだ」

突然の事態に一瞬呆然とする。

異常事態を把握できずにはいたが、危険を察知してすぐにGN-Xを離脱させる。

しかし、トランザム中であつたハズの機体が重い。いやトランザムが解除されていたのだ。

突如コックピット内にアラームが鳴り響く。操縦桿を動かすが機体が反応しない。

悪魔が動かなくなったGN-Xを睨みつけると怒り狂つたようにライフルを構え、斬りかかってきた。死を覚悟する。

「…… 俺は部下の仇を取ることも出来ないまま死ぬのか……」

そのライフルが振り下ろされようとしたその瞬間、粒子ビームが悪魔を撃ち抜き上半身を吹き飛ばした！

「…… 友軍機？誰だ？」

モニターに映る友軍機のGN粒子の輝きを見て目を見開いた。

「あの粒子の色は、純正GNドライブだと！」

もう一体の悪魔が粒子ビームの方向にライフルを発射するが、緑の粒子を放つ『それ』は全て回避する。

二発目の粒子ビームが放たれた。悪魔もGN-X以上の機動力で回避運動を取るが粒子ビームは吸い込まれるように曲線を描きながら正確に右腕をライフル共々吹き飛ばす。

「……なんて凄まじい威力と命中精度だ。誰だ一体？」

首を動かすことすら出来なくなったGN-Xの目の前を緑のGN粒子を放つ『それ』が凄まじいスピードで駆け抜け悪魔を追撃する。ELSダブルオークアンタが51年ぶりに戦場に舞い戻ったのだ。

「ダブルオークアンタ、目標を駆逐する！」

「コマンダー、例の騎士が現れました。すでにこちらは一人倒されました。予想以上の戦闘能力です」

『くたばりぞこないの女に加護を持つ騎士が現れたか』

ナイル級戦艦にラム戦をしかけ撃沈させた宇宙船のブリッジである。

「しかし、巫女に加護により我々の力が通用しません。コマンダー！私に出撃の許可を下さい」

『それは許可できない。仲間を殺されて悔しい気持ちは私も同じだ。私が行こう。私が奴の息の根を止める。貴様は予定通り攻撃を仕掛ける』

「コマンダー……了解しました。仲間の無念を晴らしてください。」

私は破壊砲の射程に入り次第、攻撃を開始します」

『頼んだぞ。このチャンスを逃すわけにはいかない。何としてもあの女の魂の輪廻転生を阻止するのだ』

逃げる悪魔の翼をGNソードVの一撃が貫く。

あれほどGN-X部隊を翻弄し常に優勢を保っていた悪魔が、たった一機のMSの参戦で形勢逆転したのだ。

悪魔は片翼を失いバランスを崩したところで、最後の―撃を見舞われてしまう。

「こいつらは何だ？MSのような機械でもなかった。それにあの姿形は？」

この時、刹那はダブルオークアンタと自信に起きている不思議な現象とマリナの危篤をまだ知る由もなかった。

第4話「くたばりそこないの女の加護を持つ騎士が現れたか」(後書き)

次回予告

遂に刹那とマリナの前に姿を現した悪魔達。

刹那とマリナは悪魔達にどう立ち向かうのか？それとも悪夢が現実のものとなるのか？

後書き

次回で第1章終了です。

第4話は4回リテイク、GN-X部隊の活躍を多めにしました。

次回はクアンタと悪魔指揮官の一騎打ち。そして、あり得ないラストと第2章へ続きます。

ところでGN-X 4番機と7番機のパイロットの生体反応が無くなった＝死亡した件ですが、一睨みされてフロートテンプルのダイバーのように魂を飛ばされてしまいました。相手は悪魔＝サタンです。つまり悪魔指揮官というのはサタンコマンダーです。普通のMSでは勝てません。

というわけで誰かMH持ってきてー！。

第5話「刹那、私は貴方を愛していました」(前書き)

第5話で第一章が終了です。

場面展開が多いので読み辛いかもしれませんがご了承下さい。

第5話「刹那、私は貴方を愛していました」

刹那が宇宙で悪魔達と戦っている頃、フェルトとミレイナはマリナの蘇生に全力を尽くしていた。

アザデイスタン王宮の医療チームも駆けつけてはいるが、時間の問題だった。

「マリナ！マリナ、目をあけて！お願い、呼吸をして」

フェルトが必死の形相で心臓マッサージを行う。

「イスマイルさん、まだセイエイさんは帰って来ていません。だから、だから！息をしてください」

「マリナ、オキロ、マリナ、オキロ、メヲサマセ、メヲサマセ」

ミレイナもハロもマリナの耳元で必死に呼びかける。

刹那が宇宙船の悪魔と遭遇したあたりからマリナの呼吸が停止したのだ。

「お願い、お願い！お願い！！マリナ、呼吸をして、マリナア！」

私はゆっくりと瞼をあける。遠い昔光を失ったはずの私。ぼんやりと何かが見えてきた。

小さな光が瞬いている。私を包み込むように無限に広がる大宇宙。私は夢と同じように宇宙空間に漂っていた。夢と同じく何も着ていない。

体も若返っている。

「これは夢の続き？夢の続きであれば私はあの悪魔に殺されてしまった」

「それでは『現実』？わからない。でも、刹那に危機が迫っている事は間違いありません」

マリナ・イスマイルは自分自身が不思議な状態であるにもかかわらず、落ち着いていた。

まるで、いずれこうなることが判っていたかのように。

マリナは刹那を探す。見るのではなく、刹那を感じるのだ。

「見つけた！刹那のガンダム！」

動けなくなったGN-Xにトドメの一撃を加えようとしていた悪魔をクアンタが狙撃する所だった。

「刹那、駄目！あれに近づいてはいけません。目を合わせただけで魂を吸い取られます」

マリナはクアンタの元へと向かう。そのスピードはクアンタを遥に上回っていた。

「良かった。今度は間に合う」

マリナはダブルオークアンタに近づくと背中からそつと憑依する。まるで刹那に知られないように。

「刹那は私の命に賭けて守り抜きます」

「GN-Xのパイロット、応答しろ。こちらは地球連邦軍『所属機』だ」

刹那は大破したGN-Xのパイロット、先ほどまでエリート部隊を率いていた隊長機に通信を入れる。

「友軍機だと！？（あの顔はどこかで見たことがあるぞ、まさか？）俺は夢でも見ているようだ」

「戦艦の乗組員の救助は完了した。コアファイターで脱出は可能か？GN-X2機がこちらに向かっている」

ナイル級戦艦の乗組員救助を行っていたGN-X11番機と12番機だ。

「粒子残量が心許ないが、コアファイターで脱出して部下に拾って貰うことが出来るかもしれない」

「了解した。奴らの増援が来る前に脱出しろ」

「わかった。コアファイターで脱出する」

刹那はGN-Xからコアファイターが分離するのを見届ける。

「GN-Xのパイロット、最後に聞いておきたい。奴らは何者だ。あの姿形は『悪魔』にしか見えなかった」

「俺も判らない。俺たちは奴らに手も足も出なかった。俺は部下の仇も討てなかった。何なんだあいつらは！何の目的でやってきたんだ？クソッ」

「そうか……。だが、今は部下の分まで生きる事を考える」

「……そうだな。救援に感謝する。『ガンダム』、俺たちの仇を討つてくれ」

コアファイターが戦場から離脱するのを見届けると刹那は宇宙船の後を追うべく転進する。

だが、すぐに刹那の追撃は阻止される事となる。長距離からクアンタに向けてレーザーマシンガンが発射されたのだ。

次々と降り注ぐレーザーマシンガンの雨をクアンタは回避するが、刹那はそれが牽制でしかないことはわかっていた。本命の攻撃は別にあると。

「その通り、本命はこちらだ」

手前の空間がぐにやりと歪む。

大型の悪魔が斧を構えてワープアウトしてきたのだ。^{スバルク}

クアンタは辛うじて奇襲攻撃をGNソードVで受け止めるが、はじき飛ばされてしまう。

普通のイノバイターでは受け止めることも出来ず叩き斬られていたであろう。刹那はクアンタの姿勢をすぐに立て直しGNソードVの鋒を悪魔に向ける。

「何者だ！何の目的があって地球にやってきた」

悪魔はクアンタに対峙すると動きを止めた。先ほどの悪魔達より一回り大きく、また軍服のようなものも着ていることから上位だということがうかがえる。

「我はサタン・コマンダー。我の目的は退魔の巫女の魂ただ一つ」

クアンタの通信回線を使わずに直接、脳量子波で悪魔は話しかけてきた。これには刹那も驚く。

「サタン・コマンダー？退魔の巫女だと？」

「貴様が知らぬはずがあるまい」

サタン・コマンダーが斧を構え再び突進してくる。斧の一撃を再びGNソードVで受け止める。今度ははじき飛ばされずに粘り勝った。

「俺は退魔の巫女など知らない」

「何を馬鹿な。退魔の巫女に加護を受けているお前が言う台詞か！」

サタン・コマンダーは力に任せてクアンタを突き放す。

刹那はGNソードVをライフルモードに切り替えるとサタン・コマンダーに向かって射撃を試みる。

しかし、ビームが当たる直前、サタン・コマンダーの姿は消えてしまった。

「ワープとは違う！？後るか！」

刹那は咄嗟にクアンタを反転させると強烈な殺気の方にGNソ

ードVを切り払う。

「流石は巫女の騎士。これなら部下がやられるわけだ」

そこには斧を盾にしてGNソードVを防ぐサタン・コマンドーの姿があつた。

「俺は巫女の騎士ではない。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターだ！」

「しらを切るか。ならば、その証拠を見せてやろう」

刹那はサタン・コマンドーから一瞬異様なオーラのようなモノがクアンタに向けて放たれたように見えた。

『いけない!』

刹那は聞き覚えのある女性の声を聞いた。

次の瞬間、刹那はクアンタのコックピットから信じられない光景を目にする。

「マリナ!？」

『刹那とサタン・コマンドーが戦闘に突入したようだな。次元航行艦の動きは?』

「はい、司令。サタンの次元航行艦は単独で地球に向かっています」

多くのモニターやコンソールが並ぶ一室。数名のオペレーターが司令と呼ばれる長身の男の指示でコンソールを叩いていた。

「司令、『ドウター』が次元航行艦の攻撃目標を予測しました。司令の予想通り、やはりアザディスタン王国です」

「フン、やはりマリナ・イスマイルの住居を狙うか。攻撃ポイントはどうだ？」

「ドウターは宇宙空間もしくは衛星軌道上からの攻撃がもつとも有力と予測しています」

「次元航行艦の乗員は4名だ。攻撃に失敗した場合は直接の地上戦も想定できる」

その一言でオペレーター達に緊張が走る。

「まさか、カミカゼ、ですか？」

「さもありなん。サタン共も、はじめから無事に帰れるとは思っていないだろう。次元航行艦の最大射程からアザディスタンへの攻撃ポイントを割り出せ」

「すでに割り出し済みです。姫様のディステイニーに攻撃ポイントも転送済みです」

「手回しがいいな。地球連邦軍の動きと姫様のディステイニーの偽装は？」

「軌道エレベーター『ラ・トゥール』常駐のGN-X小隊にスクラ

ンブルが発令されました。しかし、次元航行艦の阻止には間に合いそうもありません。姫様のディスティニーはヴェーダへの偽装は完璧です。地球連邦軍『所属機』として処理されるはずです」

『ウム。連邦政府にも伝えろ、アザディスタン王国が攻撃される恐れがあると』

軌道エレベーター、ラ・トゥールに常駐するGN-X VI2個小隊合計6機が、ナイル級戦艦を撃沈させた宇宙船を迎撃するべく発進していた。

GNブースターによるトランザム中である。

「せめて粒子増加タンクを付ける事が出来れば長距離トランザムが使えるのに」

「隊長、無理を言わないで下さい。下駄を履けただけマシだと思いますよ」

GN-X小隊はスクランブル発進のため下駄、つまりGNブースターしか取り付ける時間がなかったのだ。粒子増加タンクを装備していないためGNブースター胴体内粒子タンク分の中距離トランザムしか行つことが出来ないのだ。

「隊長、後方より友軍機が接近中！」

「何、トランザム中の俺達に追いつけるのか？まさか、ブレイヴの野郎共か！？」

「こ、これはブレイヴエーではありません。ブレイヴエーの高々度迎撃パッケージより速い!？」

「一体、どのどいつだ」

「ヴェーダへ機体照合しましたが、該当ありません」

「新型機だというのは？まさか、噂のガンダムという奴か？」

「隊長、コールサインがわかりました。『ゴールド・ソード』最近、登録された機体のようです」

「『金の剣』だと？馬鹿にしゃがって。国民の税金で作ったMSを何だと思ってやがる。一言文句を言ってやる!」

「後方より急速接近!並びます!」

GN-X小隊の後方から『それ』は一気に迫るとGN-X小隊の先頭を飛行する隊長機に併走する。

「どのどいつだ!名を名乗……れ!？」

『それ』の鋭い眼光が隊長機を睨む。MSのアイセンサーとは違う。

黄金色に輝く機体の巨大な頭部に、人間の眼と同じ物が2つ着いていたのだ。

その眼差しから背筋に冷たいものを感じた。

(これは、文句を言ったらやばい……)

『それ』は一気に加速するとあっという間に見えなくなってしまう。

「隊長、3倍以上の速度で離脱していました」

「GN粒子の光も見えませんでしたね……」

「……強力なジャミングで映像の記録に失敗しました」

「なんだっただ？あれは」

刹那は驚愕する。

刹那の目の前には両手を広げ、サタン・コマンダーから放たれた邪悪なオーラから身を挺して守るマリナの姿がそこにあったのだ。何も身につけず若い頃の姿に戻り妖精のように透き通ったマリナの姿は刹那には神々しく見えた。

「なぜ、マリナがここに!？」

『刹那ごめんなさい。私は貴方を死なせたくないの』

「ほう、これは巫女自ら現れるとは。だが、いつまでそうやっていられるかな？我にはわかるぞ。貴様の魂が間もなく燃え尽きることを」

サタン・コマンダーから再び異様なオーラがクアンタに放たれる。

『きゃあー!』

「マリナ!!」

苦しむマリナと同調するようにクアンタのコックピットに警告アラームが一斉に鳴り響く。

急激にクアンタのGNDドライブの粒子生成量が低下し始めたのだ。クアンタの機動力が一気に低下する。

「GNDドライブが緊急停止!?!リポーズとも違う!一体これは!?!」

永久機関ともいえるGNDドライブが異常停止したのだ。GNDドライブが停止すること等あり得ないことだ。

思わず動揺する刹那に一瞬隙が出来る。それを見逃すサタン・コマンダーではない。再び斧を振り下ろす!

次の瞬間、クアンタの右腕が宇宙を舞っていた。

刹那とサタン・コマンダーが戦いを繰り広げている頃、悪魔達の宇宙船は地上に攻撃を仕掛けるために攻撃ポイントに向かっていた。

「コマンダー、間もなく攻撃ポイントに到着。破壊砲のエネルギー充填完了まで残り120秒、119秒」

(了解。こちららも巫女と騎士にとどめを刺す)

サタン・コマンダーのラッシュをクアンタは必死で回避する。右腕を切り落とされながらも、更にGNDドライブの粒子生成量不足で

行動が制限されてはいたが、クアンタにはもう一つの動力を有していた。

それはクアンタに融合しているELS達である。元々ELS達が51年前に脳量子波に惹かれて地球に訪れたときに、トランザムを使用したMSでも逃げる事が出来ない程の機動力だった。そのELSの特性を動力に切り替えてクアンタを操縦しているのだ。

しかし、そこには重大な制限もある。GN粒子を使用する兵器をはじめトランザムやクアンタムバースト、粒子化も行えないのだ。

「マリナ、大丈夫か！しつかりしろ」

『ごめんなさい、刹那。いずれ話をしないといけないと思っていたのに、こうなってしまうました。どうしても私は刹那を死なせたくなかったの』

マリナはクアンタのコックピット、刹那の膝の上に抱かれていた。その体は今にも消えてしまいそうな程透き通っている。

「……マリナの気持ちはわかった。もう良い、喋るな」

『刹那、私はもう助かりません。私が悪魔を抑えます。その隙に貴方が悪魔を倒して下さい』

「……馬鹿なことを言うな！俺がマリナを守る」

だが、再びクアンタはサタン・コマンダーの斧を受けてしまう。回避が間に合わず左膝から下を切り落とされてしまった。

「貴様らの魂は現世に転生できないように消し去ってやる。それにもなく私の部下が、巫女の肉体も吹き飛ばす。これでもうこの世

界に再び転生することも戻ることも出来なくなるのだ」

「何！まさかフェルトとミレイナ達にも！？」

マリナはついに決心する。

『刹那、私は貴方を愛していました』

刹那の両手から擦り抜けるようにマリナは起き上がると、刹那の唇に自分の唇を重ねる。物質的な重なりではなかったが、刹那は不思議とマリナの温もりを感じ取れた。

「マリナ！やめろ！」

『悪魔よ！私も刹那も貴方たちには屈しません』

マリナは再びクアンタの前に立つ。

宇宙船は遂に攻撃ポイントに到着する。艦首から必殺の破壊砲を展開する。

「目標補足。エネルギー充填完了まで残り60秒、59秒」

『デイスティニー、バスターロックを確認』

ブリッジで悪魔が破壊砲のカウントダウンを続ける。操舵を務める悪魔のコックピットには攻撃目標が表示されていた。

中東、アザディスタン王国。その中のマリナと刹那の別荘である。

今、フェルトとミレイナがマリナの蘇生を行っている、その場所である。悪魔達は宇宙空間から破壊砲で粉々に吹き飛ばすつもりなのだ。

『オーバーホールを終えてから試射を行っていないの。エネルギーの逆流があるかもしれないわ。過電圧に注意して』

「エネルギー充填完了まで残り45秒、44秒」

『コンタクト、ダウン』

「40秒、39秒」

『エネルギーチャンバー内で正常に加圧中』

「31秒、30秒」

『ライフリング回転開始、シアアの解放タイミングはデイスティーに一存』

「20秒、19秒」

『デイスティニー、トリガーをこちらに』

「15、14、13」

『当たれえ!!』

「10、9、8、7、6、5!!!高エネルギー体接近!?!バスター砲だ!!うわぁ!!」

宇宙空間に巨大な光の玉が現れる。

宇宙船が地上に向けて破壊砲を発射する直前、彼方より飛来した破壊砲Ⅱバスター砲の砲撃を浴びて蒸発したのだ。

「何！応答しろ！バスター砲だと言っか！？何者だ！」

突如、刹那と対峙していたサタン・コマンダーが狼狽する。刹那とマリナはこの隙を見逃すことはなかった。

クアンタは失った右腕を『呼び戻す』。背中の触手が右腕からGNソードⅤを受け取ると悪魔に向けて突撃する。

「最後の悪あがきか、馬鹿め。返り討ちにしてくれるわ！な、体が動かない！？」

「トランザム！！」

刹那とマリナの魂の叫びとも言えるトランザムアタックがサタン・コマンダーに一撃を加える。

「ば、馬鹿な、貴様らは運命に逆らったというのか」

クアンタはGNコンデンサーに残っていたGN粒子を全て使い果たしGNソードⅤもその剣の輝きを失い、砕け散った。

「だが、その代償は、償って貰う！」

サタン・コマンダーは肩から胸に斬られながらもクアンタに向け

て最後のオーラーを放つ。

「それは貴様だ！」

「刹那！」

サタン・コマンダーはマリナではなく刹那自信にすべてのオーラーを放ったのだ。

しかし、間一髪のでマリナが楯になる。マリナの体を鋭い刃と化したオーラーが貫く。

「きゃあああ！」

「マリナ！」

「ク、巫女よ、どこまで邪魔をする気だ。だが、それだけの力を使った今、貴様も間もなく……」

すでにマリナの体の輪郭が消え始めていた。

再びサタン・コマンダーが斧を振り上げようとした瞬間、その腕に一本の剣が刺さる。

これは刹那の仕業ではない。

『お喋りの悪魔というのは聞いたことがありません』

「グ……や、やはり、貴様のし、わざか」

刹那は剣が飛来した方向を見ると一機のMSがこちらに接近してくるのがわかった。

「あの機体は？」

そのMSは全身に黄金色の装甲を纏い、背中には二つに折りたたまれた大砲のようなものを装備していた。

黄金色のMS、刹那の脳裏には過去にソレスタルビーイングを壊滅に追いやった国連軍との戦いの中で遭遇した金色のMSが浮かんだが、すぐにそれとは違うことが確認できる。

金色ではなく『黄金』、それも半透明の装甲である。巨大な頭部にはまるで血のように赤い十字架が、両肩にも同様に赤い帯のような物も描かれている。

それは現存するMSには無い独特なオーラを放つMSだった。

（あれはMSなのか！？）

『これを』

脳量子波で少女のような声が伝わる。黄金のMSは腰に下げているもう一本の剣をクアンタに投げ渡す。

「やめろ、やめてくれえ！」

クアンタは左腕で剣を受け取るとサタン・コマンダーに斬りかかり最後の一撃を浴びせた。

サタン・コマンダーはついに胴体を切断され、その体が消滅を始める。

「我が負けたというのか……騎士よ、巫女を失った貴様にも、せいぜい地獄を味わって貰おう。グハハハ、グエ！？」

サタン・コマンダーは負け惜しみと断末魔を残してついに宇宙か

ら消滅していった。そこには何も残らなかった。
刹那はハッと我に返る。

「マリナ！」

クアンタを見守っていたマリナだったが、その表情は暗い。

「刹那、ごめんなさい。『私は貴方を守れなかった』」

「何を言っただ。マリナが守ってくれたから、俺はこうして生きている。生きているんだ！」

『マリナさん、貴方は、貴方達二人の運命を変えたのです。それは貴方もわかっているはず。だから、だから、そんな悲しい顔をしないで！』

黄金のMSの搭乗者だろう。少女の声でマリナに対して脳量子波で話しかけているのが刹那にもわかった。

「二人とも、ありがとう」

マリナは少しだけ微笑むと両手を広げる。マリナの頭上に光が差し込む。まるで天国への道標のように。

その神秘的な光景に刹那はマリナとの永遠の別れを察知する。

「マリナ！行かないでくれ！」

「刹那、私は貴方に出会えて幸せでした。今度生まれ変わることが出来たら、貴方の側にずっと一緒に……」

『マリナさん！』

その時だった。

今まさに昇天しようとしたマリナの足下に黒く渦巻く空間が発生するとマリナを吸い込んだのだ。

「きゃあああああ！」

「マリナ！」

『これは、次元回廊！？』

クアンタと黄金のMSが一気に動く。

クアンタが左腕を伸ばし、マリナを掴もうとするが、マリナの魂はクアンタの手をすり抜け落ちる。

マリナを飲み込むと空間はすぐに閉じてしまった。

「マリナアアア！」

刹那の悲しみの叫びがELSを通して全宇宙空間に響き渡った。

そして、黄金のMSの中で少女は見てしまったのだ。空間の底に広がっていた『あるモノ』を。

（そ、そんな、まさか、あれは、ジョーカー宇宙だというの！）

「次のニュースをお伝えいたします。アザディスタン王国では先日、『老衰のため』亡くなられたアザディスタン王国第一皇女、マリナ・イスマイル様の国葬が厳かに行われております。現代の聖女とし

て国内外の人々から愛され親しまれたマリナ・イスマイル様の突然の訃報に多くのアザディスタン国民が悲しみに暮れています……」

こうして悪魔達の来襲は『地球連邦軍』の活躍により無事退けられる事となったが、連邦政府は今回の来襲について、公式に発表を行うことはついになかった。

また、アザディスタン王国第一皇女マリナ・イスマイルの死は『老衰』として発表されたのであった。

第1章 離別・

第5話「刹那、私は貴方を愛していました」(後書き)

次回予告

マリナの死に悲しみに暮れるソレスタルビーイングのメンバー。
そんな中、マリナの国葬に参列した刹那はあの女性に再会する。

別次元に飛ばされたマリナを待ち受ける運命とは？

そして謎の少女が口にしたジョーカー宇宙とは？

GNDライブが停止したELSダブルオークアンタは復活できるのか？

「第2章 MISSION START!」お楽しみに。

後書き。

まずはじめに。いやー長くてごめんなさい。ここまで読んでいただいた読者の皆様、本当にありがとうございました。

オリジナル設定だらけで始めてしまった本作品ですが、導入部分となる第1章がついに終わることが出来ました。

他の作者様だと1話〜2話で終わらせる導入部分をまるまる5話も使ってしまった。20話〜25話位の作品なのに(予定)

次回から、粗筋通り刹那とマリナ様が再びイチャイチャするための物語の始まりになります。

二人がイチャイチャするためにはきっと様々な障害が待ち受けていることでしょう。

あーんな騎士だったり、こーんなMHだったり、えー！な神様かもしれない。予定は未定。

ですがマリナ様はこの後しばらく出てきません。だから二人が再開したときには勢い余って押し倒すかもしれませんね(どちらが?)

次回投下は未定ですが、第2章も引き続きよろしくお願いいたします。

第6話 ミレイナ・レポート（前編）（前書き）

第1章のエピローグ兼第2章の導入部分は前編・後編に分けさせて貰いました。

第6話 ミレイナ・レポート（前編）

[illegible]

ベッドと小さなデスクが置かれた部屋には電子音が部屋に響き渡っていた。

ここは、どこにもある部屋というわけではない。

一つは外界と連絡を取るための通信装置が特殊だということ、もう一つは宇宙を航行する艦の部屋だという事。

「……この時間に一体誰だ？」

部屋の主はベッド脇に備え付けられた通信装置の呼び出し音で目を覚ます。

不意の呼び出し音で幾分機嫌が悪いようだ。

個室の主は就寝時に外していた眼鏡をかけながらどんな皮肉を言
ってやろうかと考えるが、通信装置の画面を見てその考えを改める
事になる。

「ヴェーダからの緊急暗号通信！地球で何かあったのか！」

あわてて通信装置の応答スイッチを押す。

ここは外宇宙航行艦「スメラギ」の船室である。

部屋の主、ティエリア・アーデはヴェーダからの緊急暗号通信と
いうことで身構えたのだが、

「うう、アーデさん、ごめんなさい」

「ミ、ミレイナ・ヴァステイ!?」

泣き顔のミレイナが出てきて面食らう事になる。

「グスン、アーデさん、ごめんなさい、ミレイナも、どうして良いのかわからなくて、ごめんなさい、ヒック」

「ミレイナ、謝らなくても良い、それに泣いてばかりではわからない。少し、落ち着いてくれ」

「ごめんなさい、ちょっと、落ち着く時間を下さい。イック」

（はあ、この娘は幾つになってもこうなのだろうか）

「アーデさん、何か言いました？ヒック」

「いや、何でもない。それよりも、そろそろ落ち着いたか？地球で何かあったんだな！？」

「……はい、です。実は……」

物語はマリナが次元回廊に落ちたところまで遡る。

「マリナアアア！」

刹那はマリナを助けられなかった自分に絶望していた。クアンタもサタン・コマンダーとの戦闘で満身創痍だ。GNソールドVも砕け散り、永久機関であるGNドライヴ6号・7号も原因不明の異常停止状態。

サタン・コマンダーによる切り落とされた右腕、左足はE.L.S.による癒着が始まっていたが、内部構造の復旧には時間が必要だった。

『刹那・F・セイエイ』

黄金のMSの搭乗者が脳量子波で刹那に問いかける。とても悲しそうな声色だ。

「……お前は一体何者だ！何故俺とマリナを知っている！！」

『私は、貴方達二人がサタンに殺される運命を見届けに来ただけ。だが、貴方達は運命に抗い自分たちで未来を切り開きサタンを倒してしまった』

刹那は驚く。助けに来たのではなく、自分とマリナが殺される運命を見届けに来ただけだと。

「では、何故俺に剣を渡した？この剣がなければ奴は倒せなかった……」

クアンタは剣を取り、再び黄金のMSに投げ返す。

先ほどから黄金のMSからは敵意を感じることがなかったからだ。だが、全てを信用しているわけではないが。

『貴方達が私を呼び寄せたのです。だからこのディステイニーも貴方達に力を貸す事を了承したのです』

「ディステイニーだと？」

その時、クアンタのレーダーが接近中のMSの機影を捉えた。ラ・

トウルから出撃したGN-X V12個小隊である。更に遠くではあったがGN-X小隊に補給するための輸送艦も発見された。

GN-X小隊はトランザムによるスクランブル発進を行ったためGNブースター胴体内のGN粒子を使い果たし、現在は自機の疑似GNドライブの粒子のみで飛行していた。そのため到着まで多少の時間があったが、見つかるかと厄介だ。

「刹那、話は後で。私に掴まって」

黄金のMSディステイニーはクアンタに手を差しのべる。

「この宙域から離脱します」

刹那は一瞬躊躇するが、すぐに意図が理解できた。

「こちら刹那・F・セイエイ、リジエネ応答しろ。アンノウン（宇宙船）から出撃した『艦載機』は全て撃破した。」

刹那はヴェーダのリジエネに通信を入れるとすぐに返答が来た。

「刹那・F・セイエイか？随分やられたようだな。だが、宇宙船の方も撃破したと報告が入っている。詳細は判らないがとりあえず危機は去ったようだ」

「了解した。それではこれより『友軍機』と共に帰投する。後の処理は任せる」

「……わかった。協力に感謝する」

リジエネとの通信が切れる。

『刹那？』

「お前も地球連邦軍『所属機』だろう。コソコソ逃げる必要はあるまい。だが、お互い姿を見られるのはまずいようだな」

『！……確かにそうね』

刹那は先ほどのリジエネとの通信の最中に、デイスティニーをヴェーダに照会していたのだ。

勿論、リジエネも照会内容について把握していたが、今はそれについては触れないでおくことにした。

クアンタが損傷を免れた左手でデイスティニーの手を掴む。

デイスティニーのパイロットはクアンタが掴むのを確認するとデイスティニーを一気に加速させた。

刹那もその機動力に呆気にとられる。あつという間にGN-X VIの機影がレーダーの範囲外に消えていったのだ。

「デイスティニーのパイロット、質問して良いか？」

『はい。全てを答えることは出来ませんが』

「あの悪魔は一体何だ？ サタンコマンダーと名乗っていたが機械ではなかった」

『そう……魔界から現れた本物の悪魔と言っても信じてくれるかしら？』

「……今は、信じらそうだ。だが、どうしてマリナの命を狙った？

退魔の巫女と奴らは言っていた」

『それは私の口からはお答えすることが出来ません。ごめんなさい』

「それではマリナはどこにいった？あの宇宙空間を知っているのか？」

『（やはり彼もジョーカー宇宙を見ていたのね）……ごめんなさい』

デイスティニーのパイロットは小さな声で刹那に謝る。刹那はその声に関心を感じているように感じる。

（このパイロットと関係のある宇宙なのか）

刹那は先ほどからクアンタを曳航するデイスティニーを見つめていた。

GN粒子の放出も発見できず、地球上のどのMSとも違う構造。

巨大な頭部や装甲の彼方此方に施された装飾の数々。そして半透明の黄金の装甲。

対話の道中で幾つもの人型機動兵器と遭遇、時には望まない戦闘に巻き込まれる事もあったが、そのどれとも違っていたのだ。

刹那はクアンタが収集するデイスティニーの情報に目を見張る。

（この機体の動力源は一体……）

『刹那、そんなに見つめられると恥ずかしいです』

「ああ、すまない」

デイスティニーのパイロットからの不意の一言に刹那は慌ててし

まう。

『刹那、貴方はこれから選択を迫られます。マリナさんのお陰で折角手に入れた命を大事するのか、それとも命を捨てる覚悟があるのか』

「それは、どういう事だ？」

『マリナさんを助けるためには私達の世界に足を踏み込まないといけません。ですが今の貴方では助け出すことは不可能です。それは自殺行為に等しい』

「な!？」

刹那はデイスティニーのパイロットの言葉に驚愕した。

デイスティニーは加速をやめてクアンタの手を離す。地球が見える距離にまで来ていた。

『私は強制しません。私達の世界に足を踏み込むのも貴方の自由。貴方に時間を与えましょう』

「お前は一体!」

『私の正体を知ってしまえば後戻りは出来なくなります。今は私は貴方の味方です。私としては貴方を死なせたくはありません。これは本心です』

デイスティニーが距離を取り始める。

「待ってくれ!」

だが、その時クアンタに通信が入った。

「刹那！お願い、返事をして」「セイエイさん！セイエイさん！」

相手はフェルトとミレイナだ。

『刹那、ここから大気圏に突入すればアザディスタン上空に降下出来ます。次に会うときまでに答えを用意しておいて下さい』

刹那がディステイニーのパイロットを呼び止めようとするが、ディステイニーはすぐに別ルートで大気圏に突入してしまった。現在のクアンタでは追跡することも出来ない。

「トレースも計算済みか。リジエネ、聞こえているな？」

「刹那・F・セイエイ、聞こえているよ。あの『機動兵器』の追跡はヴェーダが引き受けた」

「頼む」

刹那はリジエネとの通信後、フェルトとミレイナに応答する。

「こちら、刹那・F・セイエイ。二人ともどうし」

刹那はそこで言葉を止めた。刹那の脳裏にマリナが謎の空間に吸い込まれ消えていった光景がフラッシュバックする。

「フェルト、ミレイナ、すぐにそちらに向かう」

刹那はクアンタを大気圏に突入させアザディスタンを目指す。

刹那は、クアンタを着陸させるとすぐにコックピットハッチを開き外に出る。向かった先は……

「マリナ！」

マリナと暮らしていたあの一軒家だ。

刹那は家に入ると一目散に治療が行われていたマリナの寝室に向かう。アザディスタン王国から派遣された医療スタッフも到着していたが皆、沈痛な表情で刹那を出迎えた。周りからはすすり泣くような声も聞こえる。

「刹那……」

「セイエイさん……」

寝室に入るとフェルトとミレイナが刹那に駆け寄ってきた。

二人とも泣きはらしたのだろう目が真っ赤だ。

刹那は二人を優しく抱きしめるとベッドに寝かされているマリナの元に向かい、ついに対面する。

「ごめんなさい、刹那。私達、マリナさんを、助けられなかった」

「私もイスマイルさんの手を握って、意識がなくなりそうな度に何度も何度も声をかけて、その度にイスマイルさんは握り替えしてくれていたのに……」

刹那はもう一度二人を優しく抱き寄せる。

「俺はマリナだけではなく、フェルトとミレイナにも助けられていたのか……」

刹那がポツリとつぶやく。

「え？」

「刹那、息をひきとる前、最後にね、マリナさんが見えないはずの目を開けて微笑みながら私達にこう言ったの」

「『二人とも、ありがとう』って」

（フェルトとミレイナにもマリナは……）

刹那はマリナを見つめる。その顔は微笑んでいるように刹那には見えた。

刹那の頬に何年ぶりの暖かいものが伝わる。

「マリナ……」

数日後、アザデイスタン王国からマリナ・イスマイルの死亡が公表された。死因は『老衰』とされた。

連邦政府には地球連邦軍MSと悪魔達の戦闘は報告されていたが、すぐに情報統制が行われた。また、サタンコマンダーとの戦いの最中に起きたマリナ失踪に繋がる不思議な事象については報告されていない。

マリナの死は国内外にショックを与えることになるのだが……。

刹那はマリナの国葬に参列するためアザディスタン王国首都に来ていた。

フェルトとミレイナも参列を希望していたが、刹那の話とクアンタの状態を見てキャンセルすることになる。

現在クアンタは秘密ドッグに運ばれミレイナ達の分析が行われているはずだ。

マリナの葬儀には国内外から多くの参列者が集っていた。国民だけではなく、マリナの元から巣立っていった多くの子供達や、アザディスタン復興に際してマリナに共感して協力してくれた国や企業など様々な人々が参列していた。

そんな中、刹那は不思議な気持ちでマリナを見送っていた。

マリナの肉体は目の前の棺に納められていたが、マリナの魂は別の宇宙に飛ばされてしまったからだ。

（俺は果たしてマリナの魂を救い出すことが出来るのだろうか……）

葬儀が終わり刹那は王宮の一室に足を運ぶ。そこには今、刹那がどうしても会わないといけない人物が待っていたからだ。

マリナの元に一緒に住むように進言してくれた人物。そしてマリナの親友だったメガネの似合う女性。

刹那は扉をあけるとその女性は椅子に座りながら刹那を待っていた。シーリン・バフティヤールだ。

『こんにちは、刹那・F・セイエイ』

「シーリン・バフティヤール、お元気そうで何よりだ。」

彼女は地球連邦議会の議員時代から中東方面特使としてマリナを支えていた。高齡となった今でも貧困国の援助等で精力的に活動するなど、ミレイナの会社との接点も少なくはなかった。

『こんな機会で貴方に会いたくはなかったけど、話とは何かしら？』

「俺は……マリナを助けることが出来なかった。許せるものではないと思うが許して欲しい」

刹那はシーリンに対して深々と頭を下げる。突然の刹那の謝罪にシーリンは困惑するのだが

『貴方は何を馬鹿なことを言っているの。そんな事はないわ』

「だが、事実だ。俺はマリナに助けられ、こうして生き延びることが出来た」

『マリナは自分の運命を全うしたの！貴方に責任はないの』

「だが」

『刹那・F・セイエイ！それ以上続けるのなら私も怒るわ。貴方はマリナの気持ちを考えたことがあって！』

一向に話の见えない刹那に対して、ついにシーリンが声を上げる。刹那と悪魔達の戦闘記録は連邦政府の極一部しかアクセスできないからだ。

それでもマリナの魂が突如消えたことについては報告されていない。

『刹那が地球に帰還してマリナと一緒に住むようになって、どれだけ彼女が幸せになったのか貴方にはわからないの！』

『貴方が地球から遠く離れたE.L.Sの母星で対話を行っていた50年、彼女も貴方と同様に戦っていたの』

「それは理解している」

『彼女は一個人の幸せを放棄して一生をアザディスタンの復興に捧げたわ。苦しい道を自ら歩んできたのは彼女も一緒』

事実マリナは女性として一人の母親ではなく国民の母親になることを選んだため生涯独身を貫き通した程だ。

『そして、多くの協力や賛同を得て、やっとアザディスタンが復興したの』

『その代償に彼女が失ったものも決して少なくなかった。復興のため彼女は個人の幸せを全て注ぎ込んだのよ』

『だけど、神様はちゃんと彼女を見ていたわ。最後の最後で彼女に素晴らしい幸せを与えてくれた』

シーリンは刹那の顔をキッと睨むが、すぐに優しい顔になる。

『それは貴方よ。刹那・F・セイエイ。神様は貴方を彼女の元に帰してくれた。だから、もうそんな事は言わないで頂戴』

流石の刹那も何も言い返せない。

『だけど、ちょっと意地悪な神様ね。50年なんて言わずに5年でマリナの元に帰してくれても良いのに』

「重ね重ねすまない。許してくれ」

『……もう！貴方は。私では駄目ね。ほんと、マリナに怒って貰って欲しいわ』

刹那と話をすると大抵こうだ。話が食い違って口論なるか、一方的にシーリンに怒られるパターンになる。

そしてマリナが仲裁という介入を行い、シーリンはその度にマリナと刹那の夫婦漫才を見せつけられていたのだった。

それを思いだしたのだろうか、シーリンは目尻にたまった涙をハンケチで拭い去る。

『マリナの血筋について？』

刹那は先の悪魔達との戦闘でサタンコマンダーが口に使っていた『退魔の巫女』についてシーリンに尋ねる必要があった。

だが、シーリンに戦闘の様子を話すわけにはいかないし、それこそ『マリナの魂が謎の空間に吸い込まれました』とは口が裂けても言えなかった。そのためマリナの周辺から質問する。

「マリナは皇女に選ばれる前は普通の家庭で育ったと聞いていたが」

『ええ、確かにそうよ。彼女は元々は音楽が好きだったから大学でも音楽を専攻していたわ』

「だが、王制復活に伴い王族の血を引く彼女は皇女に選ばれた」

『何が言いたいの、刹那？』

シーリンは怪訝な顔をする。

「現在のアザディスタン国王はマリナの血筋とは違う」

『……確かに違うわ。今の国王は所謂分家ね。マリナは姉妹が居ないからマリナの家系は途絶えてしまったわ』

シーリンは刹那の顔を見るとため息をつく。

「？」

『何でもないわ。続けて』

「マリナの血筋について何か他に話はないのか？例えば特別な血筋だったとか……」

その瞬間、刹那にはシーリンのメガネが一瞬光ったように見えた。

『……例えばどんな？』

何かシーリンの表情が硬い。刹那も感じ取り慎重に言葉を選びながら話をする。

「例えば、王族の血筋というのがマリナは女性だ。女性が政治に関わる事が許されなかったアザディスタンで何故マリナが皇女として役目を果たさないといけなかったのか。困窮した経済、保守派と改革派の対立、彼女が背負うには重すぎる責務だった。他にも理由があるのではないかと思っただけだ」

『刹那、マリナを買い被りすぎよ。彼女は王族の血筋だっただけ。他には理由はないわ』

「……そうか」

『そうよ』

シーリンは年老いたとは思えない眼光で刹那を睨む。だが、以外にも刹那の方から視線を外す。

刹那はシーリンの側に行き、一片のメモを手渡す。

『これは？』

「俺の連絡先だ。しばらくアザディスタンを離れないといけなかった。何かあったらここに連絡して欲しい」

『……わかったわ』

「シーリン・バフティヤール、今日は久しぶりに会えて嬉しかった」

『私もよ。マリナと三人だったらもっと良かったけど』

刹那はシーリンを優しく抱きしめると部屋の出口に向かうがシーリンに呼び止められた。

『まって』

「何だ？」

『刹那、一つだけ忘れないで置いて欲しいことがあるの』

「？」

『それは、マリナが独身を貫き通したこと。彼女は確かに女性としての幸せよりも国の幸せを選んだ』

『だけど、他にも理由があつたのよ』

「……理解しているつもりだ」

刹那は力なく言い残すと退室していった。シーリンはそんな刹那の後ろ姿を見て悲しい気持ちになる。

（マリナが選んだこととはいえ、どうして神はマリナの血を残すことを許されなかったのだろうか。マリナと刹那ならどんな試練でも乗り越えられたかもしれないのに……）

朝靄の中、刹那はスメラギ・李・ノリエガに会うため、とある施設に向かっていた。そこはドーバー海峡が良く見える丘の上に建っている。

刹那は乗ってきたバイクを駐輪すると施設の正面玄関ではなく、面会者用の入り口から施設に入った。

面会の手続きを済ませるとスメラギの部屋に向かう。そう、ここはスメラギが入院している介護施設である。

（リーサ・クジョウ……この部屋か）

ソレスタルビーイング解散後に再び元の姓であるリーサ・クジヨウに戻ったスメラギであったが、戦後ソレスタルビーイングでの評価や（政府の宥和政策の一環でもあったが）数度の大戦を阻止した功績を称えられ外宇宙航行艦にまでその名が付けられた。

しかし、現在はこの介護施設に入所している。

スメラギの病室は個室ではなく相部屋だった。刹那は病室にしては随分厚い扉を開けると部屋に入った。

「おはよう、刹那・F・セイエイ。だが、女性の部屋に入るときはノックをするのが礼儀というものだ」

スメラギのパートナーである女性がベッドから上体を起こし刹那を注意する。

刹那・F・セイエイと呼ぶこの女性とは

「おはよう、カティ・マネキン。すまない。俺はいつもノックを忘れてしまうな」

スメラギ・李・ノリエガの好敵手であり、良き理解者でもある地球連邦軍元准将カティ・マネキンである。現在は二人仲良く申し合わせたように入所していた。刹那が地球に帰還した時に初めてスメラギの病室を見舞いに来たときもカティに怒られたものだ。シーリン同様、刹那の正体を知る数少ない人物である。

「まあ、私もクジヨウも慣れたがな。それよりも、マリナ皇女が亡くなれて……お前も辛かっただろう」

「心配させてすまない……それよりもスメラギ・李・ノリエガは？」

刹那はスメラギのベッドが空になっている事に気がつく。

「先ほどまで居たんだがな。クジヨウは『朝の散歩』だろう。悪いが探してくれないか？」

「彼女はまた抜け出したのか」

スメラギは朝食が終わると度々病室を抜け出してはカティを困らせていた。逃亡には車椅子を使っているのだが、ミレイナ製のGN型番で始まる車椅子である。機動性には定評があった。

しかし、刹那も慣れたものでスメラギの逃亡先はわかっている。海がよく見える屋上だ。

「やはり、ここに居たのか。おはよう、スメラギ・李・ノリエガ」

『おはよう、刹那。遅かったわね。病室の窓から貴方がバイクで来るのを見つけたから、ここに來たのよ』

刹那はスメラギの車椅子を押しながら屋上を回ることにする。

『フェルトから簡単な話は聞いているわ。クアンタとマリナさんの件で私に会いに來たのね？』

「それもあるが、スメラギ・李・ノリエガの顔も見なかった」

『あら、お上手。マリナさんの教育の賜ね。こんなシワシワのお婆さんの顔が見たかったなんて、冗談でも嬉しいわ』

刹那は屋上に設けられたベンチに座りスメラギと相對すると、マリナの診察からサタン・コマンダーとの戦闘、黄金の機動兵器『デイスティニー』との遭遇まで、一通り報告した。

「クアンタの状態だがGNDドライブが停止した状態だ。ミレイナの言葉によると『凍結された』ようだと言っていた」

『私もフェルトから聞いたときは信じられなかったけど、刹那の今の話を聞いたらGNDドライブの異常停止も何だか信じられる話ね。悪魔が出てきてマリナさんを狙うなんて、宇宙人が現れるSFの世界から一気におとぎ話の世界へ吹っ飛ばされた感じよ』

刹那はスメラギの言葉に内心苦笑した。対話の道中で様々な世界や文明を見てきた者としては、自分の中では『それが日常』になりつつあったからだ。

「クアンタのGNDドライブは度重なる改良で互換性が無くなっている。もっとも載せ替えようにもツインドライブ専用のGNDドライブも簡単には調達できないがな」

近年GNDドライブが民間企業でも製造できるようになってはいたが、擬似ではない純正GNDドライブは連邦軍でも極わずかししか配備されていない状況だ。更に純正ツインドライブ対応となると絶望的だ。

『それと、マリナさんが『居なくなってしまった』この状況で、悪魔達がもう地球には来ないとは誰も保証できないわ』

「悪魔達と戦えるMS、パイロットは極わずかだろう。いや、現在の地球連邦軍には居ないかもしれない」

『……刹那は悪魔達が言っていたマリナさんの加護を信じるの？』

「信じるも何もマリナに助けられていなかったら俺は悪魔に殺されていた」

『そうか、マリナさんの加護を受けられないこの状況ではお先真っ暗ね』

スメラギは溜息をつくとき空を見上げる。

『マリナさんはこの宇宙のどこかに居るのかしらね』

『それで『退魔の巫女』についてだけど何かわかった？』

「ヴェーダにも該当する情報は見つからなかった」

『そうなると古い民間伝承とか土着信仰かもしれないわね』

刹那は先日シーリン・バフティヤールに会った際に何かを隠している雰囲気を感じてはいたがスメラギには報告しなかった。刹那はシーリンから話してくれるだろうと信じていたからだ。

「俺達を助けてくれた黄金の機動兵器ディステイニーだが、こちらについてはわかったことがある」

第6話 ミレイナ・レポート（前編）（後書き）

次回予告

ミレイナからティエリアへの報告は続く。

刹那達が掴んだディスティニーの情報とは？

一方その頃、刹那達ソレスタルビーイングを調査する謎の組織があった。

後書き

次回、第7話はFSS、ガンダム00双方のファンからブーイングが来るかもしれませんが、物語上どうしても必要なので書かせて貰います。

それにしても、この物語には女性が多く登場します。ここだけ見れば昨今のゲームやライトノベルの展開なのでしょうが皆高齢です。ガンダム00勢では80代は当たり前、最年少のミレイナでも60代です。ELS大戦後は平均寿命が100歳位まで延びていると思っただけだと助かります。

FSS勢は年齢3桁の方が多いですがジョーカー太陽星団の人々の寿命は地球人の年齢の3〜4倍の設定だと思いましたので、ガンダム00勢とFSS勢で年齢のバランスは何とかとれるかなあという所です。 約2名除く。

第7話 ミレイナ・レポート（後編）

そこは、とある建物の屋上。

郊外が見渡せる屋上でひとりの少女が空を見上げながら嘆いていた。

（やはり、刹那は助けに行くのでしょうか。だが彼が生還できる可能性は低い）

少女は空を見上げながら、死地に赴く剣士を憂う。

（それとも二人はあそこで運命を受け入れた方が良かったのでしょうか）

（いいえ、それは駄目。死んでは何もならない。あそこで死んでいたら彼らの運命は終わっていた）

少女は空から地表に視線を落とす。眼下には町並みが広がっている。

（生きているからまだ運命は続けられる。でも、彼らのこれから先の運命は予測が出来ない。……それは私も同じ……）

少女は町並みを見渡しながら考える。

（私が420年前、初めて地球を訪れた時から運命が変わり始めていたのかもしれない）

「お嬢様〜！」

少女は声のする方向に振り返る。スーツの女性が屋上の出入り口から少女の方に駆け寄ってくる。

「お嬢様、お待たせいたしました。会議も終わりましたので、デブリーフィングを始めたいと思います」

「はい、わかりました。イエッ」

スーツの女性が少女の唇に人差し指を押し当てる。

「『お嬢様』、私は『今は』ソーニャ・カーリンです」

「ふにゃ〜ごめんなさい。お姉様」

「お嬢様！」

「ひ〜、ごめんなさい。カーリン部長」

女性は少女を建物の入り口に促す。

（私の本来の運命では、2185年に目覚め、ソーニャ・カーリン『大尉』と出会はずだった）

（だが、私は100年近く早く目覚め『彼』と出会ってしまう。2188年に『彼』の同士の探査船と一緒に宇宙に上がる）

少女は傍らを歩くスーツの女性を見る。

（そして、今、私の側にいるソーニャ・カーリン部長は『私の姉』

だ)

「お嬢様？私の顔に何か？」

『カーリン部長はいつ見ても綺麗だな、って思って見ていました』

「あら、社長みたいな事を言っんですね」

(うー、あの顔でそんな事言っつのは、ムツリスケベの証拠です)

「ところで、お嬢様、一つお伺いしても良いかしら？」

『はい？何でしょう？』

「どうしてデイスティニーを『金の剣』としてヴェーダに登録させたのかな？って」

『昔、地球でお世話になった時、私のお世話をしてくれた方々がデイスティニーを見てこの名前を付けました』

「そうだったの。私はあの時のコードネームだと思っていたわ」

——金の剣。それは星団歴2998年惑星ジュノーでのコーラス王朝とハグーダ帝国の最終戦争において、『銀の剣』と共にデイスティニーが投入された際のコードネームだった。

『考えることは、皆同じなのかもしれませんね』

「クス、案外そうかもね」

少女とスーツの女性は社長室の扉を叩く。

「ログナー社長、ラキシスお嬢様をお連れしました」

「ソレスタルビーイング『所属機』だと!？」

外宇宙航行艦スメラギのティエリアの船室。

ミレイナの報告にティエリアが驚きの声をあげた。

『はい、です。ディステイニーはヴェーダにソレスタルビーイング所属機として登録されていました』

ティエリアは頭を抑えながら自らに冷静になるように言い聞かせるが、明らかに動揺していた。

「ミレイナ、待ってくれ。ヴェーダを掌握している僕やリジエネでも、そんな機体は知らない!」

ティエリアはヴェーダに計画されていなかった『トリニティ』による武力介入を思い出させたが、ミレイナの説明で更に驚くべき事実を知ることになる。

『これは巧妙に仕組まれた、ある意味システムトラップです。トラザムシステムとツインドライヴシステムを私達に伝えた、あのシステムトラップにそっくりです』

「まさか、イオリア・シュヘンベルグか!」

『流石アーデさん、大正解です！ややこしい話ですが、ディステイニーを運用する組織はヴェーダに何らかの方法で不正アクセスし、ディステイニーを地球連邦所属機、コールサイン「ゴールド・ソード、金の剣」として不正登録しました。実は、これがシステムトラブルのトリガーになっていました。ヴェーダには既に「ゴールド・ソード、金の剣」は登録されていたのです』

「な、そんなことが！？だが、地球連邦軍のMSが機体を照会したときは『地球連邦軍所属機』として照会されたという記録もある。それに！」

ティエリアが手元の端末からヴェーダにアクセスして『金の剣』を照会するが、やはり『地球連邦軍所属機』とだけ照会され簡素な情報しか表示されない事をミレイナに伝える。

『アーデさん惜しい！です。ヴェーダはディステイニーの情報について上書き禁止、その代わり重複登録するようになっていました』

「重複登録だと？それでは、どうやってオリジナルの情報にアクセスする？そうか、GNDドライブ！」

『またまた大正解。やっぱりアーデさんは素敵です』

「ミレイナ、茶化さないでくれ。だがあの時クアンタのGNDドライブは壊れていたはずだ」

『ELSダブルオークアンタのGNDドライブは原因不明の凍結状態ですが、6号、7号は死んではいません。ダイアグノスから問い合わせればちゃんとお返事します。正確にはGNDドライブによる認証だけではなく、IFF敵味方識別装置の信号とは違う信号による照

会方法を使うことではじめて正しい情報にアクセスが可能になります。これらの条件が揃わないと、不正アクセスで重複登録された偽の情報か、まったく情報が表示されません」

刹那が、ディスティニーと共に撤退する直前、ディスティニーから発せられる地球連邦軍が採用しているIFFを使ってヴェーダに照会していた。しかし、刹那は照会情報に違和感を感じていたのだ。ダブルオークアンタもリジエネの手により地球連邦軍MSとして偽装登録されていた。見る人が見ればそれが偽装だとわかる。ディスティニーの照会画面もダブルオークアンタ同様に偽装されていることに刹那をはじめリジエネも気がついていたのだ。

「相手も特殊な機体識別信号を発信しているというが、ディスティニーにはGNドライブは搭載されていない」

「発見できたのは偶然だったのです。グレイスさんが、ELSダブルオークアンタが収集したデータの解析にヴェーダを利用したことで偶然見つけた事なのです。データの一部がディスティニーを照会するためのキーになっていました」

それは、偶然の発見だった。秘密ドッグに搬送されたクアンタだったが、コックピット内部で戦闘記録や収集したデータを解析していたフェルトが、クアンタに搭載されていたヴェーダのターミナルユニットを経由した調査を行っていたところ、突如クアンタのコックピットにディスティニーの情報が表示されはじめたのだ。

「照会するためのキー？」

「ELSダブルオークアンタの収集したデータにディスティニーの両脚から発信される不可解なノイズを確認できました。ELSダブ

ルオークアンタからヴェーダにそのノイズの解析を依頼したところ
デイスティニーの情報が表示できたわけです。それがこれです』

ティエリア側のモニターにデイスティニーの情報が表示される。

「情報の登録者は、イオリア・シュヘンベルグ！」

流石のティエリアもいい加減驚き疲れる。イオリア自らがデイス
ティニーを調査して登録したことになるのだ。

「さて、ミレイナ！そうなるとデイスティニーは200年以上前の
機体になるぞ」

『私もグレイスさんも何度もデータを検証しました。こちらのデー
タも偽造されたモノじゃないかと思って何度も調査をしました。が、
偽造されたデータという証拠は見つけられませんでした……。デイス
ティニーは本当に200年以上前から存在している可能性が高い
です』

「……」

ミレイナの回答にティエリアも言葉に詰まる。

『悔しいですが、デイスティニーはパパ達がつたガンダム以上で
す……。』

そう言うとミレイナは黙ってしまった。ミレイナはすでに自分な
りにデイスティニーの分析を終えているのだろう。両親が遺した最
高傑作と言えるELSダブルオークアンタを遙かに凌駕するデイス
ティニーの前に自分の非力さを思い知ったのだった。

だが、ミレイナは知らない。人間が作った対話のためのモビルスーツ・ガンダムと、神様が一人の少女にせがまれ、神様本人も知らず知らずに強力作り上げてしまった黄金の巨人・デイスティニーを比べること自体が間違いであることを。

ティエリアもミレイナの心情を察していたが、ミレイナにける言葉を見つけれなかった。

デイスティニーに関する情報は、デイスティニーのパイロットからのヒアリングと、イオリアの独自調査報告という内容だった。ティエリアは報告書を読みすすめる。

西暦2090年、イオリアはバルト海の船旅の途中、『必然』的に海底に鎮座していた黄金に輝く巨大人型ロボットを発見する。

翌年イオリアとその友人は私財を投じ、巨大ロボットをサルベージしイオリアの隠れ家のドッグに回航することになる。

巨大ロボットは海の底に沈んでいたはずであったが、その表面は一切のフジツボや貝類が付着していないどころか錆等も発見されなかった。

イオリアと親友であるE・A・レイが本格的な調査を開始しようとした矢先、巨大ロボットの頭部から一人の少女が姿を現したのだ。

「デイスティニーの頭部に記されていた情報？これは地球の文字なのか！？」

デイスティニーの細部には漢字・アルファベット・数字など地球で使われている文字が記されていたのだ。だが、イオリアとE・A・レイはデイスティニーは地球外で作られたことを直感する。

「少女の名前はラキシス、この巨大ロボット・デイスティニーのパイロットか」

『とても可愛い女の子です』

モニターには栗色の髪のをしたショートカットの少女がイオリアとE・A・レイに囲まれた写真が表示されていた。

「巨大ロボットは、モーターヘッド、ナイトオブゴールド・ラキシス。別名をデイスティニー・ミラージュ。2988年惑星デルタ・ベルンでロールアウトされる。設計者は天照帝、アマテラスのミカド副座式だがラキシス単体でも行動可能？」

（追撃神？ミラージュとは？幻想？惑星デルタ・ベルンというのは刹那の報告にあった、宇宙空間にあるのだろう。また天照帝と記されているが、だからと言ってこの人物が地球出身の人間ではないだろう……）

ティエリアは次にイオリアがラキシスとの会話から得られた情報に目を細める。

「1945年、デイスティニーと共に地球を訪れる。当時、第2次世界大戦に枢軸国側に参戦後、再び宇宙に戻るその時までナイトオブゴールドと共にバルト海で眠りについた！？そして、2090年イオリアと出会ったために自ら目覚めた？イオリアが必然と言っていたのはこのためか！」

次にデイスティニーの簡単ではあったが性能が記されていた。

「全高およそ17m、MSと同じ大きさだが重量は144tか。出力は推定3兆3千億馬力以上！？信じられん……桁間違いではないのか？」

「主力兵装はスパッド？とスパイド2本？スパッドは光学サーベルのような物か？スパイドは実剣か。刹那に投げ渡したのがスパイドか」

ここでティエリアはディステイニーの兵装に疑問を感じる。

「ディステイニーにはビームライフルのような射撃武器は見あたらない。そしてレジェネの報告にもあった巨大な大砲、バスターランチャー。アンノウンを蒸発させるほどの破壊力を持っているようだが、射撃兵装がこれしか無い。この機体は格闘戦に特化しているのか？」

ティエリアはディステイニーの桁違いのスペックに呆れていると

『ディステイニーはエンジンも凄いです』

「うわぁ！」

いつの間にか復活したミレイナがティエリアの分析に割り込んできた。

『先ほどのアーデさんにノイズというか信号の発信源は両脚だと話をしましたが、ディステイニーの両脚にエンジンがマウントされていました』

「まさかツインエンジン！？」

『デュアルツイスターというシステムらしいです。更にディステイニーにマウントされているエンジンはGNDライヴのよう半永久

機関のようです。頭部にも同様の小型エンジンが搭載されているようですが、イオリアの調査でも用途は不明でした」

「……ミレイナ、辛いだろうが、ミレイナがデイスティニーがガンダム以上と判断した根拠を話してくれないか」

「はい、ラ・トゥールから発進したGN-X小隊を追い越した機動性や、クアンタを地球まで曳航する機動力も凄いです、それを裏付ける記録がヴェーダに残っていました。低軌道ステーションの観測カメラに地上から飛び立ってくる物体が撮影されていました。ジヤミングにより詳細はわかりませんが、ミレイナはデイスティニーが地球上から自力で飛び立ってきた時の映像だと判断しました、です」

「だが、高々度迎撃パッケージなどの追加兵装の可能性も考えられないか？」

事実、ソレスタルビーイングもキュリオスガスト等が大型GNバーニアを装備して高々度迎撃ミッションを行っている。また、単独での大気圏離脱も可能であった。

「機動力だけなら確かにGNバーニア、GNブースター等の下駄を履かせる等の方法がありますが、それでもGNブースターの三倍の性能は無視できません。次にこの映像です」

ミレイナがティエリアに見せた映像は、クアンタのカメラアイが捉えた映像だった。肩から胸をGNソードVで斬られたサタン・コマンダーが斧を振り上げて最後の反撃を試みる場面だった。

「これは後でELSダブルオークアンタの記録を調べてわかったこ

となのですが、ここでセイエイさんも反応してELSダブルオークアンタの操縦を始めています。しかし、それよりも速くディスティニーの実剣が悪魔に刺さります』

「まさか！」

『この事から、ディスティニーとディスティニーのパイロットも、セイエイさんとELSダブルオークアンタを遙かに凌駕している事がわかります』

「……そうか」

『……以上がヴァステイ家完敗の理由です』

再びミレイナがしくしくと泣き出してしまった。

泣き出したミレイナを余所に、ティエリアはここで現在のディスティニーのパイロット誰なのか疑問になった。

（刹那の話では女性の声だと言っていた。まさか彼女は200年以上生きているのか？）

（彼女は宇宙にあがるその時まで、とイオリアに語っていたが、彼女は何時宇宙にあがった？今日まで地球に隠れていたとは思えない。すると……）

『……アーデさん、乙女が泣いているのに放っておくのは失礼です！』

どうやらティエリアの気を引くための嘘泣きだったらしい。

「ミレイナ、エウロパのミッションについて再度ヴェーダに問い合わせしてくれないか？」

エウロパとは西暦2187年木星有人探査計画のため地球を旅立った大型船だ。だが、計画は失敗する。しかし、それは地球側で偽装した情報だった。本当の目的は木星の高重力下でGNドライブを開発することだった。西暦2314年にELSがエウロパに擬態して地球に襲来することになるのだが……。

『ほえ？……はいはい、わかりました。アーデさんはいつもマイペースですね。』

「ああ、わかっていると思うがELSダブルオークアンタ経由と通常の二通りの方法で頼む。そうしないと……」

『（今の「ああ」ってどっちの意味ですか！？）トラップを発動させる必要があるということですね』

すぐにミレイナから答えが返ってきた。

『アーデさん、特に情報の差異は見あたりませんですう……』

「気のせいだったか……」

『あ、ちょっとまってください。パイロードの情報がELSダブルオークアンタ経由だと違いがあります』

ミレイナが何かを発見したようだ。

『ELSダブルオークアンタ経由の情報ではエウロパのパイロード

が150t程増加されています。これってまさか……」

「恐らくミレイナの考えているとおりだと思う。やはり、彼女、いやディステイニーはエウロパを利用して宇宙にあがったのか！そして何らかの理由があつて再び地球に戻ってきた」

『アーデさん、ちょっと待って下さい。ラキシスさんは100年以上も生きています！』

「ミレイナ、地球の常識で考えない方が良いでしょう。1945年から2090年まで海の底で眠っていた人物だ。それに1945年以前はどこかに別の宇宙を旅していたらしい」

『それではラキシスさんの年齢って……』

「失礼な言い方だが、4桁以上もありえるかもしれん」

『そんな！？ラキシスさんは、どうみても10代の少女にしか見えません』

同じ女性としてミレイナは絶句する。そもそもラキシスが女性なのかという問題もあるのだが。

「しかし、今頃になって地球に現れた？何のために？彼女は刹那とマリナ・イスマイルの死を見届けにと言っていたが……うん、ミレイナどうした？」

『アーデさんは、ラキシスさんやディステイニーの事を考えるのが楽しそうですね。ミレイナは不満です。アーデさんは、ガンダムが負けて悔しくないのですか？』

先ほどから黙々とデイスティニーの情報を精査し考察するティエリアに対してミレイナが口を尖らせ不満をぶつける。

「なんだ、そんなことか。それで不機嫌だったのか」

「なんだとは何ですか！アーデさんはそれでもガンダムマイスターですか！」

「僕もイアンやミレイナが手塩にかけて作ったガンダムが負けて悔しいさ。だが、ミレイナ、君はガンダムを絶対無敵のスーパーロボットと勘違いしていないか？」

「え？」

「驚いたわ。イオリア自らの情報登録とは。それにしても、パイロット混みでガンダム以上の性能とは……頭が痛いわね」

場面は再びスメラギの介護施設。

「ラキシスが『自殺行為』だと言っていた理由がこれだ」

デイスティニーの情報には、ラキシスからヒアリングした惑星デルタ・ベルンをはじめ、ジョーカー宇宙やジョーカー太陽星団についての情報も記されていた。

デイスティニーはジョーカー太陽星団ではモーターヘッドという戦闘兵器に属している事がわかった。

刹那もスメラギもマリナが飛ばされた宇宙は、デイスティニーが製造されたジョーカー宇宙、それもジョーカー太陽星団だと睨んでいた。そこではデイスティニー以外のモーターヘッドもいるはずだ。万が一クアンタとモーターヘッドが対峙した場合、最悪のシナリオも考えられる。

GNドライブ6号・7号が停止し、ELSのみの動力ではクアンタがモーターヘッド相手に太刀打ちできないのは誰の目にも明らかだった。いや、そもそもクアンタが完全な状態であったとしてもモーターヘッドに勝てる気がしない。

スメラギはイオリアの情報に記されていた騎士とファティマという項目も気になっていた。

『それで刹那はどうする気？マリナさんを追いかける気？』

「うん？スメラギ・李・ノリエガ。特別にどうということはない。ELSとの対話の道中、俺とティエリアとクアンタは強大な力の前に何度も倒され、その度に這い上がって、そして未来を切り開いて来た。だからこうして地球に帰って来ることが出来た。今回も何とかなると俺は信じている」

刹那の発言にスメラギは目を丸くする。

『いくら何でも今回は無理です！』

ミレイナがティエリアに食ってかかる。

「ミレイナは刹那とクアンタを信じられないのか？」

しかし、ティエリアは平然としている。

『信じる、信じないの話ではないです！ディスティニーの性能がジョーカー宇宙でどのレベルなのかわかりませんが、それでもジョーカー宇宙の科学力は現在の地球の科学力を凌駕しています。それに、モーターヘッドの搭乗者である騎士とファティマが厄介です』

モーターヘッドを操る、騎士とファティマについてもイオリアの情報には記されていたが、ミレイナの常識を超えていた。

騎士とファティマが操るモーターヘッドについてイオリアも技術者として驚異を感じていた。イオリアの情報には単独でディスティニーを動かすラキシスについて、彼女が騎士なのかファティマなのか明記されていないかった。記されていない理由に『ある単語』を使いたくはなかったとだけ記されていたが。

「僕も今の刹那がモーターヘッドを相手に立ち回れるとは思っていない」

『だったら』

「司令、私は刹那さんをジョーカー太陽星団に送り込むのは反対です。今回ばかりは刹那さんでも生きて帰ってはこれません！」

『お嬢様、今の私は社長です』

「あ、ごめんなさい」

ここでもミレイナと同じく刹那を心配する女性が居た。

旧AEU領、西ヨーロッパの都市にある新興企業の社長室。そこでは、ディステイニーのパイロットであるラキシス、この企業の社長であるログナー、そして秘書ではないが部長のソーニャ・カーリンが、先日のサタン襲来時のデブリーフィングを行っていた。そう、彼らこそが刹那達の戦いをモニターし、ヴェーダをクラッキングしてディステイニーの偽情報を登録した集団である。

ジョーカー太陽星団に魂が飛ばされたマリナ・イスマイルを救出するために、刹那を派遣するかどうかで、ラキシスとログナーが対立していたのだ。当然、ラキシスは派遣には反対していたが、意外にもログナーは刹那の派遣には賛成していたのだ。

「社長はどうして刹那さんが生還出来ると思っているんですか？モーターヘッドの恐ろしさは社長もわかっていているはず」

『確かにお客様の言うとおり刹那とGNT-0000 ダブルオークアンタでは我がミラージュどころか、星団3大モードヘッドの足下にも及びますまい』

「だったら」

『だが、俺は（彼は・あの馬鹿は）ガンダムマイスターであると同時に、今はガンダムだ（だ、です）』

スメラギ、ミレイナ、ラキシスに、刹那とティエリア、そしてログナーが答える。

（刹那、遅しくなったわね）

（意味がわかりません、です）
（司令までソーブ様みたいな、訳わからない事を言わないでください！）

ログナーの社長室。

『カーリン営業部長、刹那とクアンタを倒すのに最良と思われるモーターヘッドをあげてくれ』

「はい、社長。L・E・D・ミラージュとインフェルノ・ナパームの使用を推奨します」

「！」

ログナーの問いにカーリンは即答する。その答えにラキシスは驚いた。

L・E・D・ミラージュとは天照帝が開発したジョーカー星団最強のモーターヘッドである。完全な殺戮マシーンで騎士とファティマは操縦者ではなく安全装置でしかないという。わずか15騎のL・E・D・ミラージュで惑星一つを制圧したという。また、インフェルノ・ナパームとはレッドミラージュが使用する火炎放射器だ。射程150mの火炎放射能力を有しその炎はモーターヘッドだけではなく靈魂などの霊的な存在も焼き尽くす。

『雷丸では駄目なのか』

「はい。GNT-0000ダブルオークアンタであればモーターヘッドの機種は問いません。ホーンドミラージュでも撃破可能です。

しかし、サタン・コマンダーとの戦闘記録を解析した結果、GNT-0000「E」ELSダブルオークアンタ相手ではL・E・D・ミラージユのインフェルノ・ナパームの使用を推薦します」

「イエツタ姉様……どうして」

「お嬢様、ジョーカーのモーターヘッドは『モーターヘッド』戦を考慮して設計されています。モーターヘッドより劣るモビルスーツ相手では問題ないでしょう。ですがL・E・D・ミラージユはモーターヘッド戦は所謂『おまけ』。本来の目的はお嬢様のご存じの通りです。それにお嬢様、今の私はソーニャ・カーリンです」

「姉、じゃなかった、つまり、カーリン営業部長はELSダブルオークアンタはモビルスーツではないと？」

「ええ。能力に開きがありますが、GNT-0000「E」ELSダブルオークアンタはお嬢様のディスティニーに近い存在だと私は解析しました」

ラキシスはその一言に衝撃を受けた。

ディスティニーが躊躇せずELSダブルオークアンタに実剣を渡したのは何かを感じたのではないかと思ったからだ。

『それだけではない。ELSダブルオークアンタ、ええーい、面倒くさいからクアンタだ。刹那もクアンタもELSと融合している。モーターヘッドと接触した場合、ELSがモーターヘッドを取り込む恐れがある。最悪、騎士とファティマ毎な』

社長室が静まりかえる。モーターヘッドの擬態。擬態した瞬間、ELS達はその情報を共有する。もし、モーターヘッドが取り込ま

れ、大量のELSモーターヘッドがジョーカーに出現したら……

『だが、その可能性は低いだろう。刹那がジョーカー太陽星団相手に積極的に喧嘩を売る理由がない』

確かにその通りである。ELSとの対話の道中、刹那達から攻撃を仕掛けたことは一度もなかったのだ。

「ですが、社長。だからと言って刹那とELSダブルオークアンタがモーターヘッド相手に生き残れる保証にはなりません」

ラキシスが食い下がる。

「確かにお嬢様の仰るとおり、刹那さんとELSダブルオークアンタはマリナさんの加護を受けていなければサタン・コマンダーに殺されていたでしょう。サタンに殺された者は魂は永遠に魔界を彷徨うとも言います。社長と違い、ELSと融合した刹那さんでも復活は出来ないかもしれません」

『マリナ皇女の加護がなければクアンタではサタン・コマンダーを倒すのは不可能だったでしょう』

刹那達は知らないことだが、サタン・コマンダーを相手に出来るのは、ジョーカー太陽星団でも僅かしかいない。その内の一人が、今ここにいるログナー社長であった。

しばらくの沈黙の後、ログナーが切り出した。

『お嬢様の刹那を思う気持ち、ログナー確かに理解しました』

ログナーがラキシスに頭を下げる。

「ログナー社長！考えを改めてくれるんですね！？」

『お嬢様、それではこうしましょう。ミレイナ『博士』と刹那は近々我が社を訪れる予定です』

「はい、お二人とも来週の創立記念パーティーに招待しています」

『ですが、お嬢様、彼らの意志を尊重することも大事です。パーティーの時に、私が刹那の実力を試して彼を説得してみましよう。それから彼らに自分たちがジョーカー太陽星団で通用できるのか判断させてはどうですか？つまり、ちょっとだけ騎士戦を体験してもらい、考えを改めて貰うのです』

「（騎士戦の体験という部分が若干ひっかかりますが……）わかりました。その方法でお願いします」

ラキシスもログナーの提案を受け入れる事にした。今度はラキシスがログナーに軽く頭を下げる。

『お嬢様、そんなことをされては困ります』

だが、言葉と裏腹にログナーの口元が若干緩んでいたことを見逃すカーリンではない。

（あれは絶対何かを企んでいるわ。刹那さん、ラキシスごめんね、ごめんね、うちのマスターを許してね）

心の中で必死に謝るカーリンだった。

外宇宙航行艦スメラギ。

『アーデさんはセイエイさんの意志を尊重するんですね？』

「ああ、刹那の意志を無視できない」

『アーデさんに負けました。セイエイさんのやりたいようにやらせます』

「ミレイナ、僕はただが理由で刹那の意志を尊重しているわけではないぞ」

『？』

「ミレイナならクアンタをモーターヘッドと互角に渡り合えるようにパワーアップしてくれると思っているからさ」

『きゃー、アーデさんはこのタイミングでなんて事を言うんですか』

「ミレイナでも無理か？」

ティエリアが、ミレイナに笑顔で問いかける。

『……ずるいです。わかりました。ええわかりましたとも！ヴァステイ家の底力をお見せするです！』

ほとんど、やけくそ気味で答えるミレイナであつたがその顔には自信が現れていた。

ティエリアはそんなミレイナから、ミレイナの父親、イアン・ヴァステイの面影を見るのだった。

（ミレイナ、君達親子の作り上げたダブルオークアンタには異世界の技術者達の夢や希望の未来にかけの思いが込められている事を忘れないで欲しい。君なら必ずその思いを実現できると僕は信じている）

再びログナーの社長室。

ラキシスは退室しており、社長室にはログナーとカーリンの二人だけだった。

そこには社長と部長という関係ではなく、まるで夫と妻という顔をした二人が居た。

『当面の問題は、刹那がマリナを連れ戻すまでの間、サタン共と戦う組織をどう作るかな』

ログナーは先ほどラキシスにはああは言ったが、やはり刹那をジョーカー太陽星団に派遣するつもりだった。

「はい、マリナさんが不在ですので、いつサタンの侵攻があるかわかりません」

『イノベーターでもサタン相手に完敗だった。イノベーターでも騎士の代わりにならないか……』

「マスターその比較は間違いです。そもそも外宇宙での異種との対話のために人類が進化したイノベーターと、戦闘を目的に作られた騎士ではスタートラインが違います」

『……地球側でサタンと戦える人材のリストアップを続けてくれ』

「はい、承知いたしました。マスターお聞きしても良いですか？」

『うん？』

「マスターはクアンタをどう評価していますか？」

『……化け物だな』

「え？」

『進化の止まらない化け物だ』

「それは、どういう意味ですか？」

『そのまんまの意味だ。モーターヘッドはジョーカー太陽星団では確かに強力だ。だが、ナ・イ・ンも言っていたがそれは現在のジョーカー太陽星団での話だ。AD世紀のマシンメサイアと騎士に比べれば劣る。それにジョーカーはサタン共と同じく進化の袋小路に突入し、緩やかに退化の道を歩み始めている』

事実、最強のモーターヘッドであつたが星団歴4000年前後から寿命から次々と不稼働になっていく。また、騎士の血も薄まり騎士の弱体化や、ファティマも寿命を迎え始めていた。反面、刹那やELSダブルオークアンタには寿命という言葉がなかった。だが、

それでも現在の刹那とELSダブルオークアンタには優位性はあまり見られなかった。

「ジョーカー太陽星団出発までに、どこまでELSダブルオークアンタを改良できるかが鍵ですね」

『最悪、現地改良も視野にいれないとな』

「それでは、マスターのミレイナ『博士』の評価は？」

『……そうだな』

ログナーはカーリンに4本の指を見せたが、最終的に5本全ての指を見せる。

「それは……シグナル・ボーダー5本ということですね？」

シグナル・ボーダーとはジョーカー太陽星団で技術者が身分を示すための飾り紐である。1本線は大学教授等の博士、医師、2本線で大学学長等、3本で医師や博士などの複数の技能を持つ技術者に与えられる。4本線でモーターヘッドやファティマのマイスター、5本線でモーターヘッドやファティマの制作者であるマイトにあたる。つまり、ログナーの評価ではミレイナは5本線のマイトになる。

『ああ。60歳を過ぎたいえ、地球連邦軍の技術者で彼女に匹敵する人材は居ない。だいたい、普通の技術者がELSダブルオークアンタの整備なんて出来るわけないだろう。あんな化け物を平気でメンテナンスや改良出来るのは、ミレイナ博士と、うちの陛下ぐらいだ』

「ああ確かにソーブ様がクアンタを見たら悶絶しそうですね。お父様が生きていたら、刹那さんも危ないです」

カーリンがサラッと凄いことを言っただけ。

『それに彼女にイレーザーエンジンなんて見せてみる。嬉々として解析・改良を始めるぞ』

「……はい、承知いたしました」

カーリンはニツコリとログナーに微笑む。つまり、そう言うことだ。

「所でラキシスには、話をしなくても良いのですか？」

『何の話だ？』

「お惚けにならないで下さい。私達が地球に居る理由です」

第7話 ミレイナ・レポート（後編）（後書き）

次回予告

スメラギの右フックが炸裂する。

そして、シーリンの口から語られるマリナの秘密とは。

後書き

第6話の後書きの通り、双方のファンからブーイングがきそうな内容でした。

MHとMSの性能差、騎士とイノベーターの能力差、そして刹那とELSダブルオークアンタの立ち位置を紹介する大事な話でしたので、あえて書きました。ただ決してFSSage、ガンダム00s ageということではありません。

また、立ち位置を細かく書いてしまうと後の展開に困るので、ばかしているのもそのためです。

前編より後編が長くなってしまいました。そのため一部のエピソードは第8話に持ち越しになりました。

第2章はあと3話で終わるのですが、もしかしたら8話と9話の間に1話だけ寓話を挿入するかもしれません。

実はミレイナの方が主人公刹那よりも高い評価だったのはやり過ぎた気もしますが、ヴァステイ家の人々ならMHでも作れそうです。

今回から普通にMHとかマイスターとかマイトとかFSS用語が登場しますが、解説を始めると物語が進まなくなるのでなるべく行わない方針です。

第8話 退魔の巫女（前書き）

第6話から引きずっている問題に今回はある程度終止符が打たれます。

せつさんはマリナとのこれからの関係に悩んでいます。
それは「キャツキャウフフ」についてのお話です。

第8話 退魔の巫女

スメラギは病室の窓から、介護施設の駐車場からバイクで出て行く刹那を複雑な気分で見送っていた。

「クジヨウ、また刹那はどこか遠い所にも『対話』に行くのか？」

同室のカティ・マネキンが夫が剥いたリンゴを食べながらクジヨウことスメラギに声をかける。

『ええ、今回ばかりは刹那でも難しいミッションになりそうなの……』

「ふーん、あのガンダムでもねえ。はい、ハニー、アーンして」

カティの夫、パトリックが剥いたリンゴをフォークに挿して差し出す。

パトリック、旧姓パトリック・コーラサワー、ソレスタルビーイング武力介入第1被害者であり、刹那の初陣で戦った旧A E U M S イナクトのパイロットだ。それ以降、ソレスタルビーイングとそれはそれは深い縁を持つようになるが、現在は入所しているカティの介護で時々見舞いに顔を出していた。

『貴方たちは、ホント、いつまでも新婚さんみたいね』

スメラギは、右手をさすりながら先ほどの刹那との出来事を思い出し溜息をつく。

スメラギは車椅子から立ち上がり、刹那の胸倉を掴みこつ叫ぶ。

『刹那、貴方本気で言っているの！？』

「本気だ。俺と一緒にではマリナは幸せになれない」

数分の前、刹那から発せられた意外な一言が今回の事態を招いた。

「俺はマリナを助け出しにジョーカー太陽星団に乗り込む」

『うん、私は反対しないわ』

「だが、マリナが地球へ戻るかはマリナの意思に優先する」

『え？』

「もし、マリナが地球への帰還を希望し、地球へと帰還した後、俺は、俺はマリナと別れようと思う」

この刹那の一連の発言にスメラギは耳を疑った。特に最後の「マリナと別れようと思う」等あり得ない発言だった。

『どうして？どうして、急にそんな悲しいことを言うの！』

「よく考えた上での決断だ」

『決断？』

「マリナの国葬の時に、シーリン・バフティヤールから言われたこ

とだ。

『マリナが独身を貫き通したこと。彼女は確かに女性としての幸せよりも国の幸せを選んだ。だけど、他にも理由があったのよ』

今の俺にはどうすることも出来ない」

『それはマリナさんが刹那を待っていたから……』

「今の俺にはマリナの愛に答えてやることが出来ない」

『何を言っているの?』

刹那はスメラギを真っ直ぐ見つめる。

「スメラギ・李・ノリエガ、俺は先日マリナの国葬に参列した。その時に俺はマリナの肉体が棺に入れられ安置される所を見届けた」

「だが、マリナの魂はジョーカー太陽星団に飛ばされてしまった」

『ええ』

「ジョーカー太陽星団でマリナの魂がさまよい続けるのだろうか? そもそも、あちらにはマリナの肉体はない。では、マリナの魂の拠り所は? どうやってマリナの魂は肉体に宿ることが出来るのだろうか?」

『……』

「仮に、『転生』という形でマリナの魂がジョーカーの人々の肉体

に宿ったと仮定する。イオリアの情報ではジョーカーの人々も基本的に地球人と変わりがない、人間という事が分かった」

『ええ、資料ではそうなっていたわね』

「以前のようにマリナが俺を愛してくれたとしても、俺はもう人間ではない。もし、マリナが若い姿で俺を愛してくれたとしても、俺はマリナの愛に応えることが出来ない……」

そして、スメラギが車椅子から立ち上がり刹那の胸倉を掴んだのだった。

「俺はマリナの幸せを優先する」

次の瞬間、鈍い音がした。スメラギの右フックが刹那の顔面にヒットしたのだ。

『何がマリナの幸せを優先するよ！貴方が側に居ないでマリナさんの幸せはないわ』

だが、刹那もスメラギのパンチを喰らっていても動じない。

「俺が若いマリナを愛すれば、マリアの命に関わる恐れがある」

『どうことよ！？』

「俺はELSと完全に融合した『新種』だ。普通の人間であるマリナの卵子に俺の精子が仮に受精できたとしても、マリナの子宮に着床出来るかは未知数だ。最悪の場合、母胎にも影響があるかもしれない」

51年前のELS大戦後、イノベーターと人間、一部分だけのELSと融合したハイブリッドイノベーターと人間の夫婦が居なかったわけではない。当然、子供も生まれているケースも数多く報告されていたが、少数ながら死産したという報告もまったく無かったわけではなかった。

まして刹那のように完全にELSと融合した『新種』と人間の事例はない。刹那の存在は公にされていなかったがヴェーダ上は『刹那』という種族に分類されている。この新種『刹那』が人間の卵子に受精できるかどうか？そんな事が政府の耳に入ったら刹那とマリナは研究施設に送られてしまうだろう。

『だから、マリナさんを地球に連れ戻した後で別れるというのね』

「……そういうことだ」

『このっ！』

再びスメラギの左フックが刹那の顔面にヒットするが、やはり刹那は動じなかった。

『馬鹿も休み休み言いなさい』

「これがマリナの命を救うための最良の選択だ」

『それは貴方一人の勝手な選択よ。そこにマリナさんの気持ちも、今こうしている間にもダブルオークアンタを必死に改良しているミレイナやフェルト達の気持ちを踏みにじる発言よ』

「だが！」

『それに、刹那。貴方はE L S達の気持ちを考えたことがあって?』

「E L S達の気持ち?」

スメラギは、やっぱりね。という顔で溜息をつく。

『刹那、本来の体に戻ってご覧なさい』

「?」

刹那はスメラギの発言の真意が読み取れなかったが、体を人間の肌からE L Sと融合した証である、本来のメタルの肌に戻す。刹那は公共の場では不要な混乱を避けるため人間の肌に偽装していた。

『マリナさん、留守中にごめんね』

スメラギはそう言うとき刹那をぎゅーっと抱きしめる。

「スメラギ!？」

スメラギの突然の抱擁に刹那は驚くが、スメラギは刹那の胸に顔を埋める。まるで恋人にすぎる乙女のように。

『刹那、暖かいわね……』

「スメラギ・李・ノリエガ……」

刹那は自然とスメラギの髪に指で梳かす。それはいつもマリナにしていたように……という自覚は刹那にはなかった。

『刹那が対話から帰ってきてすぐの頃、ここにお見舞いに来てくれた時の事を覚えている?』

「……カティ・マネキンにノックをしなかったため殴られたことは覚えている」

『もう、馬鹿。そうじゃないわよ。あの時も刹那に抱きついたわね。あの時の刹那は体が冷たかった』

「すまない、ELSと融合したことにより金属体質をそのまま出していたかもしれない」

『それは違うわよ。自分でもわからないの?』

「どういうことだ?」

刹那は首をかしげる。

『次にマリナさんとお忍びで見舞いに来たときも覚えている?』

「マリナを勝手に連れ出したため、後でシーリンに怒られたな」

刹那の胸の中で呆れかえりながらスメラギは続ける。

『……あの時も刹那に抱きついたけど、刹那は体は暖かったわ』

「ELSとの体温調整がうまくいっていたのかもしれない」

『馬鹿。またまた大外れ。本当に自分でも分かっていないようね』

「？」

スメラギは、刹那の首の後ろに回すと刹那の耳元で囁く。

『刹那は毎晩マリナさんと同じベッドで寝ていたでしょ？』

「なっ！」

どうしてそれを！？と驚く刹那を余所に、スメラギは溜息混じりで返す。

『恋人や夫婦なら普通の事よ』

刹那とマリナの寝室は別々である。特にマリナのベッドは特注品だという事は解説したが、刹那はマリナが寝付くまでマリナに添い寝していた。マリナが寝入った後で、刹那は自分のベッドに戻っていたが、マリナがわがままを言った場合は朝まで一緒だった事も何度もあった。勿論、スメラギはフェルトからの報告ではなく、一般論として刹那に話していた。

『そして、マリナさんはベッドの中で刹那に、こっやってぎゅーっ
と抱きついて寝ていたのね』

刹那を抱きしめるスメラギの腕に力が入る。

『刹那の体の温もりはマリナさんの温もりから学んだものだからよ』

「なに？」

『つまり、マリナさんの温もりをE・L・S達が覚えたのよ。だから刹那の体にも温もりが宿ったわけ』

スメラギは刹那の目を見つめる。

『貴方と融合しているE・L・S達がマリナさんと別れることが最善と思うかしら？』

その問いに刹那は言葉が詰まった。E・L・S達と対話したという自負が刹那にはあったが、それが根底から崩れるかもしれないのだ。

『刹那、確かに貴方がマリナさんの大切にしている気持ちもわかるわし、マリナさんを失いたくないから、自分から身をひこうという気持ちもわかるわ。だけど、マリナさんは貴方がそんなことで悩んでいると知ったら悲しむでしょうね』

スメラギは刹那から離れ、再び車椅子に腰を下ろす。

『刹那、貴方にミッションを伝えるわ。ジョーカー太陽星団に乗り込んで、転生したマリナさんを見つけ出して、押し倒してきなさい。たとえ神様が許さなくても私が許すわ！そして、マリナさんの愛の大きさを実感してきなさい。それも対話よ。そして、自分があの時はこんな小さな事で悩んでいたのかと思い知ってきなさい。わかった？』

再び病室。

（自分でも支離滅裂な事を言っちゃったわね。でも、刹那。貴方の

幸せがマリナさんの幸せだということに気がついて)

スメラギは窓から空を見上げながら二人の行く末を案ずるのだった。

刹那はスメラギと別れた後、ミレイナの会社のオフィスに身を寄せていた。

ミレイナの会社が介護用のサポートデバイスを販売していることは前に述べたが、会社の設立にはもう一つの目的があった。それは、ソレスタルビーイングメンバーの雇用先の確保である。

ソレスタルビーイングの隠れ蓑と言ってしまうえば実も蓋もないが、先の悪魔との戦闘で大破したダブルオークアンタは事実、ミレイナの会社名義の倉庫で修理が行われていた。

刹那は社長室でミレイナと面会していた。

『セイエイさん、これが以前お話しした、創立記念パーティーの招待状です』

ミレイナの会社を鼻屑にしている取引先からの創立記念パーティーの招待状だ。この段階では、ミレイナも社長のログナー以下、ソーニャ・カーリンの正体を知る由もなかった。

『セイエイさんは勿論、出席してくれますよね？』

「……考えておく。ところでミレイナ、クアンタの状況はどうだ？」

『（うう、逃げられたです）大破した部分の修理は続行中です。G

Nドライブ6号・7号は停止した状態です。依然として原因はわかりません。現在、ELSダブルオークアンタはGNドライブを使わない駆動方式を研究中です』

ミレイナの発言に刹那は驚く。

「ELSによるコントロール以外の方法あるのか？」

『ELSコントロール強化と新機軸の二通りを研究中です。コックピットシステムの入れ替えも視野に入れて作業を進めています』

「コックピットシステムの入れ替え？脳量子波だけではないのか？」

『GNドライブ復活後はセイエイさんが、ELSダブルオークアンタを操縦することになりますが、従来の操縦方式ではセイエイさんとELSダブルオークアンタにタイムラグがあります。モーターヘッドの資料では、操縦する騎士の動きをトレースできるコックピットが採用されていることがわかりました。これらを踏まえて、コックピットシステムを新しく作り直します』

「そんな事が可能なのか？」

『セイエイさんにピッタリなコックピットシステムを開発するので期待して待っていてください』

ミレイナは自信たっぷりに刹那に答えるが、刹那にはミレイナのその表情から疲れを感じ取っていた。恐らくまともに寝ていないのだろう。

『ですが、セイエイさん、これは暫定的な措置です』

「暫定的な措置？」

『ガンダムは元々はGNドライブから発生するGN粒子を動力源として開発されています。確かにELSダブルオークアンタはそういう意味ではGN粒子以外の動力源でも活動可能になっていますが、GNドライブでの活動を100とするならばELSによるコントロールはせいぜい60程度です。現在、100になるべく近づけるべく改修作業を行っていますが、ミレイナ達でも80が精一杯です』

「武装システムの問題もあるか」

『はい。GN粒子を使用する兵装は使えません。それ以外にも粒子テレポートも使用できませんし、トランザムもクアンタムバーストも使用できないのは痛いです』

「モーターヘッドとの戦いもそうだが、ジョーカー太陽星団でも悪魔と出会ったら戦いは避けられないだろう」

『セイエイさん、無理をしないで下さい』

ミレイナも刹那がそれでもジョーカー太陽星団に行くのはわかっているのだが、つい口に出してしまう。

『ところでセイエイさん。先日、スメラギさんの所に行っていたときに何かありました？』

「……何かとは？」

スメラギからミレイナに話がいったのか？と刹那は若干焦る。

『ELSダブルオークアンタをメンテナンス中に一瞬だけ勝手に起動したんです！幸い、オーバーホール中で分解状態でしたのでハ口達や作業員に怪我はなかったですが、胴体から外されていた手足が勝手に動き出したときはビックリしました』

刹那はドキツとした。もしかして、スメラギに詰め寄せられたときの事かもしれないと思った。

『セイエイさんだけではなくダブルオークアンタもELSと融合していますから、セイエイさんに何かあったのかな』と思ったのものですから。それで、何もなかったんですね！？』

「……ない」

ミレイナは目を細めて刹那の顔をまじまじと見る。

『わかりました。『今回は』セイエイさんを信じるです』

刹那はミレイナに見抜かれているのではないかと思った。

（スメラギの言うとおり、クアンタもELS達もマリナと別れるのは反対か）

『そうそう、今朝セイエイさんにお手紙が届いたです。差出人はバフティヤールさんです』

ミレイナは刹那に手紙を差し出す。電子メールではなく、紙の手紙だ。

「シーリン・バフティヤール！」

刹那は手紙を受け取るとその場で開封し、内容に目を通しミレイナに渡す。

「……ミレイナこれを」

『私も見ても大丈夫なのですか？』

ミレイナは刹那から手紙を受け取る。手紙には日時と場所、4桁の数字で2319とだけが記されていた。

『セイエイさん、これってヴェーダ対策？』

「恐らく。ヴェーダによる通信傍受の対策だと思われる。ミレイナ、その4桁の数字について身に覚えがないか？」

『うーん、すぐにわかりませんが、西暦のような気もしないでもないですが……。この待ち合わせ場所はどこですか？』

「そこは俺達の因縁の場所だ」

『？』

「その場所で初めて俺はマリナと出会った」

それから数日後。イギリス某所。

この場所は58年前、刹那が無差別テロの犯人を追っている最中

にマリナに助けられ、マリナと共に訪れた場所だ。

刹那はじめはマリナに対してカマル・マジリフと名乗っていたが、ついにはコードネームである刹那・F・セイエイを名乗ってしまった因縁の場所である。

（俺もマリナもあの頃は若かったな）

刹那は当時を思い出す。

『ごめん、ごめん、待ったかしら？』

「え？」

刹那は、突然声をかけられ振り返る。そこには長い黒髪が美しい小柄な女性が立っていた。

『あーごめんなさい、人違いでした。私よく間違えるんです。本当にごめんなさい』

女性は頭を下げひたすら謝る。突然の出来事に刹那も対応出来ない。

「いや、間違いは誰に出もあることだ。俺も気にしていない。ん？」

そんな刹那の背後から近づいている人物が居た

『待たせたわね。どうしたの？』

シーリン・バフティヤールである。刹那は振り返り状況を説明する。

「いや、今、こちらの女性の知人に間違われてしまったようだ」

『貴方しかいないように私は見えるけど!?!』

「何!?!」

刹那は再び女性の方を見るがすでに消えていた。

「馬鹿な、消えた!?!」

『刹那どうしたの?』

「……いや、シーリン申し訳ない。俺の気のせいだったかもしれない。場所を変えよう」

『?』

刹那はシーリンの手を引き場所を移動する。

(あの女は何者だ? 気配を消して俺に近づき、そして姿を消した……)

その刹那とシーリンを建物の屋上から観察している人影があった。それは先ほど刹那に声をかけた小柄な女性である。

『刹那・F・セイエイとシーリン・バフティヤールを確認つと』

女性は携帯端末を操作しどこかに連絡をとる。

『司令、二人を確認しました。あと、シーリン・バフティヤールを尾行してきた政府関係者は眠って貰いました』

『え？それ、やりすぎ？減棒？マジですか！え〜〜〜〜』

端末の向こうの司令こと、ログナーは頭を抱えていた。

「クニヤジコーワ家は昔から変わらん……」

シーリンは刹那の運転するオースチンの後部座席に座っていた。

刹那は制服に制帽、そして手袋をはめている。端から見ると、ご婦人のお抱え運転手にしか見えなかった。

『急に呼び出して悪かったかしら？』

シーリンは刹那に話しかける。

「問題ない。それよりも連絡を貰えて嬉しかった」

刹那はルームミラー越しにシーリンの見るが、心なしか表情が曇っている。

『……刹那、私から先に質問をして良いかしら』

「ああ」

『ありがとう。マリナが亡くなったあの日、貴方はどこで何をしていたの？』

「！」

『（やつぱり）アザデイスタンの医療スタッフに確認したら貴方はマリナの死後現れた、というのは本当だったのね』

「……すまない」

刹那はシーリンに地球でのマリナの最後を見届けられなかったことを責められるのではないかと思った。

『うつん、違うの。それで私が怒っているとかではないの』

「……」

『貴方がマリナの側を離れないといけない程の事があった、のね。それを教えて欲しいのよ』

「……だいたい察しがついているのではないか？」

『貴方の口から聞きたいの。元政府関係者の私でも規制がかかっていて情報が得られなかったわ。何かあったのね？』

シーリンは過去のツテでマリナが亡くなった当日の事を調べていた。悪魔達との戦闘はヴェーダによる規制がかかっていたためシーリンは調べることが出来なかった。ナイル級戦艦の撃沈は航海試験中の『不幸な衝突事故』として報道されていたが、それ以上の情報にはたどり着けなかったのだ。

しかし、シーリンは別ルート、それは連邦政府軍関係者の遺族手当の届け出が急増していることから何かあったと悟ったのだ。悪魔による攻撃で戦艦やMS部隊が壊滅したのだ。遺族も相当数にのぼる。そして、マリナが危篤状態での刹那の出撃とマリナの国葬での刹那の謝罪。

それらの点と点を結べば全体像が見えてくる。

刹那はシーリンに全てを話すべきか考えていた。マリナの親友であるシーリンには全てを話した方が良くはないかと考えてはいたが、あまりにも荒唐無稽な話である。一般人には受け入れられないのではないかと思っていた。だが、決断できない刹那を余所にシーリンが口火を切った。

『例えば、悪魔が現れマリナを殺しに来た、とか』

「！」

ルームミラー越しに刹那の一瞬の表情の変化をシーリンは見逃さない。そして、更にシーリンの口から耳を疑う単語が出てきた。

『退魔の巫女マリナ・イスマイルを殺しに悪魔が来たのね』

もう隠せない。刹那はそう思った。道路脇に自動車を止めると、後部座席のシーリンに振り返る。

「全てを話そう」

『私も、ね。刹那・F・セイエイ』

刹那とシーリンは季節外れであつたが砂浜に来ていた。海風が強く、波も高い。

万が一に備えて、二人とも自動車からは降りていなかった。ただ、話がしづらいためシーリンは助手席に移動していた。

刹那はあの日起こつた出来事を全てシーリンに話した。だが、デイスティニーとラキシスに関する情報については伏せていた。シーリンは刹那の話を聞き終えると静かに涙を流し始める。

「シーリン・バフティヤール、これが俺が謝つた理由だ」

『もういいわ、やっぱり貴方は悪くない』

——だが。刹那は心の中でつぶやいていた。

『それよりも、マリナが生きているかもしれない、という望みが私は嬉しいの。貴方のおかげね』

「だが、まだマリナが飛ばされた宇宙までの航路がわからない」

『大丈夫。マリナと刹那ですもの。きっと二人は再会出来ると私は信じているわ』

シーリンは目元をハンケチで拭いながら刹那に笑顔を見せる。

「シーリン・バフティヤール、何故俺をそうまで信じる？貴女はこの話を信じているのか？」

刹那は疑問に思った。普通の人間であれば魂が別宇宙に飛ばされてしまった話など信じられるわけがない。別の宇宙でマリナが転生

しているかもしれない。

そんな話は気が狂った男の世迷い言だと思われるだろう。だが、シーリンは刹那の話を全て受け入れ、そこから希望を見いだそうとしているのだ。

『だって貴方はマリナの運命の人ですもの。貴方は悪魔達との戦いに生き残って、悪魔からマリナを守ってくれた』

シーリンが最上級の笑顔で刹那に即答する。

その一言が雷のごとく刹那の全身を貫く。刹那は先日スメラギに話をしたマリナとの別れ話を思い出した。

「……シーリン・バフティヤール、俺は人間ではない。ELSと融合した新種だ」

『どうしたの突然？私も知っているわ』

「もし、転生したマリナとやり直すことが出来たとしたら」

『……私は応援するわ』

シーリンはアッケラカンと答える。

「だが、俺とマリナとの間に子供をもつことが出来ないだろう。最悪の場合はマリナの命に関わる」

刹那はスメラギがそうだったように、シーリンからも罵声が浴びせられるだろうと覚悟した。しかし、意外な答えが返ってくる。

『そうね、貴方の精子とマリナの卵子では受精しないかもしれない。』

それにマリナの子宮に着床出来るかどうかからないわ。もし、マリナが妊娠したことが政府関係者の耳にでも入ったらマリナは研究施設に連れて行かれ、生まれてくる子供は最悪モルモットにされるかもね』

まさかのシーリンの返答に刹那は驚く。

「ならば、シーリン・バフティヤール！だから俺は、俺はマリナと……」

そこで刹那の口が動かなくなってしまった。正確に言うと体中が動かない。ELS達が刹那の行動を制限し始めているのだ。

『だから、俺はマリナと安心して暮らせる世界へ旅立つ。という所かしら？私としては、ちょっと寂しいわ』

「なっ！」

シーリンからの言葉は刹那とELS達には衝撃的だった。

『きっと、マリナから子供の話は切り出されていないと思うから、今、貴方に話すわ』

『貴方がマリナと同棲できるように手続きをする時、マリナと二人で話し合ったことがあったの。もし、マリナが刹那との間に子供が欲しくなったときに、どんな事態が考えられるか、どう困難を乗り越えるかを』

刹那は体内のELS達がシーリンの言葉を待っていることに気がついた。

『マリナはある理由から卵子を凍結保存しなかった。当時は今から子供をもうけるのは不可能と思っていたわ。だから、あくまでも仮定の話としてだけど』

『マリナと私はE・L・Sと融合した貴方の精子をマリナが受精できるかどうか疑問だった。もし妊娠できたとしても母胎にどう影響するかわからない。最悪、命を落とす危険性もあるかもしれない。それに、連邦政府もイノベーターやハイブリッドイノベーターの人権問題に取り組んでいるけど、一枚岩ではないわ。マリナを研究と称して拉致する連中が居ないとも限らないし、最悪、命を狙われるかもしれない』

シーリンは一瞬だけ車窓から外の風景を見ると溜息をつく。

『でも、その話し合いは無駄だった。結局はマリナの惚気話に変わったわ』

「？」

刹那もE・L・S達も疑問に思う。

『マリナがね』

「でも、私はそれほど心配していないの。いずれ時が来れば自然と刹那の子供を身ごもるような気がします。それに、刹那に融合しているE・L・S達も命の尊さや生命の神秘さを理解してくれる良い機会だわ」

って言うのよ。これには参ったわ。仮定の話だって言うのに、マリ

ナはこれから貴方の子供を身ごもる気満々だったわ』

「マリナ・イスマイル……」

刹那がマリナの名前を口にするが、それは刹那の意志からなのか、ELS達の意志なのかわからない。

『おまけに

「もし、私に何かあったら刹那とガンダムがただ指をくわえて見ているわけじゃないでしょう」

だって。マリナはお婆ちゃんになったと思っていたら、すっかり夢見る少女に戻ってしまっていたわ』

シーリンは当時を振り返りながら思い出し笑いをしていた。

『刹那、どうしたの？』

シーリンと対照的に刹那とELS達は固まっていたのだ。

（俺は、俺たちは、マリナと……）

刹那はマリナとの生活を振り返っていた。

シーリンの言うとおり、マリナとは『対話』をしていたつもりだったが、彼女とはこのような話は一度も行ったことがなかったのだ。マリナは刹那とELS達を全幅の信頼を寄せている。そんなマリナを裏切るような考えをもった自分自信に嫌悪する。

しかし、そんな刹那をELS達がマリナの言葉で元気づけた。

（もし、私に何かあったら刹那とガンダムがただ指をくわえて見ているわけなのでしょう）

マリナの言葉が刹那とELS達の中で何度も何度も繰り返される。

「……そうだ……俺が……俺たちが！……ガンダムだ！！」

『刹那！？どうしたの突然』

刹那からの突然の魂の絶叫にシーリンが驚く。

「シーリン・バフティヤール、ありがとう」

『ええ？どういたしまして！？』

刹那の目は先ほどとは違い虹色に輝いていた。

「シーリン・バフティヤール、今度は俺の質問に答えてくれ」

今度は刹那がシーリンに質問する。

「手紙に書かれていた『2319』の意味と、『退魔の巫女』の事だ。やはり、マリナの家系には何かあるのだな」

『その質問に答える前に、私こそ貴方に謝らないといけないわ。国葬の時に嘘をついたことについて。ごめんなさい』

シーリンは刹那に頭を下げる。

「いや、謝らないでくれ。あの時は事情があって話を出来なかったと俺は理解している」

『貴方はいつも優しいのね。刹那・F・セイエイ』

「それで2319、こちらでも調べてみたが何もつかめなかった」

『そうでしょうね。貴方たちソレスタルビーイングが関わるような大事件はなかったもの』

「やはり西暦か！」

『ええ、貴方がELSとの対話のために地球を旅立ってから5年目の事よ』

「2319年、マリナが倒れた年」

『ええ、そして私達が悪魔と遭遇した年』

ELS大戦後、マリナと私はアザデイスシーリン・パフティヤールタンだけではなく、中東全域の復興に努めるために世界各地を飛び回っていた。旧ユニオン領の経済特区日本での滞在先の出来事だった。

「マリナ、外務大臣との午後の面会時間が変更になったわ。少し時間が出来たから今のうちに休憩を取りましょう」

『ええ、シーリン、そうする、わ』

床に何かがあたったような鈍い音がしたと思った矢先、マリナは倒れていた。

「マリナ、ちよつとどうしたの！？マリナ、返事をして。マリナ！マリナ！誰か来て！」

マリナは倒れたときに頭を打ったのか返事をしなかった。すぐに病院に搬送されたわ。

長い時間、精密検査が行われ、私達が医師と話が出来たのはその日の夕方のことだった。

「ドクター、マリナの様態は？」

「貧血から来る失神です。ですが、倒れたときに頭を打っています」

「え？」

「……現段階では皇女の意識がいつ回復するかはわかりません」

医師はそう言って私から目を背けたわ。

「ドクター！マリナは、マリナ皇女はこれからのアザデイスタンに必要な人なのです！」

「我々もそれは分かっています。ですが……」

その晩、私は意識を失ったままベッドで寝かされているマリナの手を握っていた。

「マリナ、貴方はアザディスタンに必要な人材なのよ。貴方じゃないと駄目なの。それに、彼はまだ帰ってきていないでしょう？元気な姿を見せないと駄目よ。だからお願い目を開けて頂戴」

でも、マリナは答えてくれなかった。

次の日、私はマリナの入院手続きや今後の会談スケジュールの変更やら手続きに忙殺されていた。

当時のアザディスタンの病院よりも設備が良かったから、そのまま入院させることにしたの。

オースチンの車内。

「これはニュースで報道されたから記録に残っているわ」

「ああ、ヴェーダにも当時のJNNのニュース映像が残っていた。そして病院火災か」

「でも、本当は違ったの」

マリナが入院してから一週間が経過した。マリナの意識は回復も悪化しなかった。だけど、あの晩、マリナの容態が急変したの。

「ドクター！これはどういう事です！？皇女は貧血だったのではないですか？」

「我々も急変の原因がわかりません。最善を尽くしているのですが、

現在の医療技術でもわからないのです」

頭の中が真っ白になったわ。突然、マリナの死が現実のものとなったのだから。

私はその晩もマリナの病室に泊まり込んでいた。

「マリナ、貴女も眠り姫という年でもないでしょう？ 好い加減、目を覚ましてくれないかしら？ でも、王子様のキスで起きるならELS達に彼の行き先を聞きに行くんだけどね」

呼吸器を着けられたマリナは返事をしなかったわ。気がついたら、いつしか私もマリナの手を握ったまま寝ていたの。

突然の雷の音で目が覚めたの。雨音もなく、辺りは不気味なほど異様なほど静まりかえっていたわ。

さらにマリナに取り付けられたバイタルモニターも消えていた。

「だれ？ 外に誰か居るの？」

雷の光でカーテンの外に何かの影が見えたの。

その時のマリナの病室は20階の個室だったわ。外に人が居るわけ無いのに。

私はカーテンを開け外を見た。外を見た瞬間、声が出せなかった。それは骨と皮だけの資格好をしたモビルスーツぐらいの巨大な物体だったわ。それが翼を広げ、宙に浮かんでいたの。

あれは正に『悪魔』だった。

手にした長い筒のようなもの、いえ、武器を私に向けてこう言っ
たわ。

「退魔の巫女の力が弱まっている今が好機だ」

B級映画の悪役の台詞に聞こえたわね。

私はすぐに窓から離れて、マリナをベッドから連れて逃げようとしたの。

意識を失っているマリナをどうやって車椅子に乗せたかは覚えていないけど。

でも病室のドアに手をかけたけど開かなかった。ロックされていたの。

「お願い、ここを開けて！誰か居ませんか！」

ドアを何度叩いたかしら。次にすぐにナースコールを呼んだわ。でも、繋がらないの。

それに、あれだけの巨大なモビルスーツ位の大きさの物体が動いていれば、病院だけではなく、深夜といえども街中が騒ぎになるはず。でも静かだった。まるで世界に私とマリナだけが取り残されたような感覚だったわ。

「無駄だ。巫女共々、今楽にしてくれようぞ！」

悪魔はマリナの病室の窓ガラスを粉々にしたわ。私はガラスの破片がマリナに刺さらないように病院の廊下側に逃げ込んだの。でも、ドアはロックされているから逃げられない。

そして悪魔の手が病室に入り込んできたの。私とマリナを捕まえようと6本の指が迫った時、

『エクシアの名において退魔を命ずる』

マリナが突然喋ったの。

「エクシア!？」

刹那は聞き覚えのある名前に驚きの声を上げる。

「貴方のガンダムのコードネームと似ているわね。続けるわ」

悪魔の手が私達に迫った時、凄い轟音と共に、悪魔の手は病室から引き抜かれたわ。

私は恐る恐る病室の外を見たの。

雷雲の中から白いモビルスーツが降りてきたの。

「刹那!？」

はじめは刹那、貴方がガンダムで駆けつけたと思ったのよ。

でも、違ったわ。GN粒子も放出されておらず、何だか偉そうな態度で降りて来たんですもの。

サタンは奇襲攻撃を受けて病院の駐車場に叩き落とされていた。

二つの羽をもがれた格好だ。

そのサタンの足元に、やはり巨大な機動兵器が空から降りてくる。

「エクシアめ、召喚するなら時と場所を選びやがれ」

機動兵器の操縦者達はサタンに一撃を食らわした巨大な剣を構え直す。

「マスター、エクシアさんとの契約を確認しましたが『いつ・いかなる時も』になっています」

「イエッタ、そんな事はわかっている。だが、サタンと戦うなら装備というものがあるだろう」

巨大な機動兵器は純白の装甲の彼方此方に装飾が施されていた。肩には巨大なプレートが取り付けられており、左肩前プレートと、右肩後ろのプレートには黄金の翼と角を生やした獅子のような巨大な装飾が描かれていた。

左腕にセットされた巨大な盾にも装飾が施され、赤い十字架が描かれている。まるで、式典の最中から抜け出てきたような出で立ちだった。

「スパイドを持って出撃できただけでもマシです。これが、けん玉フレイルだったら格好がつきません」

機動兵器は地上に降り立ち、病院を背にサタンと向き合う。

「貴様は何者だ！？巫女の加護を受けた騎士か？」

サタンは機動兵器を睨み付けるが、操縦者達は怯まない。

「今晚の当直医さ」

「ふ、ふざけるな」

サタンはバックステップで一旦距離を取る。

「サタンはこいつ一匹か？ イエツタ、伏兵の可能性は？」

「装備からすると、特殊潜入工作員と思われます。周囲にサタン・コマンダーの反応はありません」

「巫女の方が弱まっているときに来やがったわけか。刹那の奴め」

「マスター、わかっていると思いますが、『ストライクル』の装甲は飾りですから戦闘機動は、最小限にしてください」

サタンは手にした火炎放射器を急襲してきた機動兵器『ストライクル』に向ける。

「チィ、式典用のベイルでは防げない」

だが、ここでストライクルが火炎放射を回避すると病院に直撃してしまう。そうなれば、マリナを含めて入院患者は一瞬のうちに蒸発してしまうだろう。

ストライクルは盾で火炎放射を防ぐのをあきらめ、手にした剣で風を起こす。いや、風というレベルではない。

ソニック・ブレード、真空斬りだ。ソニック・ブレードによって火炎放射器から放たれた火球は火炎放射器ごと斬り裂かれる。しかし、火の粉が病院に飛び火してしまった。

「マスター！」

「イエツタ！ 病院が丸焼きになる前に、さっさと片付けて結界をぶち壊すぞ」

ストライクルは手にした剣を鞘に収める。サタンも、ソニック・

ブレードによって破壊された火炎放射器を投げ捨て、帯剣していた剣に手をかける。居合いの構えだ。ストライクルの背後では火災が広まっており、一刻の猶予もない。サタンが剣を抜く瞬間！

「ブラインド・ソード！」

ストライクルの居合いが悪魔のそれを勝った。剣を抜く瞬間に放たれた超高速のショックウェーブがサタンを切り裂く！

「ば、化けものめ……」

サタンは体を切り裂かれながらも食い下がる。

「鏡を見てから言え」

ストライクルはサタンの頭部に剣を突き刺しながら答える。

「……巫女の命が、尽きるとき、必ずや、殺して……くれようぞ。グエー！」

サタンは断末魔の声を上げて跡形もなく消えてしまった。

それは一瞬の出来事だった。

悪魔が放った火球が粉々に消し飛び、白いモビルスーツが悪魔を切り裂いたのだ。

だが、すぐに火災報知器の音で私は現実に戻る。

悪魔が放った火球が粉々になったが、その時に飛び散った火の粉

が病院に引火したのだった。

「マリナ！」

先ほどと違い再びマリナは答えなくなった。早くマリナを連れて逃げないといけない。だがここは20階だ。

廊下に出るドアのロックは今度は解除されていたが、扉が僅かしか開かない。それどころか、扉から煙が部屋に入ってきたのだ。

「ゴホッ、ゴホッ」

煙で咳き込む私。このままではマリナを連れて逃げる事が出来ない。

「手に乗れ」

部屋の外に白いモビルスーツが来ていた。手を差しのべ、私達にそこに乗れというのだ。

私は躊躇しなかったわ。悪魔よりもマシだと思ったのもあるけど。私はマリナを何とか掌に乗せて病室を脱出したの。

「マスター、式典用装甲のおよそ7割が今の剣技と火炎放射器の熱で溶けています」

彼女はコンソールパネルに表示されるダメージ情報を主に伝える。彼らの駆る『ストライクル』は式典用の装甲が装備されている時の名前である。その元となっている機体は凶悪極まりない機体だが、式典時は通常装甲の変わりに、装飾が施されたペラペラの装甲に交

換されているのだ。実戦投入する時は式典用の装甲が外されて本来の装甲に取り替えられるのだ。

「始末書で済む問題ではないな、イエツタ。エクシア達を助けたら、一旦病院から離れるぞ。この世界の機動兵器と遭遇する方が問題だ」

彼らの駆る『ストライクル』は元々はL・E・D・と呼ばれる機体である。その彼らと機体性能を持つてすれば地球連邦軍のMSが束になっても勝つ事は難しいだろう。しかし、彼らの目的はサタンとの戦いである。

「私も賛成です。ジャミングを開始。マスター、離脱コース表示します」

ストライクルは、マリナとシーリンを駐車所に下ろした。

「貴方たちは一体!？」

私は白いモバイルスーツに呼びかけたわ。だが、白いモバイルスーツは無言で飛び去ってしまった。

「白いモバイルスーツか……何か覚えていることはあるか？」

刹那はシーリンに確認する。刹那の中ではモバイルスーツではなく、モーターヘッドではないかと予想していた。ディステニー以外のモーターヘッドも地球に居る可能性が出てきたのだ。

「昔の話だからよく覚えていないけど、GN粒子が出ていなかったことと、凄いメカニカルノイズだった事を覚えているわ。カタロンのモビルスーツの整備工場でもあんな音は聞いたことがないわ」

私達が駐車場に降ろされた後、すぐに消防車や救急車が到着して救助がはじまったわ。

避難中に怪我人が出たけど、死者が出なかったのは奇跡ね。

『……ここは？』

マリナが目を覚ます。

「マリナ！良かった気がついたのね」

『シーリン？どうしたの？それにここは？』

「どうしたの？じゃないわよ。良かった目を覚ましてくれて」

思わず泣いてしまったわ。歳をとると涙もろくなるのよね。

マリナはあの火災の後、すぐに別の病院に移された。その翌朝だったわ、マリナが目を覚ましたのは。

結局、元居た病院は火災により一時閉鎖。建物の周辺も原因不明の損壊で酷い状況だったわ。

恐らくあの悪魔と白いモビルスーツのせいね。

でも、不思議だったのは誰も悪魔と白いモビルスーツが戦っていたのを見ていなかった事。

「マリナ、貴方は倒れて病院に運ばれたのよ」

『……ごめんなさい、シーリン。良く覚えていないの。また、貴女に迷惑をかけたのね』

「気にしないで。マリナは快復することだけを考えて」

マリナの健康状態は問題なかった。まるで急変していたのが嘘だったように、頭を打った後遺症も検査では確認されなかったわ。

「シーリン・バフティヤール、マリナが快復できたのは貴女の看護のおかげだと俺は思う。ありがとう」

「そんな事無いわ。でも、そう言っていただけと嬉しいわね。続けるわ」

刹那はここまでの話を一切マリナからは聞かされていなかったのだ。

マリナの退院の最後の日に、私とマリナは病院の屋上に来ていたの。

「マリナ、一つお願いがあるの」

『シーリン、今更何を改まってそんな事をいうのかしら？私と貴女の中じゃない』

「……そう、だったわね」

「マリナ、『エクスシア』という人を私に紹介してくれないかしら？」

私はマリナには悪いけどカマをかけさせて貰ったの。
その時、マリナの顔色が一瞬だけ変わったのを私は覚えている。

『……それは無理だわ』

「どうして？」

『その人はもう居ないの』

「もう居ない？」

『エクスシア王女は我が家の古いご先祖様だから』

「！そう、それでは無理ね」

『シーリンはエクスシア王女をどこで知ったの？王女は何世紀も前の人よ』

「……」

『アザディスタン王国は新興国だけど、王家の血は何世紀も前から脈々と受け継がれてきたの。イスマイル家は古い家なの』

『エクスシア王女は中東王家の出身だった。とても綺麗な女性で、明るく国民にも愛されていたそうよ。そんな彼女にはある伝説があ

るの』

「伝説？」

『彼女は歴訪で諸外国を訪れると、必ず気前よく資金援助を行っていたそうなの。災害で苦しむ国があれば、自ら足を運んで喜んで復興資金や物資を援助したわ』

「今のアザディスタンとは逆ね」

これにはマリナも苦笑する。

『そう、当時の中東はオイルマネーで潤っていたからお金はあったの。当然、王女の外交を面白くない人々も多かった。一部の王家の人間や大臣達も面白くなかったそうよ。でも、王女は「いずれ石油が枯渇し、新しいエネルギーが登場した時、我が国は成り立たなくなるでしょう。だから、今のうちに世界に貸しを作っておくの」って日頃から周囲に話をしていたの。でも、どう考えても貸しの方が大きすぎて王女は歴訪は縮小され、お目付役が大勢同行するようになったの』

「それでは私達は王女の代わりに取り立てているのね」

『そうかもしれないわ』

マリナの顔に笑顔が戻ったと思った次の瞬間

『でも、この伝説には続きがあるの』

マリナの表情が曇り始める。

『エクシア王女が、歴訪中の被災地訪問で事故に巻き込まれたことがあったの』

「まさか、その事故で亡くなったの？」

『いいえ、王女は亡くならなかった。しかし、同行していた当事国の関係者や王家の人間、王女を除く大勢の人が亡くなったそうよ。王女は事故現場にほど近い場所で発見されて助かったそうなの』

「それは良かったわ。王女は悪運が強いのね」

シーリンも安堵するが、マリナの表情は更に曇る。

『だけど問題があったの』

「問題？」

『事故の直前「悪魔に攻撃されている」という通信記録が残っていたの』

「悪魔！？」

私は先日の悪魔の襲撃を思い出した。体に悪寒が走る。

『只一人生還した王女だったけど、悪魔と遭遇した話は誰にもしなかった』

「どうして？」

私はマリナに詰め寄ったわ。悪魔と遭遇した私としては非常に興味があつたから。

『だって、悪魔と言っても誰も信じてくれないわ。それどころか王女が気でも違つたのか？と思われてしまふでしょう？』

確かに当事者以外は悪魔なんて言っても信じて貰えないだろう。私は自分が『当事者』だと言うことを忘れていたわ。

『でも、以前から王女を良く思っていない人々が「王女が悪魔と契約して同行者を殺した」って噂しはじめたの』

私は戦慄したわ。もし、先日の病院襲撃で私とマリナだけが生き残っていたら同じ事を言われたかもしれない。

『当然、噂は王女の耳にも入ったわ。でも、王女は一笑に付し今まで通り振る舞つたの』

「彼女強かつたのね」

『でも、周囲、具体的には王家としては、やはり問題だった。王女が悪魔と契約していると噂されては困るの』

「……それで彼女はどうなったの？」

『王女は王宮の離宮に幽閉されたわ。建前上は王女を悪魔から守るため、という理由だけど。でも、彼女を気に入らない王家の人間や大臣達はこの機会に彼女をこのまま亡き者にするつもりだった』

「だけど、それでは子孫は？イスミール家は？」

『そう、ここからが彼女の本当の伝説なの』

『ある晩、彼女を殺しに本当に悪魔が現れたの』

「え！」

『城壁より大きい悪魔だったそうよ。それで本当に悪魔が現れてお城は大混乱。国王や側近の大臣は幽閉された王女が仕返しに悪魔を呼び出したんだって言いはじめ、王女を離宮から連れ出して王女を殺そうとしたの』

「そんな……」

『だけど、いよいよ悪魔がお城を攻撃したとき、怖くなった国王や大臣は我先に逃げ出したの』

「王女は？」

『結局、王女が残った兵士をまとめてあげて悪魔と戦ったの』

「す、凄いわね」

『だけど、悪魔の前には攻撃も効かず絶体絶命のピンチ。その時に、王女は黒き巨人を呼び出したの』

「黒き巨人！？」

私は悪魔を撃退した白いモビルスーツを思い出した。モビルスーツは他にもいるの！？

『黒き巨人は見事悪魔を撃退。そして王女は悪魔を退けた英雄として再び国民からも迎えられるようになったの』

私はその光景を想像するのは難しくはなかった。先日のように悪魔を相手に謎のモビルスーツが戦う光景を。

『以上が我が家に伝えるエクシア王女の伝説よ』

「凄い伝説ね」

『黒き巨人だなんて、モビルスーツが登場する遙か昔の世界の話にありがちなお伽噺よね』

マリナは遠くを見つめる。

「その後、逃げ出した王様や大臣はどうなったの？」

『王女を幽閉した国王や大臣を追放するべきだ！という声もあったけど、エクシア王女は国王や大臣達を許したそうよ』

「それが貴女のご先祖様なのね」

『ええ』

（……おかしい。悪魔を退けた王女なら、退魔の『王女』になるはず。あの時、悪魔達は退魔の『巫女』と言ったのは何故だ？）

マリナは深い溜息をついた後で、何か決心したよう表情で私に向き合ったわ。

『シーリン、それが我が王族の、いえ、女性にとって辛い歴史の始まりなの』

『アザデイスタン王国では女性に政治が関われなかったのは、貴女が一番良く知っていると思う』

「……ええ」

『では、なぜ私が皇女に選ばれたのか？王制復活のための象徴として？国の舵取りを大学を出たばかりの女が出来るほど甘くはなかった、というのは側で見ていたシーリンが一番良くわかっていないはず』

私は当時を振り返り、マリナにかける言葉が見つからず苦笑した。

『エクスシア王女が悪魔を退けた話から、いつ頃からか分からないけど国が衰退する原因の一つに悪魔の仕業と考えるようになった。そこで、国が大変な時代を迎えたとき王女や皇女を国の代表にして、国の災い、つまり『悪魔』を一切合切を引き受けさせる習慣が出来た。すると不思議と次の代が繁栄するの』

「そんな、非科学的な！」

でも、すでに自分が十分非科学的な状況に置かれていたのを忘れていたわ。

『確かにシーリンの言うとおり、この話は全ての王家の女性が該当するわけではないから信憑性が怪しいわ。だけど、大変な時代を経験した王女や皇女の次の代は国が栄えてきたわ』

「まさか、マリナ、貴女」

『そう、私は悪魔を退けるために選ばれた女』

マリナ、そんな悲しい顔で言わないで。

「……違う！」

『シーリン！？』

「マリナは退魔の王女ではない。普通の女性よ。絶対違うわ」

私は叫んだ。理由はわからないけど、マリナの話を聞いていたら腹が立ってきたのだ。

『シーリン……ありがとう』

マリナは笑顔で私に言ったわ。でもやせ我慢しているのは私にはわかった。

「マリナ、彼を、刹那を探しに行きましょう！」

『え？』

「刹那の首に縄を付けてでも私が連れてくるわ。そして、すぐに結婚式をあげるの！」

『ま、まって頂戴。シーリン！』

「マリナが彼と結婚して、彼を国王にする。そうすれば、マリナが

全てを背負い込まなくてもいいじゃない！」

あの時を思い返すとマリナに向かって私もメチャクチャな事を言っていたわ。

刹那、あなたの場所も行き方も知らないのに、あの時は本当混乱していたのね。

『駄目なの、駄目なのよ！』

マリナは目に涙をためて私に訴えたわ。

『退魔の王女に選ばれる条件は昔は姉妹だったの』

「どういうこと？あ、まさか！」

『……選ばれた女性は結婚してはいけないの。結婚すると次の代に不幸が訪れるという呪いがあると言われているの』

「だから血を遺すために姉妹が条件だった……。でもマリナは一人娘！」

『そう、私が刹那と結婚して子供をもうけた場合、その子供の代に不幸が訪れてしまうの。だから私は誰とも結婚できないの！』

「そんなの迷信よ！そんな事があり得るわけない」

だが、果たしてそうだろうか。現に悪魔が現れマリナの先祖や私達を狙い、そして正体不明のモビルスーツが悪魔を撃退しているこの状況では、私は自分の言葉に自信がなかった。国の災いとは国難や経済危機だけではなく、本当の悪魔の襲来も含まれているのでは

ないかと私は思い始めていた。

『迷信なら、どんなに良かったことが』

マリナは涙を流しながら顔を横に振る。私はハツとした。

「……どうして、どうして！こんな大事なことをマリナは私に黙っていたの！私達、親友ではなかったの！」

『ごめんなさい。我が王家の問題にシーリンを巻き込みたくはなかった』

マリアは、そう言う顔を伏せてしまった。

「……マリナ、もしかして、この前の病院の出来事も！？」

『ごめんなさい。はっきりは覚えていないけど、私の中の「彼女」が出てきて「巨人」を呼び出すように囁いたの』

やはり、マリナがああ白いモビルスーツを呼び出していたのだ。

「マリナは、いつから、その『彼女』について知ったの」

『刹那がELSと対話するために地球を旅立ってすぐ、夢の中に彼女が出てきたの』

5年前から彼女、エクシア王女はマリナの中に現れるようになっていたの。

「まさか、俺が関係しているのか！？だとしたら、俺は……」

「うっん、刹那は気にしないで良いの」

マリナは私にこう言ったわ。

『シーリン、刹那にはこの事は絶対に話さないで。彼に話をしたら彼はきつと悪魔と戦うでしょう。彼だけは我が王家の呪いに巻き込またくはないの！』

マリナは幼い頃から戦いに明け暮れていた刹那をこれ以上苦しい戦いに巻き込またくはなかった。

「私はエクシア王女を恨むわ。マリナに、こんな辛い運命を背負わせるなんて！」

その時だったわ。私もマリナも屋上の異変に気がついていなかった。いや、エクシアは気がついていたかもしれない。

「……では、その運命をここで終わらせてくれようぞ」

『シーリン！』

私は2本の太い指で首をつかまれる。体は宙に持ち上げられていたわ。

「……グッ、マ、マリ、ナ……」

『サタン!』

私は背後から突然現れた悪魔に首を掴まれ宙づりにされていたわ。大きさは3m近くあったと思う。悪魔は病院の屋上で私達に殺すために待ち伏せしていたの。

「やはり、貴様の力はまだ完全ではないようだな。この女の首を引き千切り、腸を掻き出すぐらいの力は出せるわ!」

私はその時に見たの。悪魔の体が徐々に溶け始めていたの。悪魔がマリナに近づくと段々と体が溶けていつていたわ。

『やめて!彼女は関係ないわ。彼女を離しなさい!』

「我が体が溶け落ちるのが前に、この女の首を千切ってくれるわ!」

悪魔はそういうと更に私の首を掴む腕に力を入れた。私は死を覚悟した。

でも、意識を失う瞬間、私は屋上の地面に落ちたの。悪魔の腕が切断されていた。固い地面にぶつかる寸前、誰かに抱きかかえられていたわ。

「ゲホッ!ゲホッ!」

私が喉を押さえていると

「大丈夫ですか?この場から離れます」

とても華奢な女性が私を軽々と抱きかかえて悪魔の元から助けて

出してくれたの。

『……皇帝陛下、遅かったですわ』

気がついたらマリナの前に背のとても高い男性が剣を構えて立っていた。2mを超す長身だったわ。私には分かった。彼が悪魔の腕を切断してくれたことを。そして、この時、先日私とマリナを助けてくれたモビルスーツのパイロットではないかと直感した。

「……また、貴様か！どこまで我々の邪魔をすれば気が済むのだ！」

「言わなかったか？あの晩から彼女の主治医になったのさ」

私が瞬きをしたら、男は剣を振り下ろしていたわ。彼が何をしたのか、私にはわからなかった。でも、悪魔は頭から真つ二つにされていたわ。そして悪魔は灰になって消えていった。

『皇帝でも遅刻は遅刻です。今までどこに行っていたんですか？あと少しで彼女が危なかったわ』

マリナは男性に話しかけていたわ。男性を以前から知っている感じだった。いや、あの時はマリナではなかった。

「装甲を焼失したおかげで始末書の山さ」

『あら、それはお気の毒』

「まったく、誰のせいだと思っているんだ！」

『それは私のせいではございませんわ。それに私との契約をお忘れ

ですか？』

「ふん、覚えているわ！この腐れ巫女め」

私には悪魔と遭遇した時よりも目を疑う光景だった。マリナの両目は輝いていた。刹那、貴方のように両目が虹色に輝いていたわ。

「シーリン大丈夫？怪我はないかしら」

マリナが手をさしのべてきたわ。だが私はその手を断った。

「私に馴れ馴れしく触らないで！」

『シーリン……』

マリナは悲しそうな顔をしたわ。でも、マリナではない事は私にはわかっていた。

「貴女……エクシアね？」

『そう、私がエクシア』

「それも王女ではなく、巫女の方の」

『……その通り。流石ね、シーリン・バフティヤール』

彼女はマリナの体を借りたエクシアだった。私はハンドバッグから短銃を取り出してマリナに向けたわ。

でも、長身の男性と先ほど私を助けてくれた女性は何もしなかった。彼が剣を振るえば私なんて簡単に斬り殺せたのに。

「マリナを返して頂戴。その体はマリナのものよ。貴女が自由に使って良いものではないわ」

『ごめんなさい。貴女を助けるにはこうするしかなかったの』

「マリナに、いいえ、マリナだけではないわ。王家の女性に辛い運命を背負わせておきながら、都合の良いことを！」

『王家の迷信と私は無関係、と言っても信じてもらえそうにないわね』

「現にこうして悪魔が襲ってきたじゃない。信じられるわけないわ！」

『本当にサタンが襲ってきたのは、マリナの先祖であるエクシア王女とマリナの時だけよ』

「そ、そんな話！」

「彼女の話は本当だ」

長身の男性が割り込んできた。

「俺は昔、この女と酷い契約を結ばされて、サタンが襲って来た時だけ、こうして呼び出されて撃退している。エクシア王女の代に召喚されているが他の代にはない。そもそも、こんな人使いの荒い巫女と契約するのは俺だけで十分だ」

『陛下、人使いが荒いなんて酷い』

「ふざけないで！私は真面目な話をしているの！」

エクスシアに向けていた短銃を男性に向けた。

「気を悪くされたのであればマスターに代わって私が謝ります。ですが、エクスシアさんとマスターの話は本当です」

私を助けてくれた女性が今度は話しかけてきた。カラーコンタクトをしているのか、彼女の瞳が見えなかった。まるで宇宙人のように綺麗だったわ。

「それでは、どうしてマリナは悪魔に狙われるの！マリナが何をしていたっていうのよ！」

女性とエクスシアの表情が強張る。

「それは……」

『それは、マリナが私の後継者だからよ。だからサタン共はマリナが力を付ける前に殺しに来るの。今回はマリナが倒れたときに一時的に力を失いかけた。その隙にサタン達は殺しに来たの』

「噓よ。マリナは普通の女性よ」

『……残念ながらマリナは普通の女性ではないわ。彼女はサタン達を退ける役目を果たす運命にあるの』

「たとえば、それが運命だとしてもマリナは戦わないわ！私が絶対に戦わせない！」

『ええ、マリナが戦う必要はないわ。マリナが幸せに地球で暮らしてくれば、サタン達はこの世界に来られないから』

「え？」

『私達巫女は、お伽噺に出てくるような魔女のように杖から光線を発射したり、鎌を振り回したりして、直接サタンと戦うような事はないの。ただ、そこに居るだけで、その世界に居るだけでサタン共を寄せ付けないの』

耳を疑った。ただ、そこに居るだけって？だが同時に疑問が浮かんだの。

「それでは、エクシア王女とマリナが生まれる間にサタン達が地球に来ればいいじゃない！」

「サタン達にとって地球侵攻は二の次だ。それよりもエクシアとマリナの魂が邪魔なのさ」

再び長身の男性が話しに割り込んでくる。

「退魔の巫女は、その世界に居るだけでサタン達には驚異だ。巫女が普通に死んだ場合、魂は輪廻転生を繰り返して再び世に出現する。だからサタン達は輪廻転生を阻止するべく、巫女が死ぬ直前や力が弱まったところを狙って殺しに来る」

『手段は選ばない連中よ。呪い殺そうとする時もあるし、科学力を駆使して攻撃してくることもあるわ』

私はマリナの様態が悪化したときのことを思い出した。まさか、あれは悪魔の呪いだっていうの？でも、私は彼らの話から希望の光を見つけた。

「それでは、マリナが普通に暮らしていれば悪魔は来ないのね!？」

『勿論、そうなるわね』

「それでは、マリナは彼と、いえ、普通の女性として幸せを掴むことが出来るのね!？」

『……それは』

「違うつて言うの!？さつき、貴女は『王家の迷信と私は無関係』と言ったじゃない!」

『確かに王家の迷信とサタンは無関係よ。だけど、巫女は男性と契りを結ぶと力を失う可能性があるの』

エクスシアの顔が曇る。

「エクスシアのような巫女は、力を失った場合、次の輪廻転生まではサタン達を退けることが出来ない」

長身の男性が私に説明する。

「まさか貴女も？」

エクスシアが静かにうなづく。

「それでは、マリナの先祖エクシア王女はどうやって子孫を残したの!?」

『結局、彼女も結婚しなかったわ。彼女の妹が血を残したの』

その一言で見いだした希望の光は失いかけたわ。

「それでは、それではマリナは、幸せになれないじゃない!!」

私はエクシアを問い詰めた。今思い出すと彼女も気の毒だったのよ。巫女として選ばれて好きな男性と結ばれることなく独りで死んでいったんですもの。彼女も気がついていたら泣いていたわ。

「……方法はある」

『皇帝陛下!しかし』

長身の男が私に向かって言ったわ。

「巫女の力を失う恐れがあるのなら俺のような超強力な騎士と契約するか、それとも……」

『以上が2319年の出来事よ』

刹那はシーリンから全ての話を聞き終えた。刹那の話も荒唐無稽だったが、シーリンの話はそれ以上に荒唐無稽だった。ELSが地球に襲来してから5年が経過した出来事だったが、イオリアの生前よりも以前から悪魔が地球に襲来していたのだ。もし、イオリア

が悪魔の存在を知っていたらソレスタルビーイングの在り方も『対話』も変わっていたかもしれない。

「……マリナはエクシアの話をどれだけ知っていたんだ？」

『エクシアはマリナには、それほど多くの情報は伝えていなかったそうよ。契約を交わした騎士の存在や男性と契りを結ぶと巫女の手を失うこと等、これ以上マリナを苦しませたくなかったみたい。マリナ自身も王女と巫女、二人の話が混ざっていたと思うわ』

だが、マリナは王家の迷信に従い結婚することはなかった。それは勿論、アザディスタン復興のため、そして50年間も地球を留守にしていた誰かのせいでもあるが。そして、シーリンの話では、それ以降エクシアがマリナの人格と入れ替わることがなかったそうだ。

長身の男とシーリンを助けた女性はその後姿を消した。彼らはマリナが悪魔達に狙われて危機に陥ったときだけ、別世界から召還される契約だった。

シーリンは刹那に複雑な表情を向けると刹那の手を取る。

『刹那・F・セイエイ、マリナは貴方を悪魔達との戦いに巻き込みたくない。と、いつも言っていたわ』

「それがマリナの願いだったのはわかっている。俺はマリナも貴女も責めるような事はしない」

『でも、私はマリナの願いを無にする事を言わないといけないの』

刹那の手には数滴のシーリンの涙が落ちていた。

『刹那、マリナを救い出して。そしてマリナを幸せにしてあげて！』

気がつくとシーリンは刹那の胸の中で泣いていた。それは親友を救うために親友の願いを裏切る自分の行為からくるのか、それとも親友の愛する人を死地に向かわせる自分への嫌悪感なのか、それとも両方なのか、それ以外なのか、シーリンにもわからなかった。そんなシーリンを刹那は優しく受け止めた。

刹那はシーリンをオースチンで駅まで送り届けに来ていた。
刹那はホームでシーリンを見送る。

「シーリン・バフティヤール、今日は貴重な時間をありがとうございました」

『それは、私の台詞。礼を言うのは私の方。貴方から生きる希望を貰えたんだから』

生きる希望、それは今の刹那にはかけがえのない言葉だった。

「なるべく期待に添えるように頑張ろう」

『出来れば私が天国に行く前にお願いしたいわね』

「……難しいかもな」

『冗談よ。ミッションが難しいのはわかっているわ。もし、私が神様の元に召されていたら三人でお墓参りに来て欲しいわ』

「縁起でもないことを言わないでくれ。マリナが悲しむ」

『クス、それでは急いで頂戴』

「わかった」

刹那はシーリンを優しく長く抱きしめた。二人とも口には出さないが、これが最後かもしれないと思っていたからだ。

『マリナによろしく伝えてね』

「それは自分の口から伝えて欲しい」

シーリンが刹那の体から離れると列車に乗り込んでいった。シーリンは列車の窓からホームで見送る刹那に手を振る。そして、いよいよ発車ベルは鳴り列車は動き出した。刹那は列車が見えなくなるまでホームで見送っていたのだった。

ログナーの社長室。

「マスター、契約は更新されるのですか？」

『異議申し立てがない場合は自動継続だったな』

「それでは異議申し立てなれさますか？」

『する相手がジョーカーに行ってしまったわい』

「（クス、する気もない癖に）それでは更新ですね」

第8話 退魔の巫女（後書き）

次回予告

ついに刹那はラキシスと遭遇する。
そして刹那とログナーの騎士戦とは？

後書き

前回以上に内容がアレな第8話をお送りできました。

文字数も2万文字オーバーと過去最長。それでも、エクシア王女のエピソードは大幅カットしました。

第8話はこれからの物語の壮絶なネタバレ回だったと思います。

エクシア王女と巫女、ワンセットでオリジナルキャラクターを登場させて貰いました。エクシア王女と巫女のビジュアルは、ガンダム00の1stシーズンの白いドレスの女性です。マリナのご先祖様という設定ですから、こちらを採用しました。というか、他にイメージ出来ません。

あと、巫女さんの方はログナーを司令ではなく皇帝陛下と言っています。つまり、カラミティ・ゴードス星団皇帝を指すのですが、どうやって契約させたんでしょうね。巫女さんの呼び出しで毎回トンでもないタイミングで次元を超えて地球にやって来ていると思うと少々気の毒です。ログナーの密偵であるエレナ女史の子孫も今回出ていましたが、バビロン王国領事館が地球にあるのかもしれないね。

さて、ストライクルが登場していますが、今のクリス御大の頭の中では『無かったことに』されているようですね！？バビロンスは『雷丸』がその地位を奪ったとか？でも、私はストライクルはストライクル、雷丸は雷丸で別物と考えて登場させました。というか第8

話でストライクルとはいえ、L・E・D・ミラージュを登場させることになるとは自分でも予想外でした。実剣だから良かったものの、これがインフェルノナパーム搭載だったら東京の町は炎に包まれていたことでしょう。

最後に、今回せつさんとスメラギさんがR15ギリギリな事を言っています。

SSなんだから、もっと気楽にせつさんとマリナで赤ちゃん出来ても良いのかもしれない。

外伝 エクスシア（前書き）

無限に広がる大宇宙。

その大宇宙の中を緑の流星が駆け抜けていく。だが、流星と呼ぶには小さく、それは自ら光の粒子を外部に放出していた。

「最終システムチェック」

『最終チェック異常ありません』

流星の内部では一組の男女が計器の確認を行っていた。そう、これは流星ではなくマシンである。

「航路座標の最終確認は？」

『航路座標の最終誤差修正も完了済みです』

女は全ての計器類に異常がないことを男に告げる。男はマシンのスロットルを吹かすようにイメージする。するとマシンの上面から——もつとも宇宙で上下はないのだが——緑の粒子が更に溢れ出す。

「これよりファーストファイズを開始する」

『粒子ゲート展開します』

マシンの向かう先に円形のサークルが構築されると、マシンはサークルに吸い込まれていった。そして、サークルは閉じられ、わずかに残った緑色の粒子も後を追うように消えていった。

外伝 エクスシア

西暦2319年

経済特区日本のある病院の屋上で二人の女性が話をしていた。

一人の女性は病院着をきており入院患者とわかる。もう一人は私服であった。

『そう、ここからが彼女の本当の伝説なの』

病院に入院していたマリナ・イスマイルは付き添っていたシリン・バフティヤールに、遠い先祖であるエクスシア王女の伝説について語り始めた。

中東某国

砂漠の真ん中に位置するその小さな国は石油の採掘と輸出を主力産業として成り立っていた。

もつとも副産業があるかといえないのだが。この物語は、独りの王女が連行されるところから始まる。

そこは王宮から離れた街の路地。大きな屋敷の前で二人の女性が別れを悲しんでいた。

「お姉様、行かないで下さい！」

まだ若干幼さの残る少女が、兵士達に連れられていく自分の姉にすがりつく。

『私は大丈夫です。いつもの歴訪と変わらないと思います。私の留守の間、貴女はお母様をしっかり支えて下さいね』

姉は妹の頭を撫でながら言葉をかける。

「王女、お時間です」

『わかりました。それでは宜しくお願いします』

彼女を向かいに来た兵士が、装甲車両の分厚い扉をあけて促す。

「エクスシアお姉様！」

『それでは行つてまいります』

エクスシアと呼ばれる女性装甲車両に乗り込む。装甲車両の後には、兵士を乗せた兵員輸送トラックが護衛についていた。

「それでは出発します」

『お願いいたします』

装甲車両から上半身を乗り出した指揮官が号令を出す。その号令に合わせて兵員輸送トラックも動き出した。

（これでは護衛ではなく、護送に見えても仕方ないですね。今頃、妹は大泣きしているでしょう。無理ありません。あのような出来事があり、変な噂が流されれば……）

彼女を乗せた装甲車両の隊列は彼女が住んでいて街を離れ、砂漠に浮かぶ広大な要塞を目指した。

「エクシア王女、ご不便をかけて申し訳ございません」

隊長らしき人物が自動小銃を掲げ、建物の玄関に立っている女性に敬礼をした。相手の女性は先ほど、装甲車両で護送されてきた女性である。

『いいえ、一国の王女が悪魔と契りを交わしたなどと噂されれば、このような措置も当然です』

「ですが、それでは王女があまりにも可哀想です」

『いずれ人々から噂も忘れ去れるときが来ましょう。その時まで私は待ちます』

「エクシア王女……我々はその時がくるまで王女を護衛いたします」

『よろしく願います』

そうこうしていると、食器や鍋を乗せたカートを押す女中達が建物から出てくる。

「王女様。それでは、また明日の朝お伺いいたします」

『今日はありがとうございました。おやすみなさい』

召使いが食事を片付けると彼女がこれから住む事になる離宮の扉が閉められる。厚さ50cmの鋼鉄製の扉だ。

ここは要塞の隅に位置する離宮であった。離宮とは聞こえはいいが、実際は監獄である。事実、この離宮は彼女独りであった。

彼女が連れてこられたのは、古い城塞都市を改築した要塞だった。10メートル近くも高さのある城壁にぐるりと囲まれた要塞だ。中央に王宮、東西南北にそれぞれ塔が建っていた。エクシアが収監されたのは東の塔である。東の塔はエクシアのため離宮として内装も改装される予定であったが、ほとんど工事は進んでおらず家具なども必要最低限の物しか運び込まれていなかった。その代わり、離宮自体は戦車砲の直撃にも耐えられるように補強され、窓は防弾ガラスに鉄格子がはめられていた。離宮の出入りする扉という扉には自動小銃で武装した兵士が立っており、それは厳重な警備だった。それだけではなく、勿論、離宮は外界との通信手段は一切無い。

エクシア、彼女はこの国の王女の1人だ。歳は20代前半だが、可愛いというよりも綺麗と言われる事が多い。

幼い頃から諸外国を歴訪し外交を務めてきた。その美貌と若さから諸外国での受けも良かったのだが、彼女は一つ癖があった。

それは、悪言い方をするとバラマキ外交である。オイルマネーを諸外国に復興資金や教育支援、地域活性資金などと称して援助していたのだ。

当然、王宮でもやり玉にあげられる事も度々あったのだが、王女は「いずれ石油が枯渇し、新しいエネルギーが登場した時、我が国は成り立たなくなるでしょう。だから、今のうちに世界に貸しを作っておく」と耳を貸さなかった。

勿論、援助により多大なる見返りもあり最先端の医療技術や浄水システムの導入など国の発展に繋がっていた。しかし、そのような王女であったが、外国と結託して石油利権を貪ろうとする勢力にあって面白くない存在であった。しかし、彼女は国内外の人気もあり、表だって彼女を攻撃する事は出来ない。そんな中、彼女の失脚材料

が舞い込んでくる。

それは先日彼女が歴訪中に事故に巻き込まれたのだ。同行していた当事国の関係者や王家の人間、王女を除く大勢の人が亡くなったのだが、王女は事故現場に近い場所で発見されて助かった。しかし、その事故の直前「悪魔に攻撃されている」という通信記録が残されていたのだ。

表向きの事故原因は王女を狙ったテロとして片付けられたが、王女も悪魔について誰にも話をしなかった。それは科学の発達した現代で、お伽の世界から出てきたような巨大な悪魔が人々を襲った等と言っても信じて貰えなかったからだ。

「悪魔」の情報は王女失脚を狙う勢力の耳に入り、この情報を巧みに操作して二つの世論を作り上げた。

一つは「王女が悪魔に狙われている」そして、もう一つが「王女が悪魔と契りを結び、国を滅ぼす計画をくわだてている」という話だった。

普通で考えれば、いずれも単なる与太話と片付けられる話であるのだが失脚を狙う王宮内の勢力と石油利権の獲得を目指す外国勢力が手を結び、コンピューターネットワークを利用して二つの情報を巧みに使い分け、国内外に流したのだった。当初は噂を一笑していた国王だったが、『王女が悪魔から守りたい』という大臣達からの嘆願の前について離宮への保護を認めてしまう。この大臣達こそが王女失脚を狙い、外国と手を結び石油利権の貪りたい連中だった。しかし、これらの裏の事は国王も王女も知らないことだった。

（私は国を捨ててどこにも行かないというのに）

エクスシアは独りぼっちの離宮で胸を痛めていた。

深夜、彼女は自室の窓から月を眺めていた。

部屋の中はベッドと机だけのとても王女の部屋と思えないほど質素だった。だが、エクシアは自分のおかれた境遇に負けるつもりはなかった。

（あの事故に比べれば、このような事で弱音を吐いているわけにはいきません）

エクシアはベッドに横になりながら襲撃を思い出していた。そう、彼女の中では事故ではなく襲撃であつたからだ。

王女がある国の被災地を慰問していたときにそれは起きた。王女は次の避難所に向かうために大型輸送ヘリで高度7000フィートを飛行していた時の事だった。

「王女、次の避難所まで1時間のフライトですがお疲れではありませんか？」

『いいえ、今もこうして避難所で生活されている方達のことを考えればたいしたことではありません。それよりも私の慰問で被災地の方達にお役に立つのであれば私はどこへでも行きますわ』

侍従の心配を余所にエクシアは健気に答えるが、侍従の隣に座っていた男が突然、となりつけた。

「王女、先ほどのスピーチはどういうつもりですか！スケジュールでは政府への資金援助表明だけだったはずですよ。それが、地元商工会や企業への資金援助も明言になるとは！」

別の侍従が王女に食ってかかる。王宮から派遣されたお目付役である。

『あら、親や家族を亡くした孤児への援助と里親基金への支援も忘れてるわよ』

エクシアは先ほど慰問に訪れた避難所で援助内容について現地のマスコミに対して声明を発表したのだが、その中で本来の予定になかった援助が追加されていたのだ。もっとも彼女の中では、それは予定に含まれていたことだったのだが。

「国に戻りましたら国王陛下に報告させていただきます」

『どうぞ、ご自由に』

そのやりとりを当事国政府の人間がハラハラしながら見ていたのだが、当の王女はまるで他人事だった。それよりも王女は侍従の小言よりもヘリの窓から見える被災地に心を痛めていた。

『あら、何か光ったわ！？』

太陽の反射とは違う光が地上で光ったのだ。次の瞬間、ヘリが突然の揺れに襲われた。

「ウワッ！」

「キヤー！」

ヘリの機内に悲鳴があがる。一方、操縦席の方ではパイロット達が必死で機体の制御を行っていた。

「油圧システムがダウンしています」

「右エンジン停止」

「メイデー！メイデー！メイデー！こちら……」

ヘリの機内では悲鳴や絶叫が飛び交います。まずパニックに拍車がかかる。ヘリはバランスを失い、高度を下げていく。エクシアもシートベルトに必死にしがみつき体を支えていた。その時に奇妙な声が聞こえてきた。

『（エクシア、これは奴らの攻撃です。今すぐ騎士を呼び出して助けを請うのです）』

『誰！こんな時に一体誰なの！』

エクシアはパニックになっている機内を見渡すが、声の主は見つけられない。

『（私は貴女の中に居るもう一人のエクシアよ。さあ早く騎士を呼び出すの。サタンは直ぐそこまで迫ってきています）』

『サタン！？』

ヘリのパイロット達は姿勢を立て直しながら不時着が出来そうな場所を探していた。このままなら、何とか不時着出来そうだが、パイロットの希望を奪う二回目の揺れが再びヘリを襲う。その時、エクシアは窓の外から見たのだ。巨大な黒い翼を広げた物体がヘリの周りを飛んでいるのを。

「機長、あれは！？」

「なんだ、あの巨大な物体は！」
「あ、悪魔？」

悪魔は腰の剣を抜くと構えた。

「ま、まさか」
「管制塔、こちら」

パイロットが無線で通信をするよりも早く悪魔は剣を振り下ろし
へりを切り裂いた。

「我、々は……悪魔に攻撃されている」

それが機長の最後の通信だった。へりは悪魔に切りさかれバラバラになり、地上に落下をはじめた。ある者は悪魔の剣の犠牲になり、ある者はへりの機外に放り出されてしまった。エクシアはシートベルトが外れず、シート毎地上へと落下していた。

『（今、貴女を死なせるわけにはいかないの。体を借りるわよ）』

エクシアの中のもう一人のエクシアが囁く。

『エクシアの名において退魔を命じる』

エクシアが再び目を覚ましたときは地上に寝かされていた。

『いじはっ』

周りにはヘリの残骸が散乱し煙がたちこめていた。様々なモノが焼けた臭いがたちこめていた。エクスシアは起き上がり、自分の体を確認する。

（どうやら、怪我はないようですね。他の人達は？）

彼女は煙の中を彷徨い始めるが突然呼び止められた。

「それ以上は進むな」

『誰！？』

エクスシアは呼び止められてしまった。声の主を捜すが周りを見ても煙がたちこめていてよく見えない。

「この先はヘリの残骸と搭乗者達の亡骸が散乱している。見ない方がいいだろう」

『そ、そんな！』

「我々も残念ながら貴女を助けるのが精一杯だった」

声は遙か頭上から聞こえていた。エクスシアは見上げる。はじめのうちは煙でよく見えなかったが、風が出てきて煙がはれてくると見えてくるようになった。そこには黒い巨人がエクスシアを見下ろしていた。

巨人の風貌は死神だった。笑ったような黒いマスクに、甲冑のような角張った両肩、右手には大きな鎌を、そして左手には巨大な盾を持っていた。

『ひつ、死神！？』

だが、エクシアはこの死神のような風貌の巨人からは不思議と恐怖を頂かなかった。

『いや、先ほどの悪魔とも違う……』

「安心しろ。襲ってきた悪魔は撃退した。それに間もなく救助隊がここにやって来よう」

『貴方があの悪魔を撃退したというのですか？』

「そういう契約になっているのでな」

エクシアは力なく膝をついた。急に自分に怖くなったのだ。

『まさか、私をもっと早くあの声に耳を傾けていれば、もっと多くの人を助けられたかも！？』

「……難しかっただろう。貴女の責任ではない」

巨人はその風貌に似合わず優しい言葉をかける。エクシアは巨人を見上げ質問する。

『貴方は何者なのですか？人？それともロボット？』

「いずれの質問もノーだ。俺はただの人間でもロボットでもない」

その時だった。巨人から別の声が聞こえてきたのだ。感情のこもっていない、発音に起伏のない不思議な声だった。

「マスター、コチラ・ニ・セツキン・スル、キエイ・ヲ・カクニン・シマシタ」

「どうやら、救助隊が来たようだ。それでは俺はこれで引き上げる。だが油断はするな！貴女の力はまだ完全ではない。悪魔は貴女を狙

つてまた来るぞ」

『待つて！せめてお名前を』

突然、巨人の足下に巨大な黒い穴が開くと、巨人はそこに吸い込まれるように消えていった。

（あの襲撃の時、私を救ってくれた黒い巨人は何者だったのだろうか？契約がどのと言っていたけど）

エクスシアが自室のベッドで謎の巨人について考えていたその時、窓の外が明るくなり、要塞全体に爆発音が響いた。

離宮の窓ガラスは防弾ガラスのため割れることはなかったが、爆発の振動が離宮にも伝わってきた。エクスシアは自室の窓から外を確認すると西側の城壁で何かが爆発したらしく炎と煙を確認できた。はじめは事故かと思ったが、次々と発砲音や爆発音が聞こえてきたことで、これが何者かの攻撃と察知した。

城壁の守備隊が突然攻撃を受けたのは数分前の事だった。

城壁上部には所々に要塞の守備隊兵士の監視小屋が作られていた。そこでは、リーダーをはじめとする様々な監視装置が備え付けられており、王宮地下の司令室の眼と耳として機能していた。時計は深夜を回っており、今は二人の兵士が詰めている時間帯だ。

「……お前、あの噂を信じるか？」

「噂？（馬鹿、噂についてはタブーだろ？）」

（すまない、つい今なら大丈夫かと思って）

（まったく、気をつけろよ。『上』にばれたら、下手したら牢屋行きだぞ。だけど、俺は信じないね。王女が悪魔と契りを結ぶなんてありえない）

兵士達も東の塔にエクスシアが『保護』されたことで、国内外に流布されていた噂について疑問に思っていた。日中は噂について口に出来ないため、上官の目が届かない深夜について話し相手を探してしまったのだ。だが、相棒も日頃から思っていたことがあるのだろう、ヒソヒソ声で話し始める。

（ちがうちがう、そっちの方じゃない。あっちの方だ）

（あっちか？あっちも俺は信じないね。あんな噂を真に受けているのは大臣位だろう。それに本当に悪魔が現れても、近代兵器の世の中じゃ楽勝だろ？）

（俺も、だ。だいたい、あの大臣、日頃から王女の事を目の敵にしているくせに、何が『王女に何かあつては遅いのです。国王陛下、王女を保護するべきです』だよ。そして改装工事も終わっていない東の塔に幽閉だぜ。やっている事が違うじゃないか）

（俺もその話を聞いた時は耳を疑ったよ。だから今回の噂だって、大臣が一枚噛んでいるってもつばらの噂だぜ）

（怪しさ満点だろ？王女のおかげで街の病院に最新の医療装置が導入されたのになあ。何考えているのだから。警備隊の連中も怒り心頭じゃないのか？）

（あそこは王女の自称親衛隊だからな。でも、エクスシア様に何かあつたら悪魔だろうが大臣だろうが、ただじゃおかないって所は俺たちも同じだ）

（ああ確かにそうだ）

二人は声を殺して笑いはじめた。エクスシアは要塞内の兵士達に愛されていた。確かに歴訪でお金をばらまく事はするが、ちゃんと見返りを持って帰るのだ。街の病院への最新医療設備が導入、浄水設備の近代化など目に見える対価が必ずあつたからだ。

「笑つたら少しすつきりしたな。相棒、仕事に戻ろうか」

「ん、何か光つた？」

守備隊の一人が偶然、砂漠で何かの光を発見したのだがその直後、城壁が爆発し崩れ落ちたのだ。爆発音と衝撃が要塞全体に伝わる。

「い、今の爆発はなんだ？ 事故か！？」

件の守備隊兵士が監視小屋から煙をあげて崩れ落ちる城壁を見て
いると、再び砂漠が光る。次に爆発したのは西側の塔だった。塔の
上層階が崩れ落ちる。

「これは、事故ではない。攻撃だ！」

守備隊兵士が緊急ボタンを押すと要塞全体に非常警報が鳴り響い
た。すぐに王宮の司令室から監視小屋に通信が入る。

「どこからの攻撃だ？ テロリストか？」

監視小屋のスピーカーから慌てる当直士官の声と司令室の喧噪が
伝わる。司令室のマイクが司令室の音を拾っていたのだ。司令室で
も相当慌てているようだ。

「攻撃元がわかりません。対空および対砲レーダーにも感知されて
いません！」

守備隊兵士が怒鳴るように答える。その脇で相棒の兵士が赤外線
監視装置に目を奪われていた。

「……おい、おいってば！」

監視装置に映った物体のあまりの異様な姿に通話中の兵士の肩を
何度も叩いた。

「（馬鹿、今、司令と通話中だ）テロリストの攻撃が現在確認中
です」

「おい、いいから、ちょっとこれを見てくれ」

「だから、今は通話中だって！……え！？」

「おい、どうした！」

「……」

「監視班、応答しろ！」

「し、司令、あ、あ、」

「あ？ あーだ？ 貴様、上官を侮辱しているのか？」

「ち、違います。あ、あー」

「貴様いい加減にしろ！ 一体何だというのだ？」

「あ、悪魔が現れました！」

「悪魔あ！？」

監視小屋の守備隊兵士はすぐに砂漠に向かって照明弾を発射する。照明弾の明かりに照らされたその姿を見た兵士達は一斉に叫んだ。

「「悪魔だ！」」

（まさか、あの時、巨人が言っていた！？）

エクスシアも窓から外を見ると、ヘリから見たあの独特の大きな羽を生やした悪魔の姿が照明弾の明かりに照らされていたのだ。要塞の城壁は10メートル以上あるが、遠くからでもそれよりも大きいが確認出来た。

（あの時の悪魔は巨人が撃退してくれた！？そうすると、これは違う悪魔？）

「悪魔を近づけるな。王女を守れ！」

次々と発砲音や爆発音が響く。城壁に設置された多連装ロケット砲や地对空砲による砲撃が開始されたのだ。ロケット弾や20ミリ砲弾が悪魔に命中するが、まったく効果はなかった。それを見ていたエクスシアは無意識に呟いた。

『無駄よ、サタンを倒すためには騎士の力が必要よ』

（え？私、何を喋っているの？）

エクスシアは自分が無意識のうちに口にした言葉に驚く。

悪魔は手にしていた巨大なライフルのような武器で攻撃を開始した。SFに出てきそうな光線銃をフルオート射撃で撃ちまくると、次々と城壁に設置されていた火器が城壁と共に崩れ落ちていった。悪魔はゆっくりと歩みをすすめ、通り道の邪魔者を完全に破壊しな

がら、ついに悪魔は要塞に侵入する。悪魔は手当たりしだいに、兵士や装甲車、戦車を血祭りにあげた。このままでは王宮やエクシアの離宮も攻撃されるのは時間の問題だった。

エクシアが要塞内の混乱に気を取られていると、離宮に兵士がなだれ込んできた。

「王女！エクシア王女！」

エクシアの部屋の扉が突然開かれると兵士が突入してきた。その資格好から離宮を警備している兵士ではないことがわかる。兵士達の後から送れて、夕方エクシアに敬礼した隊長がやってくる。隊長はすぐに兵士から王女を庇うように間に割って入った。

「この無礼者が！」

隊長は兵士達を一喝するが兵士達は聞く耳を持つとしない。エクシアも突入してきた兵士達の様子が違うことに気がついた。

『一体これは何事ですか！？』

「エクシア王女、国王陛下が呼びです。ご同行願います」

その証拠に兵士は自動小銃を突きつけ命令する。

「貴様らどういう真似だ」

「それはこちらの台詞です。警備隊長、これは国王陛下のご命令です。命令に従わないのであれば貴方でも撃ちます！」

エクシアは警備隊長の横顔をその時はじめてみる。血が滲んでおり殴られたようなアザがあった。恐らく、この兵士達とやりあったのだろう。

「……わかりました。私も国王陛下にお伝えしないといけない事があります。急ぎましょう」

「流石、エクスシア王女は物わかりが良いお方で助かります。貴様はそこをどけ！」

兵士達は立ちふさがる警備隊長を自動小銃の銃床で殴る。

「貴方たち、乱暴はいけません」

エクスシアは倒れた警備隊長に駆け寄ろうとするが、兵士達に止められてしまう。

「それよりも王女、一刻を争います。さあ参りましょう」

「……エクスシア王女。この大臣の腰巾着め！」

エクスシアは兵士に囲まれて離宮の裏口からジープに乘せられ連行されていった。その間も悪魔は手当たり次第破壊を続けていた。

（おかしい！？私を殺すなら簡単なのに……悪魔は私を見つけられないの？）

エクスシアのもう一人のエクスシアが疑問に思った。だが、それはエクスシアには伝わらなかった。

エクスシアは王宮に辿り着くとすぐに地下壕に連行された。地下壕司令室の別室に通されると国王や大臣が出迎えるのだが、その目には畏怖と怒りが入り交じっていた。

「国王陛下、エクスシア王女をお連れしました」

「エクスシアよ。良く来た」

「陛下。王宮の外の物体、あの悪魔はいったいどういう事ですか！

？」

「エクシア、こんな事を本当は言いたくないのだが……あの悪魔はお前が呼び寄せたのではないのか？」

王女は絶句した。信賴していた国王にまでそのような事を言われるのはショックだった。

『……陛下まで、あの噂を信じるというのですね！？』

「まだシラを切る気ですか！」

王女失脚派の大臣がエクシアを責めるが、国王がそれをなだめる。

「私も出来れば噂を否定したい。だが、今こうして悪魔が現れ王宮を破壊しているではないか」

『違います！あの事故も確かに悪魔は現れましたが、黒い巨人が現れ助けてくれました』

焦ったエクシアは死神のような風貌をした巨人について口にしてしまった。

「巨人！？そのような話は初耳だが」

（しまった！）

エクシアは助けてくれた黒い巨人については誰にも話をしていなかったのだ。

「王女、黒い巨人とは何ですか？」

『そ、それは、あの事故の時、悪魔を追い払い、墜落するヘリコプターから助けてくれた巨人です』

「……その巨人というのが本当は悪魔ではなかったのですか？王女はその巨人が悪魔を倒す所を実際にご覧になったのですか？」

『い、いえ。落下の途中で気を失っていました。気がついたら、悪魔はどこかに姿を消しており、巨人だけが私の側に立っていました』

確かにエクシアは実際に巨人が悪魔を倒す所を見たわけではなかった。

「ほらご覧なさい。王女は悪魔に騙されているのです」

『ですが、確かに証拠はありませんが、巨人は私を守っていたと思います』

「王女、思います。では困るのです。それほどまでの巨人であれば、王女以外の人間も見えてもおかしくないのでは？王女を助けた救助隊も見たという報告はありません」

『巨人は救助隊が到着する寸前に消えていきました』

エクシアの声も消え去りそうな程小さく弱々しくなっていた。その時、大臣に耳打ちするものが現れた。大臣は一瞬顔を綻ばせる。

「国王陛下、これは大変なことになりますぞ。王女はどうやら悪魔に憑かれているかもしれません。いや、王女はすでに死亡しており、この者は王女の姿をした悪魔の手先かもしれません」

「な、なんと。そのような事があるわけがない」

『大臣、何を言っているのですか！』

国王とエクシアは大臣に反論するが、大臣はエクシアに過酷な条件を課すのだった。

「王女の名を語る不届き者め！この状況でも嘘をつくのか！それならば、その黒い巨人とやらを今すぐ呼び出してみろ！」

『えー！』

だが、エクスシアが巨人を呼び出したわけではなかった。墜落の最中、気を失ったエクスシアの代わりに、もう一人のエクスシアが呼び出したのだ。

「王女！」

国王も呼びかけるが、エクスシアは返事が出来なかった。大臣は呆然と立ちつくすエクスシアに引導を渡した。

「どうやら化けの皮がはがれたようですな。この者を引つ立てろ！」
「大臣！？何を言うのですが！貴方たち何をするのですか！？」

エクスシアは大臣の息がかかった兵士に両脇を掴まれる。

『国王陛下！？話を、私の話を聞いてください。私は確かに巨人を見たのです。本当です』

「エクスシアよ、私もお前の話は信じたい。だが、巨人を呼び出せないようであれば、私もどうすることも出来ないのだ」

『陛下！』

「何をグズグズしている！さっさとこの女を、いや悪魔の手先を牢屋に連れて行け！」

「は！大臣」

『国王陛下！』

エクスシアは大臣の息のかかった兵士によって退室させられたのだった。

「大臣、結論を急ぎすぎではないのか？私はエクスシアを信じたい……」

「国王陛下、間もなく攻撃ヘリ部隊が到着すると連絡が入りました。アメリカから購入した最新鋭の攻撃ヘリです。悪魔もこれで終わりでしょう。王女の尋問はそれからでもあらためて行えば良いではあ

りませんか（もつとも王女が生きていたらの話になりますがね）」

エクスシアのジープに乗せられると連れて行かれた先は牢屋でも離宮ではなく、今まさに悪魔が迫ってきていた王宮の中庭であった。

『貴方たちは何を！？』

「王女の名を語る不屈き者め！悪魔と共に死ぬが良い」

兵士はエクスシアの右手とジープのハンドルを手錠で繋いでしまった。そして、ジープのキーを抜くと庭に放り投げ、エクスシアを置き去りにして逃げ出したのだ。

『お待ちなさい！』

エクスシアの呼び止める声は兵士の耳には入らなかった。だが、逃げる兵士達の頭上から光線の雨が浴びせられる。爆発音と共に兵士達は蒸発してしまった。

『あ……あ……』

エクスシアは恐る恐る後ろを振り返る。そこには巨大な悪魔が手にしたライフルの銃口をエクスシアに向けていたのだ。悪魔がエクスシアに呼びかける。

「退魔の巫女よ、愚かな人間共に見捨てられたようだな。だが、安心しろ。すぐに人間の居ない魔界に連れて行ってやろう。もつとも貴様の魂だけだが」

『誰が魔界になんて行くものですか！』

エクスシアは反論するが、その足は震えていた。その時、エクスシアの頭上を幾つもの光が駆け抜け、爆発した。

『きゃあ!』

エクスシアは光が来た方を振り返る。攻撃ヘリ部隊が接近してくるのが見えた。攻撃ヘリは悪魔に向けて空対地ミサイルを一斉発射する。悪魔の足下にエクスシアが居るのを知った上での攻撃なのか定かではなかったが、結果的に悪魔がエクスシアを守ることになる。空対地ミサイルが悪魔に当たる瞬間、突然ミサイルが軌道を変えて全弾はずれたのだ。軌道が変更されたミサイルは次々と王宮に着弾し爆発する。

「レーザー誘導ミサイルの弾道が変更された!？」

攻撃ヘリのガンナー達は真っ青になった。レーザー誘導のミサイルの弾道が命中直前に変わり、王宮に着弾したのだ。ガンナー達は70ミリロケット弾を悪魔に向けて一斉発射する。だが、悪魔は素早くライフルを攻撃ヘリに向けるとトリガーをひいた。

「落ちろカトンボ!」

フルオート射撃による掃射で、ロケット弾もろとも攻撃ヘリ部隊は火に包まれる。そのうちの何機かは王宮の方に墜落し爆発するのだった。エクスシアはその様子を見ているだけしか出来なかった。

『な、なんて酷いことを……』

「これで邪魔者はいなくなっ たな」

悪魔は再びライフルの銃口をエクスシアに向ける。フルオート射撃により銃口からは熱が感じられた。その時、エクスシアは再び頭痛に襲われた。周りで何か叫んでいる悪魔の声は聞こえていなかった。

た。

（エクスシアよ、魂の契約を行った騎士を呼び出すのよ）

（貴女はあの時の？でも私は契約について知らないわ）

（私、エクスシアが生前行った魂の契約だもの）

（だから、エクスシアは私。貴女は誰？）

（私もエクスシアよ。ええーい、面倒だから私を真似なさい）

その時、再びエクスシアの頭上で幾つもの爆発音が響いた。悪魔に背後に向けて、要塞のあちこちからロケット弾が発射されたのだ。

「王女が悪魔と戦っているぞ！王女を救出しろ！」

大臣の策略で悪魔の生け贄にされかけたエクスシアであったが、皮肉にも事情を知らない一般の兵士達はエクスシアが単身ジープで悪魔に特攻を仕掛けていると勘違いしたのだ。城壁上部や建物に隠れていた兵士達から次々とロケット弾が発射される。それらは全てエクスシアにあたらな角度から発射されていた。

「こざかしい人間共め！」

悪魔がライフルを振り回すとライフルから発生した衝撃波が要塞内の施設を切り刻む。だが、悪魔が後ろからの攻撃に気をとられている隙に、数名の兵士達がエクスシアの繋がれたジープの元に駆けつける。それは離宮の警備部隊だった。警備隊長はエクスシアの手錠を見て驚く。

「まさか、王女は死ぬ気だったのですか！？」

『こ、これは、その……』

これにはエクスシアも説明に困ったのだが、兵士達は突然泣き出した。

「王女の国を思う気持ち、我々は確かに受け取りました。しかし、ここで王女を死なすわけにいきません。エクスシア様、ハンドルから離れて下さい」

『貴方たち！？』

エクスシアはジープのハンドルから離されると、兵士は手錠の鎖を拳銃で破壊した。

「王女、失礼します」

『ちよつと、貴方達』

警備隊長は兵士達がエクスシアを保護するのを確認すると無線で指示を出す。

「王女の救出に成功した。戦車部隊、援護しろ」

それを合図に要塞内に生き残っていた戦車から発煙弾が発射される。悪魔の目を欺くためだ。兵士達はエクスシアを抱えると別のジープに乗せ、悪魔の元からエクスシアを救出した。

「どこまでもこざかしい真似を」

だが悪魔は余裕だった。ここまで人間にコケにされたのだ。悪魔は要塞内の全ての人間を、なぶり殺してやるつもりだった。兵士達はジグザグにジープを走らせると直ぐに地下壕に潜り込んだ。

「王女、頭を下げて！」

『きやあ!』

地下壕の入り口が悪魔の攻撃によって塞がれる。だが、地下壕の出入り口は要塞内には複数あるのだ。要塞内の主要な建物は地下トンネルで結ばれているのだ。もっともエクシアが収監されていた離宮だけは例外であつたが。

『隊長、これからどこに?』

「悪魔は我々が引きつけます。王女もすぐに脱出してください。」

『……嫌です!すぐにジープを止めてください』

「王女!？」

警備隊長はエクシアを一旦地下壕に避難させ、それから要塞の外に連れ出す予定だつた。だがエクシアの口から意外な言葉が発せられジープを止めることになる。

『悪魔の狙いは恐らく私です。私が悪魔と戦います。その間に貴方たちは助けられるだけの人を助けて逃げて下さい』

「な!？王女、せっかくここまで逃げてきたのに、馬鹿なことを言わないで下さい」

『国民の命を守るのが王族の務め。先頭に立つて国難に立ち向かうのが王家の人間の使命です。その銃を私に貸して下さい』

エクシアは警備隊長の自動小銃に手をかける。エクシアは知らない事だつたが、先ほど警備隊長が『王女も』と言つた理由。それは、攻撃ヘリが王宮に墜落した際に司令室の通信設備が破壊されたのだ。これがパニックの引き金になり地下壕に避難していた国王や大臣は我先に避難を開始したのだ。勿論、警備隊長もエクシアが大臣の謀略により悪魔に殺されそうになつた事を知らない。

「……それはいけません。王女、我々もお供します」

『駄目、貴方たちまで犠牲に出来ません。皆さんは復興に必要な人材です。私独りの命で済めばお釣りが来ます。それに私には自殺願望はありませんわ。必ず悪魔を倒して見せます』

「エクスシア王女……」

地下トンネルに轟音と振動が伝わる。トンネルの照明が一旦消えるが再び点灯する。

『時間がありません。後のことはお願いいたします』

エクスシアの真剣な眼差しに警備隊長は決断をする。

「……わかりました。王女、我々が時間稼ぎをします。その間に王女は悪魔を倒す準備をして下さい。ですが、絶対に無理はなさらなidekudaisai。危なくなったら逃げて構いません」

『警備隊長、ありがとう』

警備隊長はエクスシアが悪魔を倒せるとは思っていなかったのだが、その自信に満ちあふれた表情に何かを感じたのだ。

エクスシアは一人ジープのハンドルを握ると別の地下壕出入り口を目指す。エクスシアと別れた警備部隊の兵士達はすぐに要塞内の残存勢力に連絡を取り始めた。

「エクスシア王女、こちらの準備完了です」

『こちら大丈夫です』

エクスシアはジープのギアを入れ、いつでも地下壕から飛び出せる準備をしていた。

「それでは、カウントダウン開始します。3・2・1」

『ゼロ!』

ジープが勢いよく地上に飛び出す。悪魔は地下から飛び出してきたエクスシアのジープに驚く。

「簡単には殺さんぞ、退魔の巫女め」

悪魔はエクスシアにライフルの銃口を向けるが、再び悪魔に一齐砲撃が行われた！

「銃身が焼き付くまで撃ち続けるんだ！」

警備隊長の号令により要塞内の生き残った兵士達は悪魔に一齐に攻撃を仕掛けたのだ。攻撃は確実に悪魔に命中する。城壁からは守備隊のロケット砲や対空機関砲、要塞内からは戦車砲、迫撃砲と機関銃と様々だったが、エクスシアに命中しないように警備部隊が観測員として着弾を監視していたのだ。誤差修正もすぐに指示を出す。

その爆音と振動の中、エクスシアは再び中庭を目指していた。自分にもわからなかったが、巨人を呼び出すには広い場所が良いと思っただ。エクスシアは自分の中のエクスシアに呼びかける。

（エクスシア、どうやって騎士を呼び出すの？）

（ようやく、その気になったのね。簡単よ。準備は良い？）

もう一人のエクスシアはそれに応じた。

（はい）

（いくわよ）

『エクスシアの名において退魔を命ずる』

悪魔は再びライフルを振り回し、衝撃波で要塞内の残存勢力に攻撃を仕掛ける。悪魔は地下壕の出入り口で指示を出していた警備隊長を発見するとライフルを突きつけた。

「貴様が指示を出していたのか。叩きつぶしてやる！」

「エクスシア王女の為なら我々は……！」

警備隊長は死を覚悟していたが、恐怖のあまり目を閉じてしまっ

た。悪魔は容赦なくライフルを振り下ろし叩きつぶす！

はずだった。金属同士がぶつかり合う鈍い音がすると、悪魔の手からライフルがはじき飛ばされていた。

「人間相手に随分大げさだな」

「な、貴様は、あの時の！」

警備隊長は恐る恐る目を開けると黒い巨大な物体が要塞内に出現していたのだ。要塞内に発生していた火災の炎でそれが、右手に巨大な鎌、左手に巨大な盾を持った巨人だとわかる。

「こ、これは王女の力なのか！？」

悪魔はすぐに腰の剣に手をかけるが、巨人の方が速かった。轟音が要塞内に響く。巨人が鎌を振り回し、悪魔を要塞の外に叩き飛ばしたのだ。皮肉にも悪魔は再び西の方角に飛ばされてしまう。

巨人は警備隊長に話しかける。警備隊長は悪魔とは違う、巨人の圧倒的な強さの前に両脚が震えていた。

「エクシアを保護して生存者を救出しろ。こいつとは外で決着を付ける」

「……り、了解した」

中庭に居たエクシアも巨人の元に駆けつけてきた。巨人は振り返らずにエクシアにも話しかける。

「エクシア、お前も避難している。こいつの仲間がいるかもしれない」

『貴方はあの時の巨人！？……わかったわ。貴方も気をつけて』

「心配には、およばんよ」

そう言い残すと巨人は城壁を軽々と飛び越えると悪魔を追って要塞の外に出ていった。

「ブライド！この前は取り逃がしたが、今日こそは奴を仕留めるぞ」

機動兵器を駆るパイロット『ファルク・ユーゲントリツヒ・ログナー』が、子パイロットの『ザ・ブライド』に呼びかける。

「イエス、マスター。ホーンド・ミラージュ・ノ・ゼン・ブソウ・セーフティロック、カイジヨ」

エクシアによって呼び出された巨人、いや機動兵器ホーンド・ミラージュはロービジ迷彩の漆黒に塗装されていた。その右手には巨大な鎌を、左手には盾であるベイルを装備している。

サタンは先ほどの一撃で片方の翼はもぎ取られ、すでに継戦能力は奪われていた。それでも、サタンは腰の剣に手をかけ、ホーンド・ミラージュに襲いかかる。

「遅い！」

ホーンド・ミラージュは巨大な鎌を振るうと、たちまちサタンの首が宙を舞った。

西暦2319年

場面は再び病院の屋上に戻る。

『黒き巨人は見事悪魔を撃退。そして王女は悪魔を退けた英雄として再び国民からも迎えられるようになったの』

マリナ・イスマイルは親友のシーリン・バフティヤールに遠い先祖であるエクシア王女の伝説を語り終えていた。

『以上が我が家に伝えるエクシア王女の伝説よ』

「凄い伝説ね」

この時マリナは知らなかった。この伝説には更に続きがあったことを。なぜマリナが伝説の続きを知らなかったのか？それは、ここから続く伝説は語り継がれていないからだ。語り継ぐにも人々の記憶には絶対に残らなかったのだ。

「ちと、呆気なかったな……」

サタンを一撃で葬り去ったホーンド・ミラージュのパイロット、ログナーはぼやいていた。

首を切断されたサタンの亡骸は依然として砂漠に横たわったままだ。本来、サタンは倒されるとその体は消えてなくなるのだが。

「マスター！サタン・ノ・カラダ・カラ、コウ・エネルギー・ハンノウ・ヲ・カンチ！」

「チッ、ブライド、フルバックだ！」

「イエス、マスター」

言うが早い！ホーンド・ミラージュはベイルで身を庇いながら一気に後退する。しかし、サタンの体が風船のように膨れると破裂した。巨大な火球があたりを包んだ。

『一体城の外で何が起こっているというの！？』

東の塔、すなわちエクスシアが収監されていた離宮の屋上にエクスシア達はいた。ここから砂漠で繰り広げられている巨人同士の戦いをエクスシアや生き残った兵士達は見守っていたのだ。するとエクスシアは突然、頭痛に襲われた。

『痛い！痛い！頭が割れる。誰、私に呼びかけているの？』

「王女、どうさないました！」

エクスシアの異常に気がついた兵士達は駆け寄ってくるが、エクスシアの耳には入らなかった。それよりもエクスシアは痛みに耐えながら、頭に直接響く呼びかけに必死に答える。

『エクスシアは私！貴女もエクスシア？私がエクスシアよ。え？貴方はマリナ？もう訳がわからないわ。痛い！逃げろ？どうということ？』

（これは……エクスシア！今すぐ皆を避難させて！）

『え？わかった。皆さん、早く離宮に入りなさい！爆発の衝撃がここを襲います！』

「は！？」

『いいから早く！これはエクスシアの命令です。他の兵士も地下壕が建物に入るように連絡してください』

「り、了解しました」

実際はエクスシアの中のエクスシアが命令したのだが、すぐにエクスシアは屋上から避難するように指示をする。最後の兵士が離宮に入ったその時だった。砂漠で巨大な爆発が起こり、爆風と衝撃波が要塞全体を包む。エクスシア達の居る離宮も例外ではなく爆風と衝撃波に襲われたのだ。エクスシア達は離宮にはいると、すぐに床に伏せて頭を保護した。

（この爆発は！？）

この爆風と衝撃波により要塞全体に被害が発生していた。崩れかけていた西側の城壁は完全に吹き飛んだのだが、すさまじい量の瓦礫が横殴りの雨のように要塞内に降り注いだのだ。エクスシア達もあと離宮に入るのが遅かったら瓦礫の雨に襲われていた事だろう。離宮の窓は防弾ガラスだったため瓦礫が貫通する事はなかったが、内部の壁や天井は剥がれ落ち、多数の亀裂がはいっていた。

『……今の爆発は！？』

体の埃をはらい落としながら立ち上がる。エクスシアの美しい黒髪は埃で真っ白になっていた。あたりを見渡すと、他の兵士達も起き上がるうとしていた。

『良かった。とりあえず、皆無事みたいね』

（エクスシア、今の爆発は何？）

（サタンの自爆攻撃よ。危なかったわね。あの通信が無かったら死んでいたかもしれないわ）

（え？それではあの頭痛は、それを私に伝えようとしたの？）

（そのようね）

（一体誰が？）

（それよりもまずい事態になったわよ）

（どういう事！？）

（複数のサタン達の出現を感知したの。これは歴史と違うの）

（歴史と違う？）

（サタン達が歴史を改竄しようとしているの！）

サタンの自爆によりあたり一帯に砂埃が俟っていた。サタンの自爆攻撃から身を守るためエクシアの居る要塞からかなり離れた砂漠にホーンド・ミラージュは移動していた。ホーンド・ミラージュは爆発の衝撃波よりも速く移動する事が出来るのだ。しかし、それならば無傷でないとおかしいのだが、ホーンド・ミラージュはダメージを受けていた。

「ブライド、被害状況を報告しろ」

「カクブ・ヒガイ、ケイビ。タダシ、ベイル・ハ・タスウ・ノ・グレネード・ノ、チョコゲキ・ニ・ヨリ、シヨウハ。マタ、ベイル・ナイ・ジェネレーター・ニ、イジヨウ・ハッセイ。シュツリヨク・ガ、20パーセント・ダウン・シマシタ」

「チツ、サタン共味な真似を」

自爆攻撃から回避するために全力後退を行っただが、回避ルート上にグレードランチャーの一斉予測砲撃を受けたのだ。

爆風と衝撃波を回避しながら、更にその中から突然現れたグレネードの雨を回避するという荒技をログナーとブライドはやってのけたのだが、数発はベイルに直撃を許してしまう。元々、ベイルは盾なので本来は正しい使い方なのだが、サタンのグレネードは非常に

破壊力の高い弾頭を使用していたのだ。ベイルは盾以外にも予備の武器や、予備ジェネレーターを装備している場合もあった。ログナーとブライドの駆るホーンド・ミラージュもベイル内にジェネレーターを装備していたのだが、グレネードの直撃によりジェネレーターに異常が発生、このため機体全体の出力がダウンしてしまったのだ。

「奴らはじめから俺達が目的か!？」

「ご名答。流石はバビロンの騎士」

その声と共に次々とサタン達が砂漠の中から出現する。

「マスター！サタン・オヨビ、サタン・コマンダー・ノ・ハンノウ・ヲ・カンチ、シマシタ。カズハ、6タイ」

「1対6か。サタン共め歴史に介入するつもりか!？（手負いのホーンド・ミラージュでどこまでやれる？ブライドだけでも逃がす準備をするべきか……）」

先ほど王宮を襲った同じ体格のサタンが四体、そして残る二体は体の大きいサタン、サタン・コマンダーだった。サタン達の手にはグレネード発射装置が取り付けられたライフルが握られていたが、腰にも剣や斧をぶら下げていた。その内の一体のサタン・コマンダーが他のサタン達に命令を出した。

「バビロンの騎士は俺の隊が引き受ける。残りの貴様らは巫女を頼む。魂の輪廻転生を阻止するのだ」

「了解した」

もう一体のサタン・コマンダー率いるサタンの小隊が、その翼を広げエクシアの避難した離宮に向けて飛び立つ。

二手に分かれてホーンド・ミラージュとエクシアを襲う計画なのだ。ホーンド・ミラージュが強いと言っても同時に2カ所の攻撃は防ぐことが出来ない。

「ブライド！対空ミサイル発射！」

「させるか！」

残ったサタン・コマンドーは攻撃させまいと斧を振り上げホーンド・ミラージュに斬りかかる。

ホーンド・ミラージュは左手のベイルでその攻撃を受け止めるが、その隙を突いて左右からサタン達が攻撃を仕掛けてきた。ホーンド・ミラージュの左腕はサタン・コマンドーの斧をベイルで受け止めているため使えない。右手の鎌で右正面のサタンは相手が出来たとしても、左背後のサタンには隙を与えてしまう。絶体絶命のピンチであつた。

「チー！」

「マスター！」

一方、もう一組のサタン小隊は空から要塞に迫っていた。

「コマンドー、相変わらず巫女の反応が微かにしか探知できません」

「どうやら我々に探知できない何かがあるようだ。それならばグレネードによる一斉砲撃で要塞ごと消し飛ばすまでだ！」

「了解」

サタン達はどういうわけか、彼らの天敵であるエクシアを探知できないでいた。そのため、先に侵入したサタンは手当たり次第破壊し続けたのだ。もっとも、それは巫女の騎士であるログナーを呼び寄せる罠でもあつたのだが。

サタン達が飛来する様子を城壁の監視小屋の守備隊が発見していた。レーダーによる探知は出来なかったが、赤外線暗視装置により肉眼で発見する事ができたのだ。急いで離宮の警備隊長に連絡を入れる。

「悪魔が三体こちらに向かっています！」

「新手か！？それも、三体だと？」

「三体も！？」

周りで無線を聞いていた兵士達は戦慄する。流石のエクスシアも衝撃を受けていた。巨人は先ほどの爆発でやられてしまったのか姿が見えない。そんな時に更に新手が三体も来たのだ。それでも、表情には出さずに気丈に振る舞っていた。

「大丈夫です。悪魔は必ず撃退出来ます」

「……ですが、王女。あの黒い巨人も姿が見えません」

「（くっ）我々は巨人の力を信じましょう。きっと巨人があの子の悪魔を撃退するでしょう。それまでの間、我々で時間稼ぎをします」

だが、兵士達から返事がない。あれほど強い悪魔が今度は三体も襲ってきたのだ。今度こそは誰もが終わりだと思っていたのだ。

「エクスシア王女の言うとおりだ！」

「警備隊長！？」

無線のマイクを握りしめて、要塞内の生存者全員に通信を繋ぐ。

「あの黒い巨人は再び我々を助けに現れる。一撃で悪魔を倒した巨人だ。エクスシア王女の呼び出した巨人だ。あの程度の爆発でやられるような奴じゃない」

「そうだ、王女と隊長の言うとおりだ」

「俺たちが敵わなかった悪魔を一撃で倒した巨人だ。三体くらいあつという間に倒してくれるさ」

『皆さん……ありがとう』

「まだ戦える者は手近の対空火器で悪魔を迎撃しろ。手が足りない部隊はこちらからも増援をだすから遠慮なく言ってくれ」

兵士達は迎撃するために続々と離宮から出撃していった。

「王女、それでは私も前線で指揮を執りますので、王女は地下壕に避難してください。もしもの時は王女だけでも……」

隊長はエクスシアにジープの鍵を渡す。そして敬礼すると足早に城壁の監視小屋に向かっていった。エクスシアは見送るだけしか出来なかった。兵士達が自分のために命を投げ出す覚悟だったからだ。そんな兵士達にかかる言葉がみつけれない自分に泣いた。

（……エクスシア、貴女が言っていた歴史の改竄の意味はこれのことだったのね。……もう駄目かもしれない）

エクスシアも弱気だった。しかし、自分の中のエクスシアは何も答えない。

（そうよね。巨人は彼だけ。その彼が今は他の悪魔と戦っている。私達では悪魔に勝てない）

（……エクスシア、ちょっと静かにしてくれないかしら？私ともう一人のエクスシアは貴女と違って諦めていないわ）

（え？）

要塞に設置された対空火器から一斉に悪魔達に攻撃が開始された。対空機関砲から発射された洩光弾が夜空に吸い込まれるように打ち上げられる。しかし、悪魔達は例え命中しても気にすることなくグレネードランチャー付きライフルを要塞に向け構える。そして、一体の悪魔がエクスシアの居る東の塔を指し示す。

「コマンダー！あの塔から微かに巫女の反応を探知しました」

「よし、グレネード発射！」

「ファイア！」

三体の悪魔から必殺のグレネードランチャーが発射される。

「対空機関砲起動！グレネードを撃ち落とせ！」

城壁に隠されて生き残っていた20ミリ対空バルカン砲が迎撃する。あつという間に凄まじい量の空薬莖の山ができあがる。

「頼む！あたってくれ」

兵士達の願いが通じたのか要塞上空に三つの火の玉が生み出された。20ミリ対空バルカン砲が悪魔のグレネードを迎撃したのだ。しかし、強力なグレネードの爆発が城壁を襲う。

「面白い。だが、第二射は防げるかな？」

「ファイア！」

悪魔達はグレネードの第二射が攻撃を行う。再び対空バルカン砲に迎撃指示を出す反応がない。

「先ほどの爆発で20ミリ対空バルカン砲がオフラインになりました！」

監視小屋の守備隊兵士が悲痛な声で警備隊長に無線で報告を入れるのだが

「なんだと！？何としてもアレを……………」

「隊長どう……………」

「……………おい、……………」

急に要塞内の無線にノイズが混じり、通信障害が発生する。

エクシアは離宮の屋上から悪魔達の第二射攻撃を見ていた。この時エクシアの目には自分自身に向けて発射された三発のグレネードが、まるでスローモーションビデオを見ているかのようにゆっくり見えていた。

（このグレネードは私にはあたらないわ）
（そう、だって撃ち落とされるから）

その時、北の空から南の空に向けて緑の光線が駆け抜ける。光線が駆け抜けたあとには再び三発の火の玉が咲いていた。

「なんだ、今のは！粒子ビームか！？」

サタン・コマンダーはグレネードを撃ち落とした緑の光線に恐怖を覚えた。何者かが超長距離から正確にグレネードを撃ち落としたのだ。

（やはり我々でも探知できない何かがあるのか？いや、そもそも我々は巫女を探知できないのは何故だ？まさか！？）

「コマンダー！？今の粒子ビームは北の方角からの攻撃です」

「すぐに散開しろ！」

サタン・コマンダーは部下に指示を出す、再び緑の光線が今度は南の空から北の空に向けて駆け抜けていく。その瞬間、一体のサタンが胸を撃ち貫かれ地上に落ちていった。

「しまった！」

サタン・コマンダーがもう一体の部下を蹴り飛ばす。部下の散開が間に合わないため、強制的に位置を変えさせたのだ。しかし、三度緑の光線が今度は東の空から西の空に向けて駆け抜けていく。光は蹴り飛ばされていくサタンに吸い込まれるように軌道を変えて撃ち貫いていった。

「ば、馬鹿な！」

サタン・コマンダーは信じられなかった。部下を狙撃から助けるために蹴り飛ばしたのに、それを見透かすように狙撃したのだ。サタン・コマンダーは一瞬のうちに部下を全て失ったのだ。

「（囲まれているのか？狙撃者は三人？地球人の仕業とは思えないが……）ならば！」

サタン・コマンダーはライフルを投げ捨て、腰の剣に手をかけて離宮の屋上に居るエクスシアに向かって急降下する。このスピードならば狙撃は出来ないはずだ！とサタン・コマンダーは読んだのだ。剣を振り上げてエクスシアに迫る！

「死ねえ！退魔の巫女よ！」

振り下ろされた剣はエクスシアごと離宮の屋上を粉々にした。破壊された離宮は砂煙と光の粒子をばらまきながら崩れていく。サタン・コマンダーはその様子に満足すると剣を空に掲げ、勝利を宣言した。

「……これで我々の勝ちだ！我々はいいに巫女を葬り去ったのだ」

「エ、エクスシア王女！」

要塞内の兵士達は崩れ去る離宮を見て絶望した。

「グッ、さ、流石、バビロンの騎士」

「貴様、背中にも眼があるのか！？」

一方砂漠ではサタン達との戦いに終止符が打たれようとしていた。ホーンド・ミラージュはサタン・コマンダーの斧を盾で防いだ所に左右からサタン達の挟撃をうけたのだが、ログナーとブライドは

冷静にタイミングを見計らってカウンター攻撃を繰り出す事に成功したのだ。

右正面から接近するサタンに鎌で攻撃すると見せかけて、左背後から接近するサタンに鎌を槍のように操り、刺し貫いたのだ。勿論、背後を振り向くようなマネはしていない。そして、すぐに鎌を投棄すると右正面から接近するサタンに腰の剣を抜刀してブラインド・ソードを繰り出したのだ。ログナーとブラインドもタイミングを誤れば串刺しにされていただろう。だが、彼らはタイミングを誤るような事はなかった。

「一度離れるぞ」

ログナーはホーンド・ミラージュを後退させると距離をとる。サタン二体を一度に葬り去ったのだが、ホーンド・ミラージュにも相当負担をかけてしまったからだ。サタン・コマンドーの斧を受け止めた左腕は盾と一緒にダメージを受けており、また、右手首もログナーの常識外の攻撃方法によりガタがではじめていた。

サタン達より遙かに強力なサタン・コマンドー相手に傷だらけのホーンド・ミラージュで立ち向かえるのは彼らこそだといえよう。

「マスター、イマ・ノ・コウゲキ・デ・ベイル・ナイ・ジエネレーター・イジョウ・テイシ・シマシタ。マタ、ミギ・ウデ・フレーム・モ、ガタ・ガ・デテキテイマス」

（出力大幅ダウンか、まずいな……ブライドだけでも脱出させるか）

ログナーは撤退タイミングを考えていた。エクシアによって呼び出された彼らであるが、子パイロットであるブライドまでこれ以上巻き込むわけにはいかない。最悪、ホーンド・ミラージュが活動限界になる前にブライドのみを帰して自分だけ残って戦う覚悟であ

った。だが、そんなログナーの心情を見透かしたのか、ブライドがログナーに次のような報告をする。

「ミギ・テグビ・ハ、ワタシ・ガ、ゲンカイ・マデ・カドウ・ホセイ・シマス。マスター！サツサト、メノマエノ・サタン・ヲ、ブツタオシテ、コノコモ、ヘイカ・ニ、ナオシテ・モライマシヨウ！」

「……フ、そうだな。さつさと倒してフロートテンブルに帰るぞ」

ホーンド・ミラージュは再び攻撃態勢を整えるとサタン・コマンダーに相對する。それでも、ベイル内のジェネレーターが停止したことによりあきらかにパワーダウンしており、エネルギーの残量も数回の斬り込みが限度だった。

サタン・コマンダーはボロボロになった斧を投棄すると、腰にぶら下げた剣に手をかけ、ログナーに向かって叫んだ。

「貴様等のがんばりもここまでだ。今、別働隊から巫女を葬り去ったと連絡が入った。次は貴様等の番だ」

「何！」

「王女は我々の攻撃を受けて粉々になったようだ」

「……なるほど、そういうことか」

「死ねえ！」

サタン・コマンダーは間合いをつめると斬り込んできた。だが、ログナーは攻撃を正面から受け止める事をせず右に受け流す。隙の出来た背中に一撃を加えようとするが、サタン・コマンダーはすぐに剣で横になぎ払う。その剣圧でベイルの表面に深い傷がついたほどだ。

「バビロンの騎士よ。動きにキレがなくなったようだか？」

「雑魚を倒すのに動き回る必要はないからな」

「ぬかせ」

サタン・コマンダーが剣を持ち直すと激しい尽きを繰り出す。ログナーは神業のごとくかわしてはいるのだが、徐々にホーンド・ミラージュの装甲に傷が付きはじめていた。また、砂漠はホーンド・ミラージュの足だけではなくエネルギーも余分に吸い取っていった。その中で、ブライドはログナーの回避運動を忠実に再現させようとホーンド・ミラージュを操るのだが、パワーが不足している中でもある算段を考えていた。それは、いつ現在のマスターであるログナーが反撃に移るのか？だ。このまま回避運動を続ければ、いずれはエネルギーが尽きる。もしくは先にサタン・コマンダーの攻撃を受けるかもしれない。

「しまった！」

サタン・コマンダーの突きがホーンド・ミラージュの左肩の装甲を刺し貫く。砂に足を取られて回避が遅れたのだ。だが、ログナーも動きの止まったサタン・コマンダーに一撃をお見舞いする。

「この死に損ないが！」

サタン・コマンダーに回避されたため与えたダメージは大きくはなかったが、それでも一撃をかえすことが出来た。だが、今の攻撃によりホーンド・ミラージュの左肩が回らなくなってしまったのだ。

「ブライド、ベイルを構えた状態で左腕を固定」

ブライドは左肩より下の部位を動かして、ベイルを構えた状態で固定する。確かにベイルを固定することにより、そこに攻撃を受け止める分には有利だが、逆に固定してしまったために回避の際の運動バランスが悪化することに繋がる。ブライドは直感していた。これは反撃の準備だと。あとは反撃の糸口だけだ。そして、反撃のチャンスは思わぬ所からやってくる。

「マスター！ユウゲン・キ・カラ、アンゴウツウ。コノ・アンゴウ・

ホウシキ・ハ、ミラージュ・デス」

「友軍騎？……ブライド読み上げてみる」

「……モクヒョウ・ヲ、クチク・スル、イジヨウ。コレハ？」

ログナーは鼻で笑い飛ばすとブライドに檄を飛ばした。

「ブライド、次の一撃でサタンを倒すぞ」

「イエス、マスター！」

ホーンド・ミラージュはサタン・コマンダーに斬りかかる。この
時のためにブライドが蓄えておいた残り少ないエネルギーだ。一気
にサタン・コマンダーに詰め寄るが、パワー不足が原因なのかその
動きにキレがない。そこをサタン・コマンダーに見切られる。

「馬鹿め、遅いわ！」

サタン・コマンダーは剣を両手で持ち直すと頭上から一刀両断す
る。金属と金属がこすれあう時に生じる火花とともにホーンド・ミ
ラージュが真つ二つにされた。

「まだまだ！」

真つ二つにされたのはホーンド・ミラージュのベイルだけだった。
攻撃を受ける寸前、素早いバックステップで攻撃をかわしベイルで
死角を作ったのだ。それこそが残り少ないエネルギーの大半を消費
して生み出した罠だったのだ。二つに切り落とされるベイルの隙間
をぬって、必殺の剣がサタン・コマンダーを刺し貫いた！

「……エクスシア王女」

崩れ落ちる離宮を目の当たりにした生き残った兵士達は絶望に打

ちひしがれていた。彼らの希望だった王女が悪魔の手によって殺されたのだから。

「人間共め、すぐに巫女の元に送ってやるぞ」

サタン・コマンダーは剣をかまえる。崩れ落ちる王宮、切り刻まれる城壁、兵士達は瓦礫の下敷きになるのか、それともその剣によって斬り殺されるのか、刺し貫かれるのか、これから起こるだろう最悪の事態を考えたくはなかった。

『そう、簡単にはいきませんわ』

エクスシアの声が要塞内に響きわたった。

「エクスシア王女!？」

「……その声は退魔の巫女か!？」

兵士達もサタン・コマンダーも驚きとともに、王女の声の元を探すのだが見つけれない。

「どこだ!？王女はどこだ、全員で探せ」

「巫女め、どこまで我々を愚弄する気だ」

『私はここですわ』

王宮の屋根に光の粒子が集まる。すると光の粒子はエクスシアにかわった。

「今後こそ殺してやる!」

サタン・コマンダーは稲妻のような速さで王宮に斬り込むと一気に剣を振り下ろす。凄まじい剣圧により王宮ごとエクスシアは斬られてしまった。崩れ落ちる王宮。だが、エクスシアは再び光の粒子

にかわると消えていった。

「なんだと!？」

『だから、言ったでしょう? 簡単にはいかないと』

サタン・コマンダーは振り返る。今度は北の塔の屋上にエクシアが立っていたのだ。

「この化けモノめえ!」

サタン・コマンダーは再び剣を振るい衝撃波を発生させる。衝撃波の直撃を受けた北の塔は根本から崩れていくのだが、エクシアは光の粒子となり瓦礫と共に消えていった。

「どういうことだ!？ 巫女にこんな力はないはずだ」

焦るサタン・コマンダーを尻目に、要塞の城壁に光の粒子が現れると再びエクシアを形成した。

『いったい、今のは何だったの?』

エクシア本人も自分におきた現象を理解できなかった。

(少し、からかい過ぎたかしら?)

(ご先祖様、これは量子化です)

『貴方は……エクシア? それとも?』

自分の中のエクシアとは違う人物が直接エクシアの脳に話しかける。

(エクシア、遊びは終わりだ。サタンを倒すぞ)

(イエス、マスター)

『男性の声? 貴方達は一体誰なの?』

(ご先祖様、危ないから下がっていてください)

(エクシア、彼らが姿を現すわ)

(光学迷彩解除)

(光学迷彩解除します)

城壁のエクシアの目の前に新たな巨人がその姿を現す。巨人は

エクシアに背を向けてはいたが、その背中には色鮮やかないくつもの羽が生えており、また、羽の隙間からは光り輝く粒子を大量に放出させていた。それはまるで天使の羽のように。

『なんて綺麗なの……まるで天使のよう』

「何者だ!？」

言葉とは裏腹にサタン・コマンダーは突如現れた新たな巨人と距離を取る。まったく気配を感じさせず突然これだけの巨人が出現したのだ。それだけではない。先ほどの狙撃だ。

（こいつが部下達を狙撃した一味か？だが、三方向から長距離狙撃したとなると他にも仲間がいるはず）

サタン・コマンダーは知らなかった。グレネードを撃ち落としたのも、二体の部下を狙撃したのも全てこの巨人の仕業であったことを。

白を基調としたボディに蒼い胸部と肩。そして頭部のV字型の角どれもが異質だった。巨人の目に光が点る。そして、巨人の胸部に埋め込まれた鮮やかなグリーンのレンズに髪の毛の長い女性の人影が現れた。

「貴様、まさか、巫女の加護を受けた騎士か!？いや、巫女の騎士か!」

サタン・コマンダーはその女性の影に恐怖を感じた。悪魔達にとつて、災いをもたらす人物が現れたからだ。

巨人は背中から剣を取り出す。それは、とても背中に収納されていたとは思えない長さの緑色に輝く刃で構成されていた。

『貴方達は一体何者なの!？』

城壁のエクシアは巨人にむかって叫ぶ。サタン・コマンダーはその声に呼応するように巨人に斬りかかってきた。その踏み込みの

速さは稲妻のごとく。しかし、サタン・コマンドーの剣は巨人に届く事がなかった。

「俺は」

サタン・コマンドーの右腕が剣ごと斬り落とされたのだ。サタン・コマンドーの剣は刃そのものが切断されていた。

すぐに残された左腕で、もう一本の予備剣に手をかけ、再び巨人にむかつて斬り込む。しかし、結果は同じだ。左腕も剣ごと斬り落とされたのだ。

「俺たちは……！」

「や、やめろ、やめてくれ！」

巨人は剣をかまえると一気に振り下ろし、サタン・コマンドーを頭から一刀両断したのだった。

「……馬鹿な。我々の任務は……失敗したというのか!？」

「自業自得だな。貴様らにとって最悪な女を呼び出してしまったのだから。歴史を改変しようとした罰さ」

ホーンド・ミラージュを駆るログナー達もサタン・コマンドーを撃破した直後だった。サタン・コマンドーは断末魔の悲鳴をあげると砂になって消えていった。

「ベイルがズタズタだな。始末書では済まないか……」

ホーンド・ミラージュの足下にはサタン・コマンドーによって、二つに切断された盾が転がっていた。サタン・コマンドーが攻撃を仕掛けてきたのだが、ベイルをパリジするタイミングを調整して、

サタン・コマンダーの隙と死角を作ったのだ。ベイルはサタン・コマンダーに二つに切断されたのだが、その一瞬の隙にログナーはサタン・コマンダーの死角について、必殺の一撃を加えたのだ。

「マスター！ ヨウサイ・カラム、サタン・ノ・ハンノウ・ガ、キエマシタ」

「あそこには巫女が二人も居たからな。それではサタン共も居心地が悪くなるってもんだ」

「エ？」

「ブライド、今の話は忘れろ。それよりも要塞に戻るぞ。出来るか？」

「イエス、マスター！」

要塞を襲ったサタン・コマンダーはすでに砂になって消えていた。

「エクスシア王女！ 王女、しっかりしてください」

「……あれ、巨人は？」

エクスシアは新たな巨人がサタン・コマンダーを一刀両断したあとで、意識を失い倒れてしまったのだ。幸いにも守備隊の兵士に見られ地上に降ろされたのだ。今は中庭に作られた仮設医療テントの中で寝かされていた。

「巨人ですか？ 王女が呼び出した巨人なら先ほど戻られました」

「……なんですって！？」

エクスシアはよろよろと立ち上がり、看護の兵士達の制止を振り切りテントの外に出る。そこには黒い巨人だけが片膝について佇んでいた。

「エクスシア、目が覚めたか？」

『悪魔を撃退してくれて、ありがとうございます。国王陛下に代わって御礼申し上げます。ところで、もう一体の巨人、ガン』

だが、黒い巨人はエクシアの言葉を遮るところ言った。

「エクシア、巨人ははじめから俺一人だった。違うか？」

『え？』

「はじめから巨人も悪魔は一体しかいなかった。そうだろう？」

『何を仰っているのです！？ああ、そうか。貴方は会っていないのですね？』

「王女！エクシア王女」

警備隊長が息を切らせながら駆けつけてきた。王宮の被害状況を確認していたところ、看護の兵士から王女が目覚めたと無線連絡を受けて急いできたのだ。

「エクシア王女、無理をなさらないください」

『隊長、もう一体の巨人がどこに行ったのか知りませんか？あの、三体の悪魔を葬った巨人です』

「……悪魔はこの巨人が倒しました。我々があれほど苦戦したのに一撃で悪魔を倒したのですから」

『いいえ、それは初めに要塞に侵入した悪魔であって、次に襲ってきた三体の悪魔です。あの悪魔を撃退した巨人です。貴方も見たでしょう？』

だが、エクシアの予想とは裏腹に警備隊長は怪訝な顔をする。

「王女……記憶が混乱されているのですね。でも、もう大丈夫です。悪魔はこの巨人に倒されました」

『隊長まで何を……』

（エクシア、皆の記憶から三体の悪魔の事と私達を救った巨人が消えているようね）

（え？）

（きつと、これは悪魔達の歴史改竄の影響を最小限に抑えるため）
（それでは、あの巨人は）

（歴史改竄を防ぐためにやってきたのね）

思考をめぐらそうとしたエクシアの元に、続々と生き残った兵士達が集まってくる。必死に悪魔と戦い生き残った勇者達だ。兵士達のその表情は明るかった。

「全員、整列。エクシア王女に敬礼！」

『皆さんのおかげで悪魔を撃退する事ができました。国王陛下に代わり御礼申し上げます』

エクシアは兵士達に頭を垂れる。その時、エクシアは破壊された城壁の隙間から光をみつけた。

『皆さん、夜が明けますわ』

「おお、朝日だ」

「……太陽を再び拝める事が出来るとは思えなかったな」

「だが、俺たちは、俺たちは生き残ったんだ！」

「ああそうだ。俺たちは生き延びたんだ」

自然と兵士達から歓声があがった。

「マスター、ユウゲンキ・タイキケン・リダツ・カクニン・シマシタ」

「そうか」

「アレハ、ミラージュ・ナノ・デスカ？」

「さあな。ブライド、我々もフロートテンプルに帰るぞ。こいつも陛下に直して貰おう」

「イエス、マスター」

朝日に照らされてホーンド・ミラージュの全容がはじめてわかる。兵士達もあらためて見直すが、それは死神のような風貌だった。だが、彼らにとってみれば死神ではない。まさに救世主だった。死神だったのは悪魔達の方だ。

ホーンド・ミラージュが立ち上がる。

『もう行かれるのですか？』

『今日の契約はここまでだ』

『出来ればこのまま我が国を見守っていて欲しいのですが……』

「それは無理だな。人間同士の争いに介入するのは俺の仕事ではない」

『……無理を言って申し訳ごさいませんでした。今夜はありがとうございました
ございました』

「礼には及ばん。そういう契約だ」

エクスシアや兵士達に見守られながら、あの時のように足下に黒い穴が開くと、ホーンド・ミラージュは吸い込まれるように消えていった。

『……行ってしまいましたね』

「はい、エクスシア王女」

『さて、それでは皆さんこれより王宮の再建にとりかかりましょう。勿論、生存者の救出と負傷者の手当は最優先でお願いします』

「イエス、マイロード！」

兵士達が再び自分の持ち場に戻り、エクスシアだけが一人残された。エクスシアはふいに空を見上げる。僅かながら緑の流星が空を駆け上がっていった光跡が見えたような気がしたのだ。

（どうやら良い伴侶を見つけたようなね。さようなら、新たな巫女と騎士よ。そして、未来の私も）

「少しは落ち着いたか？」

『泣いたらだいぶん楽になりました……』

「やはり、彼女たちに挨拶をした方がよかったのではないか？」

『……これ良いのです。私はあの時代に存在してはいけない女』

「……そうか」

『それよりも』

「それよりも？」

『……私の時は膝枕してくれないのですね。マリナの時だけずるいです！』

「（うつ）そう言われても、狭いコックピットでは無理だからな」

『（嘘ばかり。お姫様抱っこで操縦したこともあるくせに）それでは帰ったら私もたっぷり甘えさせて貰います』

「……考えておこう。それよりも次のウェイポイントまでの時間は？」

『あ！間もなくです』

「セカンドフェイズに移行する」

『粒子ゲート展開します』

外伝 エクスシア（後書き）

後書き

読んでいただきましてありがとうございます。

今回は第8話でマリナがシーリンに語ったご先祖様のお話を掘り下げてみました。

当初は8千字程度の短編だったのですが、ご覧の有様です。――話完結（？）は難しい。

ログナーとザ・ブライド（戦闘モードのバクスチュアル）が駆るMHはホーンド・ミラージュです。ホーンド・ミラージュは星団3大MHよりも性能が劣っているそうですが、そこは搭乗する騎士の腕でカバーしていたそうです。今回、黒く塗装されて登場してきましたが隠密作戦のためとか。これが後のテロル・ミラージュに繋がるようですね。

さて、第9話も今回と同じぐらいのボリュームになりそうです。流石にこのボリュームで週一更新は厳しくなってきました。投下を隔週ペースに落とすか、第3章から五話一組を見直す事になるかもしれません。そのため第9話は来週後半位になるかもしれません。投下時期が見えてきましたら活動報告で報告したいと思います。

それでは皆様、第9話もよろしくお願いします。

第9話 刹那という種

旧AEU領。

刹那とミレイナは取引先の創立記念パーティーに出席するため車でパーティー会場に向かっている。

パーティー会場は社長所有の郊外の別荘で行われるため、交通の便を考えて車による移動を採用することになった。ミレイナの会社からでは距離があるため、刹那とミレイナは近くの空港まで旅客機で乗り付け、別便で輸送した車を受け取る。そして、刹那の運転で会場に向かうことになったのだ。

刹那は別便で輸送したアウディS8L「E」のハンドルを握っており、S8Lの後部座席ではミレイナが愛用の携帯端末のコンソールを叩いている。運転席・助手席の背面には立体投影ディスプレイが埋め込まれており、トランクにはヴェーダへ接続するためのターミナルユニットが格納されていた。早い話がミレイナの移動オフィスだ。彼女はパーティー会場に入る直前までお仕事なのだ。

さて、刹那が運転するアウディS8Lだが、レンタカーではなくミレイナの所有物である。正確に言うと刹那からちよつとだけ借りている、と言った方がいいだろうか。

ミレイナ仕様のS8Lはリアエンブレムに取り付けられた「E」のバッジと内装や細部のディテールが若干異なっているのが、ぱつと見てわかるオリジナルとの外装の違いだ。中身に関しては、「E」のバッジが示す通り別物である。このS8にV型エンジンというものとは搭載されていない。搭載しなくても走行することが可能だからだ。ボディもオリジナルはアルミ製のフレームにアルミパネルを取り付けているが、こちらはモビルスーツでも使用されているEカーボンを『取り込んだもの』が使用されていた。もうおわかりいただいと思うが、このアウディS8LはELSが擬態した車だ。ミレ

イナはELSが擬態したメカのメンテナンスや改良を行える事が出来るのだ。そうでなければ、ELSダブルオークアンタの改良プランなど作ることが出来ないだろう。なお、このELSが擬態したS8だがナンバープレートだけは本物である。今回、このような物騒な車を引つ張り出してきた理由は二つあった。一つは単純に護身用、もう一つはクアンタに搭載予定のある機器のテストも兼ねていたからである。

「ミレイナ、少し休んだらどうだ？」

「飛行機の中で寝ましたので大丈夫です」

もの凄い早さでコンソールを叩きながらミレイナは刹那の気遣いにこたえる。現在、ミレイナはクアンタのコックピットシステムの最終調整中だ。

「それよりもセイエイさん、操縦にはなれました？」

「ああ、なれてきた」

刹那が握っているハンドルには秘密があった。それは、

「脳量子波で通信するよりも直感的に行えるな」

「それは良かったです。この車はセイエイさんや、一部のイノベーター以外は操縦できないのが欠点ですが」

「ミレイナは操縦できないのか？」

「ELS達が勝手に動いてくれるのは良いのですが全自動運転はテレビドラマの中だけで結構です」

ハンドル部分はELSである。刹那は直接ELSと接触することで操縦イメージを伝えていたのだ。これがミレイナが現在調整中のコックピットシステムのプロトタイプだ。対モーターヘッド対策と

して刹那の動きをトレースする仕組みとして考案したのだ。ところが、このシステムにも欠点はある。それはELS達からのフィードバックだ。操縦者にフィードバックが精神的・物理的に直接伝わる恐れがあるのだ。仮に機体にダメージを受けた時などは操縦者にも伝わってしまう恐れがあった。このため、クラッチの役目を果たすシステムの構築が急務だったのだ。

「そういえば、全自動というわけでないが、マリナの時に似たような事があったな」

「マリナさんが？」

刹那と同棲をはじめた頃にはすでにマリナは光を失っていた。このため自動車は勿論、機械を操縦することは不可能であった。

「ある時、クアンタが勝手にマリナをコックピットに乗せたことがあった」

「えー！ELSダブルオークアンタがですか！それは初耳です。それで、どうしたんですか？」

「クアンタは目の見えないマリナに花畑を見せたかったらしく、トランザムバースト寸前までGN粒子の濃度を濃くしたのだが」

「うんうん、それで、それで」

「残念ながらマリナの眼は治らなかった……」

「……そうですね、幾らGN粒子でもそこまで万能ではないですよ。ね。マリナさんとELSダブルオークアンタは落ち込んでいませんか？」

「いや、まったく落ち込んではいなかったが、その後不思議な事があった」

「不思議なこととは？」

「後で調べたらクアンタに花の種類が多数登録されていたことだ」「花、ですか？クアンタが外部からデータを参照した可能性は？」

「その形跡はなかった」

「そうですか。それは不思議ですね」

ここでミレイナは一つの可能性を思いついた。

（一番怪しいのはマリナさんですよ。え。やっぱり、マリナさんが教えたのかな？でも、マリナさんは咲いている花を見ることが出来ないです。それではどうやって……ELSダブルオークアンタの力メラアイ！……流石にそんな事はないか、な？）

ミレイナの介護デバイスメーカーの社長らしい着目点だったが、こんな突拍子もない話は流石に刹那相手も出来ないと考え話すのをやめてしまった。

「はあ、それにしてもマリナさんはELS達にもモテモテなんですね」

「……ミレイナも負けていないと思うが？」

「うー、その件に関しては素直に喜べないです」

口は動かしていても手も動かしているミレイナは常々疑問だった事を刹那に尋ねてみることにした。

「セイエイさん、質問してもいいですか？」

「なんだ？」

「マリナさんとELSダブルオークアンタでお出かけするとき、マリナさんはいつもどこに座っていたんですか？ヴェーダのターミナルユニットが積んでいましたから、シート裏のスペースは少ないですよね？」

興味半分仕事半分の質問だった。

「そんな事か。マリナはいつもここだった」

刹那はそう言うつと自分の膝をポンと叩いてみせた。

「（あー、そうですね）……ご馳走様ですう」
「うん？」

（聞いた私が馬鹿だったです）

予想通りの答えだったといえ、ミレイナはこのモヤモヤする気持ちをコンソールに叩き付けるのだった。

（コックピットレイアウトは変更して正解だったです）

「ところで、セイエイさん」

「他にも質問があるのか？」

「はい。事前資料は読まれましたか？」

「ああ、一通りは目を通しておいた」

事前資料とは、創立記念パーティーを主催する会社である『ドウター』社についての資料だ。

「技術力のある中堅企業ということとはわかった。主力はオートマトンや宇宙航空機だが、どうしてそんな会社が？」

「5年前に見本市に出品したときに、たまたまドウター社も介護用オートマトンを出品していたんです。その時に営業部長であるカーリン営業部長と知り合いになったんです」

「それで今の取引がはじまったわけか。だが、それ位の技術力があればOEM供給を受けなくても自社開発出来そうなものだが？」

「ドウター社は技術力がありますが、うちの会社のような装具やサ

ポートデバイス、介護用品を作るだけのノウハウは持っていないので、それで商談を持ちかけてきましたです。おかげで販売チャンネルも広がりまし、それがきっかけで取引先も増えたです」

ミレイナの話にあるように、実際にド社との取引が正式にはじまったのは5年前からだ。少量の取引がやがて大口取引先とかわっていたのだ。また、カーリンの紹介で新規取引先が増えるなどミレイナの会社としても大変良い取引だったのだが……

「問題はスーパーコンピューター・ドクターだな？」

「はいです。同社の社名になっている、自社開発のスーパーコンピュータ・ドクター」

「ヴェーダとも違う量子型演算システム」

「そして今回のヴェーダへの不正アクセス事件は恐らく……」

先日、モーターヘッド・ディステイニーをヴェーダに地球連邦軍所属機として不正登録された問題を追跡していたフェルトとリジエネは、つい先日その足取りの逆探知を完了したのだ。世界中の幾つもの踏み台と呼ばれるコンピューターを経由されて不正アクセスされていたが、フェルトとリジエネという最強コンビによって不正アクセスの逆探知に成功。そして、最終的に辿り着いた先がドクター社の所有する、ある建物だった。

「社長のファルク・ユージェントリッヒ・ログナー。奴は何者だ？」

「ログナー社長とは私も会ったことはありません。カーリン営業部長には頼んでおきましたので今日のパーティでは会うことが出来ると思います」

「モーターヘッド・ディステイニーの支援組織の関係者か、もしくは所有者か、それとも？」

「セイエイさん、こんな時にELSダブルオークアンタが使えない

のは厳しいですね」

「いや、ディステイーが相手ではクアンタでは勝てない。それに、ディステイーのパイロットは俺に『今は敵ではない』と言っていた。今日は『対話』からはじめてみる」

「……よろしく願います」

「ミレイナ、見えてきたぞ。あれが問題の建物か」

「そして今日のパーティー会場です」

刹那を心配するミレイナだったが、車窓からは目的地のパーティー会場である古城が見えはじめていた。

パーティー会場である別荘は大昔の古城を改装した建物だ。これは観光資源として古城を管理していた地元自治体が維持費を捻出できなくなってしまったため手放した物件で、それをド社の社長が買い取って改装、増築して別荘として利用していた。それほど広くはなかったが敷地面積もあり、駐車場に利用されていた。

刹那は先に着替えを済ませるとパーティー会場を見渡せる2階のギャラリーでミレイナを待っていた。

（ふう、うまく駐車することは出来たようだな）

刹那は、ELS達が擬態したアウデイス8L「E」と脳量子波で連絡を取り終えたところだった。刹那とミレイナが会場に乗りつけた際にボーイが車の鍵を預かるうとしたのだがそこで問題が発生。刹那や一部イノベーターもしくは、刹那の関係者しか運転できない車だということを忘れていたのだ。

ボーイに駐車場を教えてもらい、ELS達に運転をさせたのだが、

他の車にぶつかけたり擦ったりしないか監視していたのだ。

「セイエイさん、お待たせいたしました」

「……ほお」

「ほお？」

「すまない、失礼した。ミレイナ、大変良く似合っているぞ」

「あら（マリナさんの教育の賜とはいえ）ミレイナは嬉しいです」

ミレイナはソレスタルビーイング時代の制服をイメージした黄色いドレスを着てあらわれたのだが、良い意味で歳不相応な容姿に加えて普段の作業着姿から想像が出来ない変身に刹那も感嘆の声を上げる。初対面の人間なら還暦を過ぎていることなど想像すら出来ないだろう。ちなみに刹那は紺色のスーツだ。

「コホン、ミレイナ。俺はカマル・マジリフだ」

「（あ、忘れていました）マジリフさんお待たせいたしました」

51年前に消息を絶った人間とはいえ、公の場で刹那・F・セイエイを名乗るわけにはいけない。このため、コードネームであるカマル・マジリフ名でパーティーへの出席届けを出していたのだ。

「ところで、ミレイナ。ここにはどういう職種の人間が集まっているのだ？」

下の会場の喧噪を眺めながら刹那はミレイナに尋ねる。以前、テイエリアと潜入したアロウズのパーティーとは客層が違うはずだが、所々に軍や警察関係者と思われる人間が目についたので気になったのだ。

「ド社は介護用以外にも軍用や警察用オートマトンも販売していま

すので軍関係者は勿論、各国の警察関係者も出席していると思われます。また、宇宙用航空機も販売していますので航空会社の関係者もいますね。でも、我が社のような中小規模の取引も結構いるようです」

ミレイナの下の様子を見ているが、参加者の何人かはミレイナの取引先も確認出来た。

「マジリフさん、それではミッションを開始しましょうか」

「カマル・マジリフ、ミレイナ・バステイ、ファーストフェイズを開始する、か」

刹那は左肘を軽くミレイナに突き出してみせたのだが、ミレイナは刹那の行動に驚く。あの刹那が女性をエスコートしようというのだ。

「それは、ミッション達成には必要不可欠だからですか？」

「……ティエリア以外は駄目か？」

「い、いいえ。マジリフさんにエスコートして貰えて嬉しいです。

でも、私で良いのですか？後でマリナさんに怒られたりしませんか？」

「大丈夫だろう。それよりもエスコートしなかった方が怒られそうだ」

「……もう。でも、セイエイさん。私に惚れては駄目ですよ」

「フ、了解」

ミレイナは刹那の左腕に右腕を絡まる。その時、一瞬だけ刹那の体に微弱的な刺激が走った。

（……今のは感覚は？）

刺激はすぐに消えたが、それよりも次に襲ってきた柔らかい感触の方が刹那にとっては問題だった。

「ミレイナ、近すぎだ。それに……押しつけるな！」

「あら、この程度の距離で驚いていたようでは駄目ですよ」

「やめろ、やつぱり中止だ。こんな事がティエリアの耳に入ったら大変なことになる。えーい、ミレイナ、話を聞け！」

「はいはい、ミッションスタートですう！」

かくしてミレイナに逆エスコートされながら会場に潜入した刹那だったが、この後、刹那自身も予想していなかった争いに巻き込まれるのだった。

「（ミレイナ、あと何人相手をすれば良い？）」

「（マジリフさん、更に新たに2社接近中です。残量は大丈夫ですか？）」

「（箱で持ってきたからストックは心配ないが、カートリッジへの再装填時間が欲しい。それよりもミレイナの方こそ大丈夫か？）」

「（あしらうのは慣れていますが、予想以上です。顔が疲れてきました）」

現在、刹那とミレイナは大勢の人間に取り囲まれている。

ミレイナをエスコートして会場に潜入したまでは良かったが、予想外の出来事が勃発した。それはミレイナの争奪戦だ。

刹那は普段気にせず接しているが、ミレイナは還暦を過ぎたとはいえ、その容姿は実年齢÷2の美貌を誇る。今日は普段見ることが出来ない艶やか雰囲気醸して出している。おまけにモビルスーツ

から介護用デバイスの作成までこなす才女だ。彼女の裏の顔であるソレスタルビーイングのメンバーは知られていなくても、表の顔だけでも世間一般的には十分過ぎる魅力を醸し出しているのがミレイナだ。

ミレイナは仕事上、このような席に出席する事はよくあることなのだ、いつもは独りで出席するため、身の安全も含めて早めに帰ることが多い。そのため、ミレイナと名刺交換や挨拶が出来る人間は一握りしかないためレア度が半端ないのだ。

はじめはミレイナの取引先の社長と挨拶からはじまり、ド社経由で取引をはじめた取引先が新たに加わり、更にミレイナ社長があらわれた噂をかぎつけた企業や団体の出席者が名刺交換や挨拶をするために、取り囲んでいる。なお、先ほど刹那が箱で持ってきたというのは名刺のことである。

「ヴァステイ社長、お噂はかねがね……」

「やあ、ミレイナ社長、ご無沙汰しております。今日は一段とお美しい。この後一緒にどうです？」

「ヴァステイ社長、はじめてお目にかかります。私……」

「社長、本日は以前お話ししたM・ナガノ博士をご紹介しますくて……」

……

次々とあらわれる来訪者に刹那はタクラマカン砂漠でのミッションを思い出していた。

「（セイエイさん、喉が渴いてきました）」

「（今はマジリフだが。わかった。飲み物の調達を考えよう）」

「（私が引きつけますのでお願いします）」

その時、飲み物の方から都合良くやってくる。

「お客様、お飲み物はいかがですか？」

「ありがとうございます。ソフトドリンクはあるか？」

「ウーロン茶とオレンジジュースがありますが」

「ウーロン茶をお願いします」

「かしこまりました」

刹那はウェイトレスからウーロン茶を貰うとミレイナに手渡す。

これで少なくとも後30分は戦えるはずだ、と刹那は思ったのだが、

（まで、今の女は！？）

刹那は振り返るとウェイトレスが人混みの中に消えていくのが見えた。刹那の記憶が蘇る。

「ミレイナ、ミッションプランを変更する必要がある」

「え？ちよっと、マジリフさん。どこに行くんですか」

「あの時の女があらわれた」

「はい？ちよ、ちよっと。ミレイナを独りにしないで下さい！」

（気配の消し方、このプレッシャー、間違いない）

先日、シーリン・バフティヤールと会うためにイギリスで待ち合わせをしていた時に、刹那に声をかけてきた女によく似ていたのだ。刹那はパーティー会場にミレイナを置き去りにすると、ウェイトレスの後を追うため人混みの中に消えていった。

オオカミの群れに独り残されたミレイナだったが、更に思わぬ人物があらわれた。ド社の営業部長であり、ミレイナの会社が取引をはじめるときつかけを作った人物、ソーニャ・カーリンだ。純白のスーツを纏った姿は、神秘的な雰囲気醸し出していた。

「ヴァステイ社長、遠いところをよくおいでいただきました」

「カーリン営業部長！（……凄く綺麗。まるで白い妖精みたいです）」

「今日は、お忙しいところありがとうございます」

「こちらこそ、こんな素晴らしいパーティーに御招待いただきましてありがとうございます」

「あら、今日は御二人でご出席と伺っていましたが？」

「（う、痛いところを）マジリフはちょっと本社から緊急連絡が入りまして今席を外しています」

「あら、それはそれは。ヴァステイ社長は大丈夫なのですか？マジリフさんに会えると楽しみにしていたのに」

「私の方は大丈夫です。彼は放っておいても、簡単に死にはしませんから気にしないで下さい」

「まあ、それは酷い。ウフフ」

「こんな美人を独りにする男だから当然です。ウフフ」

黒い笑いで返すミレイナだったが心情としては焦っていた。

（セイエイさん、どこに行っただんですかあ？ミレイナは心細いです。はやく帰ってきて下さい）

ミレイナの心を見透かしたのか、カーリンは積極的にアプローチしてくる。

「ヴァステイ社長、今日は社長に是非ご覧になっていただきたいものがあります。この後はお時間はありますか？」

「見せたいものですか？それは？」

「それは見てからの、お楽しみという事で」

「わあ、それは楽しみです（セイエイさん、助けてー）」

（あの女、こっちに向かったはずだが……）

刹那はウェイトレスを追っているうちに古城の庭に出てしまっていた。

ウェイトレスがパーティー会場から出て行くのを確認し追跡したのだが、庭に出たのを目撃した後に完全に見失っていたのだ。人の手が入られた庭であったが、パーティー会場とは対照的に今はひっそりしていた。

（ここからではパーティー会場の喧噪も聞こえてこない……。逆に言えば、こちらの音は会場には伝わらないわけか）

刹那は足を止めると静かに目を閉じる。

（やはり、俺とミレイナを引き離すのが目的か）

カッと目を見開くと上着のポケットから素早くボールペンを抜き取り、ナイフをように植え込みに向かって投擲した。だが、すぐに刹那は植え込みとは真逆の方向にある低木を虹色に輝くその目で睨み付ける。

「隠れても無駄だ。出てきて貰おうか。何故、俺の前にあらわれた」
「（あら、思ったよりやり手ね）さすがソレスタルビーイングのガンドムマイスター、刹那・F・セイエイですね。私の居場所をよく見破りました」

低木の後ろからメイド服のウェイトレスが姿をあらわした。その手には先ほど刹那が植え込みに投げつけたボールペンが握られていた。

（この女からは敵意は感じられないが……）

「刹那さん、このボールペンは記念に頂いて良いかしら？」

「ペンが欲しいなら先に自分の名前を名乗るが礼儀だと思うが」

「うーん、正体不明の女騎士では駄目？」

「なに！」

刹那は真横に飛び、植え込みを飛び越え、芝生に着地した。振り返ると、今まで刹那が立っていた場所にはウエイトレスが光剣を振り下ろしているではないか。ウエイトレスのメイド服のスカートはだけで、鞘突きガーターベルトが一瞬だけあらわになる。

（なんてスピードだ。回避が遅れていたら斬られていた）

「うそー、今の踏み込みを避けちゃいました！？」

「いきなり何をする！？」

「刹那さん、これはスパッドというレーザー剣ですが、危なくないように『スタン』モードにしているから。斬られても、ちょっとビリビリしびれる位だから大丈夫ですよ」

「そういう事ではない！殺気もまとわずに何故剣を振るう！？」

「それはですねえ。愛する女を助けに行くために、危険を顧みずに救出に向かおうとする殿方。ステキですわ。だから、その実力が如何ほどかお手合わせしたかった、じゃ駄目？」

刹那は再び斜め前にジャンプし、着地と同時に石畳を蹴って、樹木の幹を蹴り上げ、その反動で庭石に片手をつけて着地をする。ウエイトレスも庭石を挟んで刹那と相対する。

（この女の運動能力はイノベーターを超えている！まさか……）

それから遅れる事、数秒。幹を真横に切られた樹木が庭に倒れ、刹那の目の前の庭石が崩れていった。

「どうやら対話する気はないようだな……?」

しかし、ウェイトレスは光剣をおろすと、手を叩き拍手を始めた。

「刹那さん、凄いです。この前にお会いした時よりも上達されましたね！短期間で上達するなんてどんな魔法を使われたんですか？益々、興味が沸きました。ただのイノベーターであれば5回ぐらい斬られていますよ。刹那さん、凄いなあ」

「やはり、あの時の女か」

「覚えておいていただいて光栄です」

ウェイトレスはぺこりとお辞儀をする。

「でも、刹那さん。シーリンさんを尾行していた連邦政府の狗を追いつめたのは感謝して貰いたいなあ」

「なに!？」

「あれれ、知らなかったんですか？シーリンさんは刹那さんとマリナさんの死亡した日の出来事を調べるために、ちよつとだけ深入りしすぎたんです。それでシーリンさんは政府から目を付けられていますよ。まあ、私が片付けてしまいましたらこれ以上シーリンさんには迷惑はかからないと思いますが」

「……お前は何者だ？」

「だからはじめに言ったではないですか。正体不明の女『騎士』だつて」

刹那は二度ジャンプをして、ウェイトレスの居合いから逃れる。
今度はウェイトレスは刹那を追うことをしない。

「うーん、今の居合いも見切られましたか。やっぱり凄いなあ。刹那

那さんの身体能力にはイノベーターの範疇には収まりきらないですね。流石『刹那』は違うわ」

「やはり、ジョーカー太陽星団の『騎士』か！」

「大正解！刹那さん、凄い」

「人を馬鹿にするのは、いい加減にして貰いたい！」

「……これは大変失礼しました。決してそのようなつもりはなかったのですが、刹那さんのお気を悪くされたのであれば謝ります。申し訳ありませんでした」

ウェイトレスは丁寧に頭を垂れて刹那に謝罪をする。コロコロ変わるウェイトレスの態度と表情、そして先ほどの一連の剣撃からは殺気を感じられない事もあり、刹那も対応に苦慮していた。

（喰えない女だ。そして、強い。体内のE L S達も頑張っているが、どこまで攻撃を避け続けることが出来る？）

この女騎士とイギリスで遭遇してから刹那は同化しているE L S達との協力により徐々に体の内部の構造を作り替えていた。イオリアの残した資料から騎士の戦闘力を試算したところ、イノベーターといえども基礎体力が敵わない事があらためてわかったからだ。刹那は同化しているE L S達と相談して、E L S達の記憶の中から刹那にあった力を体に組み込み始めていた。

「刹那さんに怒られてしまいかもしれませんが……今までのウォームアップです」

ウェイトレスから笑顔が消え、真剣な表情へと変貌する。だが、それでも刹那は明確な殺気を感じ取るが出来ない。

「刹那さんは危機に陥った時こそ、実力を発揮するタイプだという

事がわかりました。それでは、私も本気を出させて貰います」
「クッ、させるか！」

今度は刹那の方からウエイトレスに飛びかかり、手刀の一撃をあびせた。先制攻撃をしかけたのだ。

「抜け殻！？」

だが、刹那が手刀の一撃を浴びせたのはウエイトレスの着ていたメイド服だった。

「隙あり！」

「チイ！」

ウエイトレスはメイド服だけを残して、宙に飛んで避けたのだ。そして、上空から光剣を振り上げ刹那に斬りかかる。刹那は右手で着ているスーツの上着を破るように引き裂き脱ぐと、光剣と交差させる。

「な、ちよつと何それ！？」

光剣と光剣が切り結ばれ弾けた。その衝撃を利用して刹那もウエイトレスもお互い一旦離れる。刹那の右手には紫色の光剣を見てが握られていた。

「これは対人用ビームサーベルだ。こちらも出力を調整してあるから殺傷能力はない」

「まさか上着から作るなんて驚いたわ」

今回のパーティー出席にあたり刹那の服装の一部はELSが擬態

した洋服である。そのELS達が洋服から過去に融合したことのあ
るモビルスーツのビームサーベルを再現してみせたのだ。

メイド服を脱ぎ捨てたため下着姿になったウェイトレスであった
が恥じらうこともせず、光剣を構える。

「でも、これで得物は対等というわけね。それでは遠慮なくいかせ
て貰うわよ!」

「（桁違いに速い!受け止められるか!?）クッ!」

ウェイトレスの光剣と刹那の光剣が交差する。刹那はかろうじて
光剣を受け止めたにみえたが、凄まじい剣圧の前にはじき飛ばされ
てしまう。芝生の上に転がるように着地して再び光剣を構えた刹那
だが、ウェイトレスはすでに斬りかかってきていた。

「分身!?!」

ウェイトレスは四体に分かれた刹那に迫る!

（本体はどれだ!?!）

「これでチェックメイトよ!」

「させるか!」

その瞬間、庭に女性の声が響き渡った。

「おやめなさい!」

「カーリン営業部長、どちらまで?（セイエイさんのほかあ）」

「この先のエレベーターです」

その頃、ミレイナはカーリンに案内され古城の中を案内されていた。ミレイナはドレスから、あらかじめ用意しておいたスーツに着替えている。また、もしもの事を考えてタイトスカートではなく、裾の長いロングスカートを履いていた。二人はエレベーターに乗り込むと、カーリンは地下階行きのボタンを押す。

「外から見たイメージとは違いますね（バイオメトリクス認証のエレベーターボタンとは凝っています）」

「ええ、景観問題から城をいじることではできませんので、地下を工事していますの」

エレベーターが動き出すが、エレベーターの表示は地下3Fを指していた。

（地下3Fに降りるにしては時間がかかりすぎです。まるで地下施設に降りていく感じです）

「地下3Fには何があるのですか？」

「着いてからのお楽しみ。さあ、ヴァスティ社長。こちらです」

エレベーターを表示上の地下3Fで降りると、ミレイナとカーリンは近代化された通路を歩く。ミレイナは通路の天井を沿って匍わされたパイプ類を見ていた。

（電源に通信系のケーブルがいっぱいですね。まるで研究施設の通路です）

カーリンは、食い入るように通路を観察するミレイナにお構いなしに、嚴重にロックされた扉を開け奥へと進む。

（この警備体制は異常です。これでは軍事施設とかわりません……
しまったです！）

ミレイナは自分の迂闊さを呪った。ここまで嚴重な警備システム、
そしてカーリンがミレイナに見せたいもの。もしかして……。ミレ
イナは最悪な状況をイメージしていた。そして、カーリンはロック
された扉の前で一旦立ち止まる。

「今日、ヴァステイ社長に是非お見せしたかった『もの』はこの扉
の向こうにあります」

「あ、あの。カーリン営業部長、お、お手洗いはどちらでしょうか
？」

カーリンはニコツと笑うところ言い放った。

「この扉の向こうにお手洗いに通じる通路があります」

（絶対嘘だ。もし、この扉の向こうにアレがあったとしたら……）

ミレイナは表情には出さずにいたが、カーリンはついに扉のロッ
クを解除する作業にはいった。

「さあ、ヴァステイ社長。こちらですわ」

（セイエイさん、もしもの時はミレイナをおいて脱出してください）

カーリンとミレイナは扉をあけて、地下最深部にたどり着いた。

「おやめなさい！」

だが、その声は二人には届かなかった。

四体に分かれたウェイトレスの分身が刹那を襲う。超高速移動による残像攻撃だった。刹那は脳量子波でウェイトレスの本体を探るが、超高速移動に対応出来ない。一体目のウェイトレスが刹那の右手のビームサーベルが弾き飛ばし、二体目が刹那の首筋を、三体目が刹那の左脇腹を、最後の四体目が刹那の胸に光剣をあてる。だが、いずれもギリギリ1cmの距離で寸止めされていた。これが「キル」モードであれば刹那の体は切り刻まれていただろう。だが、

「私の残像を見破っていた!？」

分身が収束し、ウェイトレスは再びひとつに戻るのだが、刹那の左手に握られた『二本目のビームサーベル』の切っ先は寸分違わずウェイトレスの喉を正確に狙いすましていたのだ。

「……俺の負けだ」

「え？」

刹那はビームサーベルのスイッチをオフにする。

「これはまぐれだ」

「いやいやいや、まぐれで出来る事ではないわ」

刹那はELSが擬態したベルトから咄嗟に二本目のビームサーベルを生成すると、牽制するために大きく切り払う予定だった。しかし、ウェイトレスの超高速機動に刹那の体は対応しきれず、辛うじて突きを繰り出すことしかできなかったのだ。刹那は左手のビームサーベルを放り投げると、両手を挙げて投降する意志をみせる。

「ヴァステイ社長は無関係だ。彼女は解放して欲しい」

「ちょ、ちよつと、刹那さん！我々はそんな事はしません」

「……それでは目的はなんだ？」

「いや、だから、その、私が個人的に刹那さんの実力は如何ほどかな？ってお手合わせしたくなつたので、ちよつと意地悪しただけ……なんです。てへ」

ウエイトレスは下着姿で体をくねらせるようにモジモジしながら刹那につたえる。

「刹那君、彼女の言うことは本当だ」

刹那とウエイトレスは、先ほど古城の方から聞こえてきた女性の声の他に、男性の声が聞こえてきたことに驚く。二人は声の方を振り向くと、長身の男と着飾った女性がこちらに歩いてくることを確認した。

「げ、ログナー社長にお嬢様！」

「ログナー！？」

刹那は思いがけない場所でパーティーにおける重要人物であるログナーと相對することになる。身長2メートルはゆうに超す長身だった。刹那はログナーを見上げるが、隣の女性に目をやる。女性には珍しく紺色の髪的女性だった。

（はじめの声の主は、この女性か？なぜ、彼女の声は脳量子波に干渉する？）

「ファルク・ユーゲントリツヒ・ログナーだ。この度は、部下のクニヤジコーワが先走ってしまい迷惑をかけた。許してくれ」

ログナーは意外にも刹那に頭を下げる。隣の下着姿のウェイトレスは、相変わらず体をくねらせながらも、ばつが悪そうな顔をしている。

「（ドウター社のフルク・ユーゲントリッヒ・ログナーか）俺はソレスタルビーイングのガンダムマイスター、刹那・F・セイエイだ」

刹那は、クニヤジコーワが刹那の正体を知っている以上、隠す必要がないと判断した。

「（カマル・マジリフではなく、そちらを名乗ったか）君のことは存じている」

「（やはり、こちらの情報は調査済みか）ところで、ミレイナ・ヴァステイは今どうしている？」

「ヴァステイ社長は部下が城の中を案内している所だ。彼女に危害を加えるような事はない。それに我々は君達と対立するの本意ではない」

「そうか」

とりあえず刹那はその言葉を聞き安堵の溜息をついた。ミレイナの安全は確認は出来ていないが、ログナーの言葉に嘘はないと感じたからだ。

「単刀直入に聞こう。いや、その前に」

「うん？」

「そのウェイトレスに服を着せてやってくれ。先ほどから下着姿でくねくねされると、話がしづらい」

「あらあ、それって！きゃっ」

クニヤジコーワが嬉しそうに更に下着姿で体をくねらせ、前屈みになったりと、刹那に何かをアピールする。

「……重ね重ね申し訳ない。馬鹿モン。さっさと服を着ろ！」

あわてた紺色の髪の女性がクニヤジコーワの脱ぎ捨てたメイド服を手渡して、着替えを手伝い始める。

「（クニヤジコーワさん、はやく着てください。風邪ひきますよ）」

「（お嬢様、もうちょつとだけ刹那さんに見せちゃ駄目？）」

「（嫁入り前の娘が殿方に柔肌を見せちゃ駄目です！）」

（話がすすまない）

頭を抱えるログナーの姿に刹那は何故か同情してしまった。

「すまなかった。刹那君、続けてくれ」

「……単刀直入に聞こう。モーターヘッド・ディステイニーをヴェーダに不正登録したのは貴方達だな？」

「そうだ。我々のドウターを使用してヴェーダにディステイニーを不正登録した」

「なぜ。いや、それは愚問だったか。俺とマリナが悪魔に殺されるところを見届けるために不正登録した。違うか？」

「悪趣味と言ってくれてもかまわんよ」

「でも、貴方達は運命に抗い自分たちで未来を切り開きサタンを倒してしまった」

クニヤジコーワの着替えを手伝い終えたのか、紺色の髪の女性が刹那に歩み寄ってきた。彼女はクニヤジコーワによって弾き飛ばされたビームサーベルと、先ほど刹那が投棄したビームサーベルの2本を手渡す。ビームサーベルは刹那の手に戻るとすぐに同化をはじめ

め、再び上着とベルトを形成した。

彼女は刹那の目を見ながら問いかける。

「刹那さん、答えは出ましたか？」

「デイスティニーのパイロットか！」

刹那は驚いた。——資料ではデイスティニーのパイロットは栗色の髪の毛の女性だったはずだ。女性は化けるとスメラギは言っていたが、ここまで違うのか？と疑問に思う。

「私がモーターヘッド・ナイト・オブ・ゴールド、デイスティニーのパイロット、ラキシスです」

「あの時、助けてくれたことは感謝している」

「いいえ、貴方達が呼び寄せたと言ったでしょう？それよりも、答えは出ましたか？今、こうして騎士であるクニヤジコーワさんと戦った貴方は手も足も出なかった」

「……彼女が本気だったら俺は切り刻まれていただろう」

「そうです。向こうの世界に乗り込めば、クニヤジコーワさん以上の騎士がごまんとおります。更にモーターヘッド相手にダブルオークアンタでは手も足も出ません」

ログナーは刹那とラキシスのやりとりを静観しているが、部下はそうでもないようだ。

「（司令、刹那さんは予想以上に強くなっていますよ）」

「（それは、わかっている。だが、今は黙っている）」

「（はい）」

「確かにジョーカー太陽星団に乗り込むのは自殺行為だな」

「はい」

「だから、マリナは諦めろと」

「はい」

「……もし、自分がマリナの立場だったら諦めて貰いたいのか？」

「え？」

ラキシスは刹那の言葉にドキツとした。ラキシスはジョーカー太陽星団、星団歴3239年にカラミティ星の爆発に巻き込まれ次元の果てに飛ばされていたのだ。ラキシスは、愛する主人に会うためにナイト・オブ・ゴールドと共に、次元の海を彷徨い続けているのだ。刹那もかつて地球でラキシスを世話したイオリアも知らない事だ。

「……私は刹那さんに死んで貰いたくないの」

「その気持ちに感謝する。だが、俺はマリナと『対話』をしなくてはいけない」

「『対話』？」

「俺の目的は騎士を倒しモーターヘッドを駆逐することではない」

刹那はログナーとラキシスに向かって言い切った。

「俺の目的はマリナを悪魔達から守り抜き、マリナを幸せにすることだ」

刹那の言葉にラキシスは衝撃を受けたのだが、顔を伏せるとつぶやく。

「……馬鹿」

「うん？」

「お嬢様？」

「馬鹿と言ったのよ、刹那。あなた大馬鹿よ。わからないの！マリ

ナさんが自分の命を投げ出して貴方を助けた意味が！」

「……マリナは俺を悪魔達との戦いに巻き込みたくはなかった。だから、死ぬ間際までそのことは伏せていた。マリナは俺だけでも幸せになって欲しいと願ったのだろう」

刹那の言葉にログナーは目を細める。

「だが、俺の幸せにマリナが必要不可欠だ。マリナの犠牲の上でなりたつ幸せなら俺は放棄する」

「そんな事！」

「刹那君の気持ちはわかった。だが、気持ちだけでは実現できないこともある」

ラキシスが食い下がろうとした所でログナーが割り込んでくる。

「刹那君、君は気がついていないかもしれないが、実は私も多少は腕に覚えのある騎士だ。それで君に提案だ。私と模擬戦を行い決めてはどうだ？10分間の模擬戦で君が立っていることが出来たら、我々は君がジョーカー太陽星団に行くための支援を行おう」

「（やはり、この男も騎士か！それもかなりの手練れだ）ふむ」

「（司令！それは無理です。司令相手に10分間戦える騎士なんてジョーカー太陽星団にいません！剣聖でも無理ですう〜）」

「（お前は黙っている）」

刹那はログナーが提示した条件について考える。

（……このログナーという男から、ウェイトレスとは比べものにならない強い気配を感じる。何者だろうか。果たして人間なのか？……この騎士を相手に10分間か。俺は生き残ることができるのか？）

刹那は決断する。

「わかった。10分だな」

「そうだ。10分後立っていたら君の勝ちだ。その代わり、負けたら諦めて貰おう」

「了解した」

「ラキシスお嬢様も異論はございませんね？」

「ありません」

この模擬戦は、ラキシスが仕組んだ刹那を死なせないための『刹那を説得する』ための模擬戦だ。ログナー相手では100%の確率で刹那は負ける。それで、刹那がジョーカー太陽星団行きを諦めてくれる。はじめはそう思っていたのだが、ラキシスの心中は穏やかではなかった。ラキシスは先ほどの刹那の言葉から心の中に迷いがないで、はじめていたのだ。——はたして自分に刹那とマリナを引き裂くような権利はあるのだろうか？

そんな、ラキシスの心配をよそに模擬戦ははじまろうとしていた。ログナーは刹那を城の内部に促す。

「模擬戦は何時だ？」

「刹那君さえ良ければ今からはじめたい」

「俺は問題ないが、パーティーは大丈夫なのか？」

「なに、10分間だけだ。それで全ての決着がつく」

「了解した」

地上で刹那がログナーと模擬戦を行うことを知らないミレイナはカーリンによって古城の地下最深部に連れてこられていた。

「ヴァステイ社長、今日これからお見せしたいものは、この通路の先ですわ」

「カーリン営業部長、ちょっと待って下さい」

ミレイナは通路の途中で立ち止まった。カーリンのペースから脱出するチャンスを見つげるためだ。しかし、カーリンは怪訝な顔でミレイナの顔を覗き込む。

「お手洗いですか？それでしたら、この先に」

「いいえ、違います」

「それでは？」

「……もう、やめましょう」

「何をですか？」

「茶番劇です」

「茶番劇？」

ミレイナはカーリンのペースを崩すために賭にでる。カーリンは困った顔をするが、ミレイナは構わず続ける。

「私はこの先に何かがあるのか、だいたい予想がつかしました」

「あら、それは？」

「この先は地下格納庫ですね？それもモビルスーツクラスをメンテナンスするための格納庫ではないですか？」

カーリンの表情が一瞬だけ陰しくなるが、ミレイナは氣にとめず更に続ける。

「ここに辿り着くまでの通路の配管や嚴重なセキュリティが証拠です」

「……ヴァステイ社長、面白い推理です。でも違います。当社はモビルスーツを所有していません。一企業が連邦政府の許可無くモビルスーツを所有してはいけませんからね」

「ええ、私もモビルスーツを政府の許可無く所有するのは違法だということとは理解だけはしていますし、御社がモビルスーツを所有しているとは思ってはいません」

「ご理解いただいて光栄です」

「だって、モーターヘッドがあればモビルスーツは必要ありませんものね。この先にあるのは2騎？それとも3騎？（さあ、どうですか？ソーニャ・カーリン）」

カーリンは暫し沈黙するが、すぐに笑顔でミレイナに向き合い軽く笑った。

「クス」

その笑みからミレイナは背筋に冷たいものを感じた。ミレイナはカーリンの表情が険しくなるだろうと予想していたが、それに反してニツコリとミレイナに微笑んだのだ。ミレイナは後ろに飛び下がって、カーリンと距離をとる。スカートが一瞬だけふわっと捲りあがったその時、ガーダーベルトのホルスターから拳銃を抜くとカーリンに銃口を向けた。

「ふう、やはりヴァステイ社長は凄いですわ」

カーリンは両手をあげて首を横に振るが、その表情には銃を向けられた恐怖などあらわれていない。

「（ペースを崩せない！？）私をここまで連れてきた理由は何？」

「私の目的はヴァステイ社長にこの奥の物を見ていただく事です」

「……本当かしら？」

「はい。本当です。見ていただいて気に入ったのがあればプレゼントしようかと考えていました」

「えー!？」

カーリンの申し出に流石のミレイナの思考も停止する。

（まさかモーターヘッドをプレゼント？それはどういうこと？ブラフ？）

「もし、私が嘘をついていたと感じたら、その時は私を撃っていたいても構いません」

そう言うところカーリンはミレイナに背中を見せて通路の出口に向かって歩き出した。

「ちょ、ちょっとカーリン営業部長」

再びカーリンのペースに乗せられてしまったミレイナは銃を降ろすとカーリンの思惑通り背中を追ってしまうのだった。

刹那はクニヤジコーワに案内されて古城の地下施設に連れてこられていた。天井は高く広さも十二分にある。2機ぐらいならモビルスーツを横に寝かせてメンテナンスが出来る大きさはあった。

（壁はEカーボン製か）

刹那は壁に手をあてて素材を確認する。実は模擬戦を提案した口

グナー本人がパーディー会場に顔を出した後で遅れて来る事になったのだ。そのため、こうして模擬戦会場をチェックする時間を作ることができた。もっともチェックするような事はないのだが。なお、刹那はミレイナと同じエレベーターに乗り、地下3階に案内されたのだが場所は異なっている。

（さて、ログナー相手にどうやって戦う？）

刹那は体内のELS達と相談していた。ログナーは少し腕に覚えがある、と言っていたが刹那は信用していなかった。これは正しい判断だ。

ファルク・ユージェントリッヒ・ログナー。その正体はジョーカー太陽星団の惑星デルタベルンのバビロン王国国王にして、惑星デルタベルンを統べる天照帝の親衛隊ミラージュ騎士団総司令という肩書きを持つジョーカー太陽星団最強の騎士である。

ジョーカー太陽星団では強力な騎士に与えられる称号が幾つかある。その最上級の称号が剣聖と言われる一時代に一人しか与えられない最強の騎士の称号がある。だが、最強の騎士ログナーは剣聖ではない。それは何故か？単に彼が剣聖という称号に興味を示さなかったためである。

その腕前は信じられないことだが、星団最強のモーターヘッド・E・D・ミラージュすら倒すと言われている。この話が本当であればGNDライヴ搭載型モビルスーツなど彼のの前では赤子同然である。そして、シーリンが刹那に語った西暦2319年にマリナとシーリンを悪魔から救うために、退魔の巫女エクシアが魂の契約を交わした騎士でもあった。

その最強の騎士を相手に刹那は戦うことになるのだ。刹那はログナーの素性を知らなかったが、刹那の戦士としての感が危険信号を発していた。この男は最強最悪だと。刹那も単なる模擬戦とは考えていない。これは生きるか死ぬかの実戦だった。

（やはり、この方法しかないか。これでは化け物だな）

刹那はELSに体内の再構成を依頼する。ログナーと戦うために刹那が選んだ方法とは？

「刹那さんは、怖くないですか？」

クニヤジコーワは不安な表情で刹那に話しかける。ラキシスも言葉には出さないが心境は同じだった。

「何がだ？」

「ログナー社長と戦うことです」

「……怖いな」

「そうですね！ログナー社長と戦うのを怖くない人なんていませんから。全然普通ですから。安心して下さい」

「いや、俺は負けてしまうことの方が怖い。だが、勝つ自信もないがな」

「え？」

「来たようだな」

エレベーターの到着音が鳴る。ドアが開きログナーが姿をあらわした。

「言い出した本人が遅れてしまった。刹那君。申し訳ない。今日は謝りっぱなしだな」

「いや、主催者が何度も姿を消してはまずいからな」

「そう言っていただけと助かる」

ログナーは上着を脱ぎ、ネクタイを外すと、それらをクニヤジコ

ーワに投げ渡す。

「ログナー社長。君付けは結構だ。刹那で良い」

「そうか、それでは刹那と呼ばせ貰おう。私もログナーで構わないぞ？」

「いや、年上を呼び捨てにする事は気が引ける」

「うん？」

この刹那の発言にログナーは違和感を感じる。刹那の年齢は70歳を超えている。その刹那がログナーに対して年上と言ったのだ。

「（まさか俺の年齢を読んでいるのか？）それでは、刹那。私のことは『司令』と呼びたまえ」

「了解した。ログナー司令」

このやりとりでラキシスは首を傾げるが、クニヤジコーワはログナーの真意に気がついてしまった。

（もしかして、司令は刹那・F・セイエイを！？）

「では、刹那。模擬戦に移ろうか。準備運動はいいか？」

「こちらの準備は出来ている」

「そうか。では、クニヤジコーワあれを」

「はい。社長」

クニヤジコーワは施設の奥から布がかけられた細長い台車を押してきた。刹那とログナーの目の前で台車を押してくると、台車にかけられた布を外す。台車には二振りの長剣が載せられていた。

（あれはメトロテカ・クロム鋼の剣！）

ラキシスは剣を見て驚いた。メトロテカ・クロムとは、ジョーカ―太陽星団で騎士やモーターヘッドが使用する実剣の原料となる鉱物である。その鉱物を刀匠が鍛え上げた物がメトロテカ・クロム鋼の剣である。その切れ味は、ありとあらゆる物を切断するとも言われている。ラキシスが驚くのも無理はない。模擬戦で使って良い代物ではなかったからだ。

「刹那さん、ログナー司令、ちょっとまってください。ログナー司令、模擬戦はスパッド（光剣）のスタンモードという話だったではないですか？」

ラキシスが二人を止めようとするが、刹那もログナーもそれぞれ剣を持ち、剣に問題がないか確かめていた。刹那はこの非常に重い剣をなんなく振り回し、感触を確かめる。

「刹那、重たくはないか？」

「問題ない。今の俺にはむしろちょうど良い重さだ」

「（フ、ちょうど良い重さか）楽しみにしているぞ」

二人はラキシスの言葉に耳を傾けず、距離をとりはじめた。

「刹那さん、ログナー司令！私の話を聞いてください。刹那さん、その剣で斬り合えば！」

「命がない。違うか？」

「え？ええ、そうよ。それは模擬戦で使って良い物ではないわ」

ラキシスは刹那が模擬戦のルールを勘違いしているか、よく知らないのかどちらかだと思っていたが、まったく違う認識だった。

「俺もログナー司令も模擬戦をやるつもりはない。これはマリナの運命がかかった大事な戦いだ」

「何を馬鹿な事を。もう、見てられない！」

ラキシスは刹那とログナーの殺し合いを止めさせようと割って入ろうとするが、クニヤジコーワがラキシスの腕を掴まえた。

「クニヤジコーワさん、離しなさい。私を誰だと思っているんです！」

「ラキシスお嬢様。お嬢様のお願いでも離すことは出来ません。これは刹那さんにとって大事な一戦です。もし、この一戦を止めたいのであれば私を殺してからにしてください」

クニヤジコーワは自分の光剣をラキシスに差し出す。

「クニヤジコーワさん！？」

クニヤジコーワは真剣な眼差しでラキシスを睨んだ。

「お許し下さい。お嬢様。後でどんな罰でも受けます。今はどうか刹那さんとログナー司令を信じてください。どうかお願いします」

クニヤジコーワは何度も頭を下げ、ラキシスに懇願した。

「クニヤジコーワさん……」

「ラキシスお嬢様。お嬢様を騙して申し訳ございません。私もこの模擬戦が終わりましたら罰を受けましょう。ですが、この戦いはどうか行わせてください」

ログナーもラキシスに頭を下げていた。ラキシスとしては武力介

入して力ずくでも止めることは出来たのだが、今回は二人の戦いを許可することにした。

「わかりました。ですが、お互いの命を尊重してください。命の奪い合いは許しません。これだけは約束してください」

「わかりました。このログナーお嬢様との約束は必ず守りましょう」

「了解した」

「それでは、これより『模擬戦』を開始します。制限時間は10分間。10分後、刹那さんが立っていれば刹那さんの勝ちとします。

もし、10分後立っていなかった、もしくは途中で戦いを放棄、つまり棄権の意志を表明した時点で、負けとなります」

クニヤジコーワがルールを伝える。

「刹那、こちらはいつでも良いぞ？」

「こちら大丈夫だ」

ログナーと刹那がクニヤジコーワに伝える。

（刹那、どうか死なないで）

「それでは、はじめ！」

ラキシスの心配を余所に、ついに決戦の火蓋は切っておろされた。開始早々に刹那は剣を上段に構え、斬り込んでいく。その刹那の様にラキシスとクニヤジコーワは驚いた。

「刹那さん、更に速くなっている！」

「あの動きは人間のものではないわ！」

刹那の踏み込み速度はクニヤジコーワと戦ったときよりも高速になつていた。時速にして200km/h以上の速度が出ていたのだ。だが、当の刹那本人は体の異常に苛立っていた。刹那はログナーと向かい合ったときから自分の体の動きがスローになつた錯覚におそわれていたのだ。

（俺の手足に何かが絡み付いているか？もっと、速く動け。鉛のよう
に体が重い）

刹那はログナーの目の前で跳躍すると上方から斬りかかった。ログナーは剣で力の方向を受け流す。

「刹那、考えたな。剣の鋒にスピードと体重をのせてきたか。確かに並の騎士なら真つ二つにされているだろう。だが、俺にそんな攻撃は効かん」

「クッ！」

刹那はバックステップで一旦距離をとり体制を整える。ログナーはクニヤジコーワと違い追ってくるような事はしない。再び刹那は剣を構えると、ログナーに向かって斬りかかる。

（今の俺に出来るのか！？）

「あの技は！」

「分身！？」

刹那はクニヤジコーワの分身を見よう見まねで試してみる。刹那

は2分身しか行えなかったが、左右から時間差でログナーに斬りかった。

「ほう、デイレイ・アタックか。」

迎え撃つログナーも瞬時に4つに分身した。2分身は左右の刹那の剣を受け止めて、残る2分身は刹那に反撃を行う。

「しまっ」

ログナーの太刀が刹那のそれぞれの分身を襲った。刹那は咄嗟に後方に飛び去ったが両肩には斬られた跡が出来ていた。

「剣で受け止めてダメージを軽減したか」

ログナーは刹那を斬った時の感触に違和感を感じたが、すぐにその正体に気がついた。

（刹那、体の構造をモビルスーツにしたのは名案だな。しかし）
（やはり、強い。ダブルオーガンダム内部構造を俺の肉体に再現したが、あの男にはまるで歯が立たない……）

刹那はふと、ログナーの立ち位置が試合開始直後と変わっていないことに気がついた。

（今の攻撃でもログナーは一步も動いていないだろ!?）
「刹那、それでは今度は私の番だ。これを受けても立っていることが出来たら、君の勝ちだ」

ログナーは剣を大きく振りかぶる。

「あの構えは！」

「司令、その技は駄目！」

ラキシスとクニヤジコーワは同時に悲鳴に近い声をあげた。これからログナーが繰り出す剣技を知っていたからだ。その剣技とはモーターヘッドすら一撃で倒す大技。ログナーは一気に剣を振り抜いた！

「M・B・T（マキシマム・バスター・タイフーン！）」

ミレイナはカーリンの後を追って、ついに薄暗い通路を抜けて広い空間に出た。ミレイナは突然の眩しさに片手で光を遮り、目を馴れさせる。そして、広い空間に直立姿勢で係留されている巨人達に目を奪われるのだった。

（やはり、ナイト・オブ・ゴールド……）

ミレイナの予想通り、そこは格納庫だった。それもモーターヘッドのだ。ダブルオークアンタのカメラアイの映像とヴェーダの資料から概要は把握していたとはいえ、黄金色の美しさに圧倒されてしまう。

（それ以外のモーターヘッドも！？）

ミレイナはナイト・オブ・ゴールド以外にも、はじめて目にするモーターヘッドが数騎係留されている事に気がつく。奥の方は格納

庫の照明を落としているらしく、シルエツトがわかりにくかったが、いずれにしても異様な外見だという事は感じ取れた。

「カーリン営業部長、これがお見せしたかったものですか？」

「ええ、そうです」

ミレイナは通路の手摺りによりかかると大きく溜息をつく。カーリンもミレイナの側で格納庫に係留されたそれらを見つめている。

「ヴァステイ社長、お気に召しませんでしたか？」

「……カーリン営業部長、いえ、ソーニャ・カーリンさん。貴方達是一体何者なのです？我が社に取引を持ちかけてきたのはこれが目的だったですね？」

「いいえ、我が社としては御社の製品を気に入ったので取引をお願いしたというのは事実です」

「これを見せられた今としては、にわかには信じがたいです。でも、嫌な気分ではありません……」

「（やはりドウター社はその隠れ蓑ということですか）私達に近づいた理由は、マリナ・イスマイル、いえ、退魔の巫女の関係者としてですね？」

「はい」

カーリンはミレイナに向き合つと姿勢を正す。

「あなたたちの目的は？ここにあるモーターヘッドだけで地球を侵略できそうですが、そんなベタな理由ではないでしょうし……」

「はい。ミレイナ・ヴァステイ様、我々は、ある御方の命によりこちらの世界に派遣されています」

「ある御方？」

「名前を申し上げることは出来ませんが、私のマスターであるログ

ナーより上の命令系統で私達は動いております」

ログナーより上の命令系統、すなわちログナーの所属する組織の上位からの命令でログナーとカーリンをはじめとする組織は地球に来ていた事になる。

「（私のマスター？）あなたたちの所属組織は？」

「それをお話してしまつたら我が主の名前がわかつてしまいます」

「それではラキシスさんとナイト・オブ・ゴールド・デイスティニーとあなたたちの関係は？」

「これは……まさかラキシスの名前をご存じとは驚きでした。もつとも、モーターヘッドをご存じだつたヴァステイ様ですから、ナイト・オブ・ゴールドの事も、その搭乗者であるラキシスの事も知つていても何らおかしくありませんものね。さすが、ソレスタルビーイングのミレイナ・ヴァステイ様です。ラキシスは遠い未来に我が主の妻となる御方。さる理由により、ジョーカー太陽星団から飛ばされ異次元の世界を彷徨つておられます。ラキシスが地球に降り立ったのは、まったく別の理由です。こちらの理由も申し上げることが出来ません」

カーリンもここまで話をしてしまうと、ミレイナが我が主の名前にたどり着くのにそう時間はかからないだろうと予想した。

「（カーリンさん達の目的とラキシスさんの目的は違うと言うことですか？）それでは、質問を変えます。西暦2139年、マリナ・イスマイルとシーリン・バフティヤールを悪魔から救つたのはログナー社長と貴女ですね？」

「はい。我々の目的をお話することは出来ませんが、決してあなたたち地球人と敵対することが目的ではないと約束いたします」

ミレイナは予想通りとはいえ衝撃を受けた。マリナとシーリンの前に出現した機動兵器は、刹那の予想通りモーターヘッドという事になる。モーターヘッドは副座式だ。一人はモーターヘッドを操縦する騎士、そしてもう一人はモーターヘッドをコントロールする有機コンピューター・ファティマだ。

（それでは、ソーニャ・カーリンさんの正体は……）

ミレイナはモーターヘッド以上に目の前の女性、いや女性型有機コンピューター、ファティマのソーニャ・カーリンに釘付けになっていた。彼女からはイノベイドとは違う惹きつけられる魅力を感じた。

「あ！」

「どうなされましたか？」

ミレイナは、ログナー社長が騎士であるならば、もし刹那がログナーと会ってしまったら！と想像してしまったのだ。

「刹那・F・セイエイと連絡を取りたいのですがよろしいですか？」

「それは出来ません」

「何故です！」

「現在、我が主ログナーと刹那さんは対話中だからです」

「え？対話中？」

「はい。詳しくは申し上げられませんが、男同士の拳の語り合いと
いうか何というか……」

「はい！？」

刹那とログナーの対話の内容について、どう説明すれば良いのか
カーリンも困っていた。『ラキシスを』説得するための模擬戦を口

グナーが計画したのだが、メトロテカ・クロム鋼の剣を振り回して戦っているとは言えなかった。

「それでヴァステイ様、気に入ったモーターヘッドはありましたか？」

「（話題をそらされたです）カーリンさん、『様』付けは結構です」
「それでは、私も『さん』付けは結構です。ヴァステイ社長、気に入ったモーターヘッドはありましたか？」

意外にもミレイナは首を横に振る。

「あら、気に入りませんでしたか？ ナイト・オブ・ゴールドでも、奥のあの黒いゴツイのも魅力的だと思いますが」

「確かにナイト・オブ・ゴールドをはじめとするモーターヘッドにはモビルスーツにない魅力があります。ですが我々（ソレスタルビーイング）に大量殺戮殲滅制圧兵器は必要ありません」

ミレイナは自分の言ったことにハッと気がつく。

「いえ、これはカーリン営業部長の事を言ったのではなく、モーターヘッドの存在意義は我々の理念に反するというかその何というか……」

「気になさらずに結構です。我々はモーターヘッドの制御を行うことを第一に生み出されたのは事実ですから」

「ごめんなさいです」

西暦2090年にイオリア・シュヘンベルグは偶然、ナイト・オブ・ゴールド・ディステニーとそのパイロット、ラキシスと出会う。イオリアはラキシスからモーターヘッドや騎士、ファティマの情報を得ていたにもかかわらず、モーターヘッドを作ることはな

った。純粹な殺戮兵器であるモーターヘッドでは人類の革新と来るべき対話に備えることはできなかったからだ。逆にモーターヘッドを建造することにより火種が大きくなる可能性を危惧していた。事実、ジョーカー太陽星団では大国間の無益な争いが年百年、何千年と続いていた。

「ですが、これから刹那さんが向かう先では、サタンだけではなくモーターヘッド戦も予想されます。失礼ながらGNDドライブも停止しているダブルオークアンタではモーターヘッドと剣を交えることすら、ままならないと思いますが」

ミレイナも凶星をつかれて返す言葉なかった。GNDドライブは原因不明の停止状態、クアンタもELSコントロールによる改修中だ。コックピットシステムの入れ替え作業を行っているとはいえ、所詮は付け焼き刃にしか過ぎない。GNDドライブを稼働させた状態でもモーターヘッド相手に太刀打ちできるか難しい状態なのに、現在の状況で絶望的なのはクアンタ改修計画の責任者であるミレイナ自身自身が良くわかっていた。

「……え？」

「あら？」

ミレイナとカーリンが同時に驚きの声をあげる。突如、格納庫内にエンジン音が響き渡る。

「モーターヘッドが動きはじめた!？」

「ラキシスがないのにどうして？」

「え？」

これほどまでに冷静だったカーリンも突然の事態に慌てているこ

とがミレイナにはわかった。そう、係留されていたナイト・オブ・ゴールドが突然起動して、ミレイナとカーリンのいる通路に向かって歩き出してきたのだ。

カーリンはミレイナの前に庇うように割り込むと両手を広げる。

「今すぐ止まりなさい。彼女に危害を加えることは私が許しません」

「……カーリン営業部長、大丈夫。『彼』はそんな事はしらないと思います」

「ヴァステイ社長？」

ナイト・オブ・ゴールドはミレイナの目の前で立ち止まる。人間の眼と同じ構造の2つの物がミレイナを射貫くように見つめた。まるで何かを訴えかけるように。

「私にあなたを連れて行けというのね？」

ナイト・オブ・ゴールドが静かにうなずく。カーリンはその様子に驚いていた。

（そうか、こうなる事を見越して……）

カーリンは再びミレイナに向き合う。

「これは約束でした。ヴァステイ社長が気に入られたというのであれば、ナイト・オブ・ゴールドを差し上げても構いません」

ミレイナは微笑むとカーリンに応えた。

「いいえ、この子はラキシスさんの大切なパートナー。その大事なパートナーを奪うわけにはいきませんです」

「それでは、約束が……」

「カーリン営業部長、この子が私の元に来ることを許可していただけませんか？勿論、ラキシスさんの許可を取ってからになると思いますが」

「わかりました。その代わり条件がございます」

「条件？」

カーリンはカバンから分厚い封筒を取り出すとミレイナに差し出した。

「借用証が入っているわけではなさそうですが？」

「どうか開けて中を確認してください」

ミレイナが封筒を開けてみるが、開けた瞬間に体に電流が走ったような感覚を味わう。

「な、これは！？」

封筒には白い一冊のバインダーが入っていた。表紙や裏には何も書かれていなかったが、背表紙にだけ菱形の図形が一つだけ描かれていた。ミレイナはバインダーの表紙を捲るとその内容に息をのむ食い入るように数ページ捲るとバインダーを閉じた。

「私がこれを見ても宜しいんですか？」

「我が主よりお渡しするように預かってきた物です」

「私が悪用することを考えていないのですか？」

「ヴァステイ社長がそのような事をなさらないのは我々は存じ上げています」

「まったく、カーリン営業部長の名演技には降参しましたです。全てこうなることを計算済みなのですから」

ミレイナはバインダーを再び封筒に戻す。

「あら？私はそのようなつもりはないのですが」

「もう良いです。これは確かに受け取りましたです」

「確かにお渡しいたしました」

その後、ミレイナはカーリンとナイト・オブ・ゴールドの輸送について算段を行うと格納庫を後にした。二人は再びエレベーターに乗り込む。

「カーリン営業部長は、やっぱり謎の女性ですね」

「あら、そんな事を言ったらヴァステイ社長だって十分謎の女性だと思いますが」

「それは、どうかしら？」

「まあ？」

「ウフフ」

カーリンの表情にも再び笑顔が戻る。それを見たミレイナもつられて笑顔になった。

「あ、ああ、あ……」

ラキシスは、その惨状に言葉を失っていた。

今、床には刹那『だった物』が横たわっている。刹那はログナーが繰り出した大技、マキシマム・バスター・タイフーンMBTを喰らったのだ。

ELSの力を借りてモビルスーツの機体構造を自分に体に再現してみせたのだが、MBTはモーターヘッドすら一撃で倒す剣技である。

1/10サイズの大きさの刹那が喰らえばどうなるか想像は難しくはなかった。胸に大きな穴が開き、衝撃で手足はバラバラになっていた。

「……司令」

クニヤジコーワは自分の上司であるログナーを信じていたが、まさか刹那相手にMBTを繰り出すとは思ってもいなかったのだ。

「……ログナー司令！私との約束を忘れたのですか？」

ラキシスはログナーを睨みつける。しかし、ログナーは気にもとめず涼しい顔で言つてのけた。

「お嬢様。まだ模擬戦は終わっていません」

「なっ！まだそんなことを！刹那さんが死んだ今、模擬戦は終わりです」

「あっ」

ラキシスはクニヤジコーワの光剣を奪うとログナーに斬りかかった。しかし、どういうわけか光剣はログナーの首筋ぎりぎりで止まっていた。

「……どうして、避けようとも受け止めようともしないのです？」

ラキシスは、今でも直立不動で刹那の方向を見ているログナーを疑問に思う。彼は命乞いをするような騎士でもないが、その姿勢はまだ戦いが続行中だと言わんばかりのものだったからだ。

「お嬢様、まだ模擬戦は終わっていないからです。クニヤジコーワ、

後何分だ？」

「は、はい。後4分30秒です」

「……司令は、まさか刹那さんがまだ戦うと思っているの？」

「棄権の意志表示がない限り模擬戦は終わりません」

「何を馬鹿な事を。刹那さんは貴方が殺したではありませんか！」

「確かに刹那が死んでいたら、私が殺したことになるでしょう」

「司令は、あの状態で死んでいないとも言い張るのですか!？」

「はい、お嬢様。そもそも、お嬢様は刹那・F・セイエイを誤解している」

「私が刹那さんを誤解している？」

「刹那は人間ではありません。『刹那』です。そして、同時に彼はマリナのガンダムです。この程度の攻撃で死ぬようならばサタン達からマリナも『彼女』も守ることは出来ないでしょう」

「ログナー司令、貴方、まさか？ だけど、刹那はすでに、え？」

ラキシスはバラバラになった刹那の亡骸を見て驚いた。バラバラになったはずの手足がいつのまにか体に繋がっていたからだ。

「あれ？ お嬢様、剣もありません！」

「え！」

刹那が握っていたメトロテカ・クロム鋼の剣が消えていた。MB Tを喰らったときも刹那は右手に握っていたものだった。

「クニヤジコーワ、時間は！」

「後2分28秒です」

「チツ、早くしろ刹那」

「ログナー司令……」

ログナーから不意に発せられたその一言から、ラキシスはログナーの真意を理解した。ログナーが刹那をジョーカー太陽星団に派遣することを賛成した理由、そして模擬戦を私に提案した理由。

ラキシスは光剣をおさめると、ログナーから離れて再びクニヤジコーワの側に戻る。そして、クニヤジコーワに光剣を返すのだった。

「ラキシスお嬢様？」

「これは不要になりましたのでお返しいたします。私もこの模擬戦の結末を見届けることにいたします」

「はい、お嬢様」

「む？」

無惨にもバラバラになっていたはずの刹那の亡骸が、いま再び一つの個体に修復されようとしていた。

「残り時間は？」

「後1分9秒です」

「チッ」

いつまでも立ち上がりうとしない刹那に対して、ログナーは苛立ちはじめていた。剣を上段に構えると一気に振り下ろす！

ログナーが放った激しい衝撃波が刹那を襲う。しかし、衝撃波は刹那に直撃せず目の前の床を吹き飛ばすだけだった。

「……立て、刹那！」

「……お、おれ、は」

「刹那、貴様はそれでもガンダムか！」

「お、俺は……」

「うそ、あのバラバラの状態からどうして？」

「ELSの自己修復能力でもここまでは修復できないはず」

ラキシスもクニヤジコーワも、立ち上がろうと床の上を這いずり回る刹那に驚いていた。ジョーカーでもこのような事例はないからだ。

「お、俺は」

「刹那さん、お願い立ち上がって！」

「刹那さん！」

ラキシスもクニヤジコーワも立ち上がろうと必死の刹那を応援していた。

刹那はついに肘を立て上半身を起こし始めていた。MBTの攻撃により、損壊した胸部も修復されつつあった。

「立て、刹那！貴様はガンダムだろう？」

「お、俺が、俺が」

「クニヤジコーワさん、残り時間は？」

「あと23秒」

刹那は片膝を付き、いよいよ立ち上がる、

「俺が、俺は……」

「あと12秒」

「刹那さん、早く立って！お願い」

「あと8、7、6」

その時、刹那の膝が床から離れ再び二本の足で立ち上がった！

「俺は、マリナのガンダムだ！」

「よくぞ言っただガンダム！」

ログナーは剣を構え刹那に斬りかかった。

「ゼロ！」

「刹那！」

「司令！」

斬りかかったログナーの剣を刹那は緑色の刃の剣で受け止めていた。

「貴様の勝ちだな」

不敵な笑みを浮かべたログナーのメトロテカ・クロム鋼の剣が静かに折れ床に突き刺さる。正確には折れたのではない。刹那が構成した緑色の刃の剣が、メトロテカ・クロム鋼の剣を斬ったのだ。緑色の刃の剣、それはダブルオークアンタのGNソードVをELSが取り込んだメトロテカ・クロム鋼の剣を元に再構成した剣だった。

「……俺は勝ったのか？」

刹那はよろめくとログナーにもたれかかる。

「ああ」

「そうか、これでマリナを、助けに行ける……な」

「フン、調子に乗るな。おい、クニヤジコーワ！」

「は、はい、司令。えーっと、勝者、刹那・F・セイエイ！」

「ぼさつと見ているな。こいつを介抱してやれ。男に抱きつかれる趣味はない」

クニヤジコーワは今にも倒れそうな刹那を抱き留めると、静かに

床に寝かせる。そして、嬉しそうに刹那に膝枕をしてやるのだった。ラキシスも刹那の側に座ると、M B Tの直撃を受け再生途中の部位に静かに手をおいた。

「まったく、無茶なことをやる奴だ」

ログナーはクニヤジコーワの膝の上で横たわる刹那に向かって言い放った。

「どういう事ですか？」

「ラキシスお嬢様、刹那は我々騎士との能力差を埋めるべく、自分の体の構造をモビルスーツのそれに似せて再構築したのです。恐らく刹那が選んだモビルスーツは、ガンダムあたりでしょう。違うか？」

「ああ、そのとおりだ」

刹那は力なくこたえる。

「ログナー司令、そんな事が出来るのですか？」

「E L Sと同化した刹那ならではと言ってしまえばそれまでですが、マリナ・イスマイルを助けるためにE L S達も力を貸したのでしょう」

ラキシスは今では刹那にマリナを諦めるように言い聞かせていた自分に後悔していた。もっともラキシスが諦めるように言ったのは理由があつたのだが。

「だが、G Nドライブ搭載機を再構築するなんて無茶もいいところですよ」

「司令、それは？」

「答えは簡単だ。刹那にGNドライブは搭載されているか？」

「ああ、確かに」

「そうになると、GNドライブに代わる動力源が必要になる。自身の精神力をそれにあてたのだろう」

「だからこんなに……」

刹那はクニヤジコーワの膝の上からピクリとも動かなかった。いや、動けなかった。

「ラキシスお嬢様、これで刹那をジョーカー太陽星団に派遣することをお許しただけますね？」

「……刹那さんは模擬戦に勝ちました。私ももう反対できません」

「ラキシスお嬢様ありがとうございます。それでは私の罰ですが……」

……

ログナーは折れた剣をラキシスに差し出す。折れたとはいえ、殺傷能力は十二分にある。ラキシスに自分を斬れ、という意思表示だ。

「はい。私もどのような罰でも受けます」

クニヤジコーワもラキシスに光剣を差し出す。

「や、やめろ。ラ、キシス。二人を……許してやってくれ」

意識が朦朧としている刹那であったがラキシスに手を伸ばし、やめさせようとする。ラキシスは刹那の手を握り優しく微笑むが、すぐに真剣な顔で顔で二人に向き合う。

「二人ともどんな罰でも受けると言いましたね？」

「はい」

「それでは、ログナー司令とクニヤジコーワさんの罰を申し伝えます」

古城の一室。

「刹那さん、私の話を信じてくれて、ありがとうございます。」
「……ここまで来ると信じないわけにはいくまい」

刹那はラキシスからジョーカー太陽星団への派遣を反対していた理由を聞かされていた。刹那はラキシスから感じる脳量子波によって言葉以上にイメージとして彼女の話を感じ取っていた。

（先ほどは彼女は紺色の髪だった。しかし、今は栗色の少女にしか見えない。これは、どういうことだ？）

「それでは話を信じてくれた御礼にプリンを食べさせて差し上げます」

「いや、それは自分で」

「刹那さん、何を言っているんですか。お嬢様からプリンを食べさせて貰えるなんて、羨ましい限りですわ」

「クニヤジコーワさん、それでは刹那さんを押さえてください」

「はい、お嬢様」

刹那は起き上がろうとするが、クニヤジコーワに両肩を掴まれてしまう。

「まで、はなせ。なんて力^{パワー}!!」

「初公開ですわ」

「あら？」

数回ノックする音とともに部屋のドアが開く。

「ヴァステイ社長、カマルさんはこちらの部屋に居るそうです。え？」

「あー！？」

地下格納庫から再び古城に戻ったカーリンとミレイナは刹那の姿を見て驚きの声をあげた。

「セイエイさん、一体これはどういうことですか！」

「（ヴァステイ社長、今はカマルさんですよ）あらあら、これはお邪魔だったかしら？」

刹那は地下の模擬戦会場から古城の一室のソファーに寝かされ女性二人の手厚い介抱を受けていたのだ。

MBTの一撃から蘇生したとはいえ、体の修復のため体力も精神力も使い果たし身動きができない。それをいいことにラキシスとクニヤジコーワのオモチャにされていたのだ。クニヤジコーワに膝枕され、ラキシスにスプーンでプリンを食べさせられている所を二人に踏み込まれたのだ。

「私をパーティー会場に放置したと思ったら、メイドさんに膝枕、こんな可愛い女の子にプリンを食べさせもっているなんて予想外でした。やっぱり若い娘が好みなんですか！好みなんですわね。わかりました」

「バステイ社長の話では彼は売約済みだという事でしたが、違ったようですね」

「ま、まで、ミレイナこれは誤解だ」

「（怪我人は黙っていてください）刹那さんは私達が面倒を見てい

ますので、どうぞ心配なさないでください」

刹那は何か動くようになった右手をあげてミレイナに必死に訴えかけるのだが、クニヤジコーワの余計な一言で耳にはいることはなかった。

「カーリン営業部長、先ほどのバインダーにあったインフェルノナパームを貸してください」

「対人用のフレイムユニットでは駄目かしら？」

ログナーは古城の窓から外の様子を見ていた。

「刹那とヴァステイ博士は帰ったようだな」

「はい、ログナー司令。刹那さんは先ほど、ヴァステイ社長と一緒に帰られました」

「そうか。カーリンは？」

「ラキシスお嬢様とスケジュールの調整中です」

「ふむ」

ログナーはカーリンから地下格納庫の報告を受けていた。ナイト・オブ・ゴールド・デイスティニーとラキシスは、近日中にミレイナの会社に『出向』する事になった。そして、ログナーも同じく出張の予定が入っていた。そのため、クニヤジコーワはログナーのスーツケースにテキパキと荷物を詰めながら受け答えをしていたのだ。

「俺とカーリンの留守中は頼むぞ」

「私も会社の方の調整がつき次第、すぐに司令の後を追いかけます」
「刹那の出発までにそれほど余裕がない」

「わかっております。これで完了です」

クニヤジコーワはスーツケースに荷物を詰め終わるとログナーに報告した。

「それにしても、司令」

「なんだ？」

「今日は司令の優しさを垣間見ることが出来ました。刹那さんをジョーカーに派遣するためにお嬢様相手に一芝居っただけではなく、剣の手ほどきをしてさしあげるなんて」

「フン。あーうるさい。何のことかしらんわ」

ログナーはプイツとそっぽを向く。その様子がクニヤジコーワから見たらとても可愛らしく見えた。

（我が家の言い伝え通り、ログナー司令は照れ屋さんです）

第9話 刹那という種（後書き）

次回予告

刹那はついにジョーカー太陽星団に向けて旅立つ。

後書き

第9話を読んでいただきましてありがとうございました。次回の第10話で第2章は終わりです。

さて、冒頭で刹那がアウデイス8Lを運転しています。元ネタは映画のRONINです。Lというのはロングバージョンです。S8は東京モーターショーで見ましたが、格好良かったですね。450ps 5.2L V10エンジン搭載です。ミレイナは後部座席に座っていましたが、基本的にアウデイはドライバーズカーなので運転席の方が楽しいです。S8も例外ではありません。アウトバーンをかつ飛ばしたら楽しいでしょうね。劇中ではELSが擬態とありますが、この頃のアウデイは映画アイ、ロボットのような車両になっているからELSも擬態しやすいのかも？

FS以上難しいアウディネタはこの辺りにして、今回の話で書かせていただきましたが本作品の刹那はジョーカーの騎士以上の化け物です。体の構造を弄って他生命体の体細胞を構成したり、モビルスーツの内部構造を構成したりします。また、物理攻撃では簡単に死にません。そのかわり、活動するためには精神力を消耗したり、再生するために有機物や無機物を取り込んだり、回復に時間がかかったりします。

第7話でイエッタがインフェルノナパームの使用を推薦した理由は実はここにあったりします。そして、また刹那がマリアを愛せない理由というのもこれだったりします。この件に関しては第9話でマリナのガンダムになると言っていますから決心したようです。

最後にお知らせ。

第3章から投下する文章の量を変更します。活動報告にも書かせていただきましたが、第2章に入ってから長文投降が続き、読んでいただく皆様にはご迷惑をおかけしているからです。また、1話完成までに時間がかかるというのもあります。

第3章より1章5話構成ではなく、5000文字前後もしくはシーン毎に区切って投下する手法に変更しようか考えています。その場合、投下時期は不規則になると予想されます。タイトルに関しては第11話シーンxxみたいな形で投下するかもしれません。

リアルも忙しくなってきたので投下時期については活動報告でご連絡いたします。

それでは第10話もよろしく願いします。また、ご感想・Web拍手お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5039y/>

機動戦士ガンダム00 - おとぎの世界へ -

2012年1月15日01時51分発行